

多賀城市文化財調査報告書第24集

市川橋遺跡

—平成元年度発掘調査報告書—

平成2年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

市川橋遺跡

—平成元年度発掘調査報告書—

序

多賀城市は、東北地方の中枢都市仙台市に隣接し、近年いちじるしく人口が増加しております。当市は、「史都・多賀城」をスローガンに特別史跡の整備・復元と、史跡と調和するまちづくりに努めています。

しかし、国府多賀城を取り巻く周辺地域では、近年、小規模な宅地開発が増加してきており、当センターでは毎年数ヶ所の発掘調査を実施しております。

さて、今回発掘調査が実施した市川橋遺跡からは、平安時代の水田跡と居住地を広げた整地層、そして建物跡や溝跡が発見され、また、出土した土器類の中には、墨書きされた土器が多くありました。多賀城跡を取り巻く集落を解明するうえで、貴重な資料となるものと思われます。

本報告が多少なりとも市民の文化財に対する啓蒙の一助となれば幸いです。

平成2年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

所長 斎藤一司

例　　言

1. 本書は、平成元年度の国庫補助事業として実施した「山王遺跡他発掘調査」の結果をまとめたものである。
2. 本調査は、市川橋遺跡の第8次調査と第9次調査にあたり、第8次調査を「IB-8」、第9次調査を「IB-9」の略称を用いて記録している。
3. 本書の執筆・編集は、文化財保護係職員の協力を得て、滝口 卓が担当した。
4. 本書の作成にあたっては、佐藤悦子、菊池 豊、山田紀子、柏倉霜代、須藤美智子、熊谷 純子、黒田啓子、木村梅子、小野寺恵子、平山節子、赤間かつ子、阿部トシ子、高野敏子、角田静子、渡辺ゆき子の協力を得た。
5. プラント・オパール分析は、〈有〉古環境研究所（埼玉県大宮市所在）に依頼した。
6. 調査区の実測基準線は、国家座標の方位をとっている。
7. 調査及び遺物の整理において、下記の方々に御助言・御協力を賜わった。
桑原滋郎、高野芳宏（宮城県多賀城跡研究所）、佐藤和彦（多賀城市立第二中学校）
8. 本書の土色については、『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄：1976）を使用した。
9. 調査、整理に関する諸記録及び出土遺物は、多賀城市埋蔵文化財調査センターが一括保存している。

調査体制

調査体制は、次のとおりである。

多賀城市教育委員会 教育長 櫻井 茂男

○社会教育課文化財保護係

社会教育課長 名取 恒郎

主幹兼文化財

保護係長 大場 義男

主 倉査 大場 正彦

主 直木 伊藤 重人(1月配置変)

社会教育主事 伊藤 建朗

○埋蔵文化財調査センター

所 長 斎藤 一司

主任研究員 高倉 敏明

研究員 滝口 卓

石川 俊英

技 師 石本 敬

千葉 孝弥

相澤 清利

嘱 託 鈴木 久夫

滝川ちか子

調査要項

〈第8次調査〉

1. 遺跡所在地：宮城県多賀城市高崎字水入46番2
2. 調査期間：平成元年5月15日～7月14日
3. 調査面積：434m²（対象面積925.70m²）
4. 調査協力者：竹谷英昭、沖井康仁、今野征勝（地権者）、多賀城市第二学校給食センター
5. 調査参加者：井口祐二（調査補助員）、加藤文一、加藤昭一、菅野文夫、大場正司、佐々木忠志、富樫 章、赤間かつ子、小野寺恵子、平山節子、木村梅子、秋山悦子、伊藤多鶴子

〈第9次調査〉

1. 遺跡所在地：宮城県多賀城市浮島字高平14番
2. 調査期間：平成元年9月18日～12月25日
3. 調査面積：480m²（対象面積1,020m²）
4. 調査協力者：加藤 基、木代 聰（地権者）、多賀城市第二学校給食センター
5. 調査参加者：菊池 豊（調査補助員）、大場正司、加藤昭一、菅野文夫、佐々木四郎、水越朝治、松本喜一、芦野しづ子、阿部けい子、阿部敏子、阿部美智子、遠藤一代、大友良子、小野玉乃、大山貞子、菅野恵子、熊谷あつ子、桜井エイ子、菅原絹代、高野敏子、武田リキ、角田静子、渡辺園恵

本文目次

序 文

例 言

調査体制

調査要項

市川橋遺跡の立地と環境	1
第8次調査	3
I. 調査に至る経緯	3
II. 調査方法と経過	3
III. 調査成果	4
〈基本層位〉	4
〈発見遺構と遺物〉	7
〈堆積層出土遺物〉	23
IV. まとめ	25
第9次調査	35
I. 調査に至る経緯	35
II. 調査方法と経過	35
III. 調査成果	36
〈基本層位〉	36
〈発見遺構と遺物〉	36
IV. まとめ	58
V. プラントオパール分析報告	61

市川橋遺跡の立地と環境

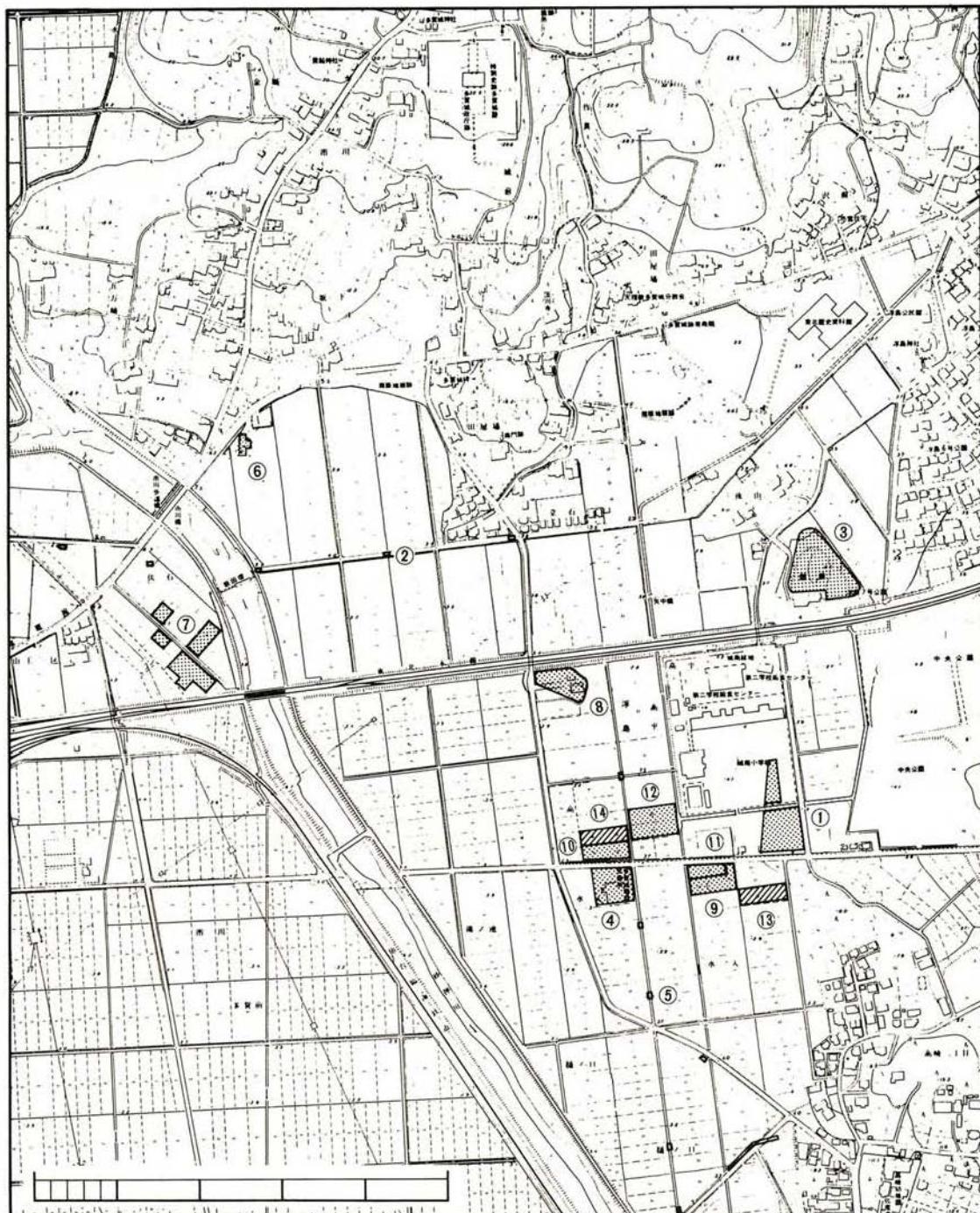
市川橋遺跡は、多賀城市市川・浮島・高崎地区に所在し、特別史跡多賀城跡の西側から南側一帯にかけて位置している。本遺跡は、多賀城を二分して流れる砂押川によって形成された標高2~3mの自然堤防上に立地し、南北1.6km、東西1.4kmの広範囲にわたる遺跡である。

本遺跡は、奈良・平安時代の遺跡であり、これまでに実施された発掘調査では、奈良・平安時代の掘立柱建物跡や井戸跡等が検出され、また、市川字伏石地区や浮島字高平地区では、平安時代の水田跡が検出されている。本遺跡をはじめとし、多賀城跡の周辺遺跡は、国府多賀城を取り巻く大規模な集落を構成する遺跡で、「多賀城」の国府域を考える上で重要な遺跡である。

なお、これまでの本遺跡の調査成果については、下表のとおりである。

調査年次	調査地区	おもな成果		年代	原因
		検出遺構	出土遺物		
多賀城跡 第22次調査 (昭和8年度)	浮島字高平	掘立柱建物跡、竪穴住居跡	土師器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、瓦、土製カマド	平安時代	城南小学校建設(註1)
昭和53年度	市川字伏石、館前、高崎字樋ノ口	溝跡	土師器、須恵器、瓦、織錘車	古墳時代後期	仙塩流域下水道事業(註2)
昭和54年度	高崎字水入	掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡、土塙	土師器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、赤焼き土器、瓦、硯、木製品	平安時代	第二塩釜電話交換局建設(註3)
昭和54年度	浮島字高平、高崎字水入、樋ノ口	掘立柱建物跡、溝跡	土師器、須恵器	平安時代	下水道埋設工事
多賀城跡 第37次調査 (昭和55年度)	市川字館前	掘立柱建物跡、一本柱列跡、道路遺構、井戸跡、土塙	土師器、須恵器、須恵系土器、灰釉陶器、綠釉陶器、青磁、白磁、瓦、硯、木製品、鉄製品、古鏡	奈良・平安時代	(註4)
第1次調査 (昭和56年度)	市川字伏石	水田跡、道路状遺構、溝跡	土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、綠釉陶器、瓦	平安時代	宅地造成工事(註5)
第2次調査 (昭和57年度)	市川字伏石	水田跡、溝跡	土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、綠釉陶器	平安時代	宅地造成工事(註6)
第3次調査 (昭和58年度)	浮島字高平 (大臣宮)	掘立柱建物跡	土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦、石器	平安時代	宅地造成工事(註7)
第4次調査 (昭和58年度)	高崎字水入	溝跡	土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、瓦、木製品、鉄製品	平安時代	宅地造成工事(註8)
第5次調査 (昭和59年度)	浮島字高平	掘立柱建物跡、一本柱列跡、溝跡、土塙、水田跡	土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、綠釉陶器、瓦、硯、木製品	平安時代	宅地造成工事(註9)
第6次調査 (昭和61年度)	高崎字水入	溝跡、土塙	土師器、須恵器、灰釉陶器	平安時代~近世	宅地造成工事(註10)
第7次調査 (平成2年度)	浮島字高平	井戸跡、土塙、溝跡、水田跡	土師器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、瓦、硯、木製品、漆紙文書	平安時代	宅地造成工事

第1表 市川橋遺跡調査年次・成果表



No.	調査名 称	調査年次	No.	調査名 称	調査年次
①	多賀城跡	第22次	和調査	48年	昭58年
②	仙塙流域	水道試掘	和調査	53年	昭58年
③	前館遺跡	下水道発掘	和調査	54年	昭59年
④	水道入水跡	和調査	和調査	54年	昭61年
⑤	下水道埋設工事	和調査	和調査	54年	昭平元
⑥	多賀城跡	第37次	和調査	55年	昭平元
⑦	市教委第1・2次	調査	和調査	55年	昭成年
⑧	市教委第1・2次	調査	和調査	3年	昭成年
⑨	市教委第1・2次	調査	和調査	4年	昭成年
⑩	市教委第1・2次	調査	和調査	5年	昭成年
⑪	市教委第1・2次	調査	和調査	6年	昭成年
⑫	市教委第1・2次	調査	和調査	7年	昭成年
⑬	市教委第1・2次	調査	和調査	8年	昭成年
⑭	市教委第1・2次	調査	和調査	8年	昭成年

第1図 調査区位置図

市川橋遺跡第8次調査

I 調査に至る経緯

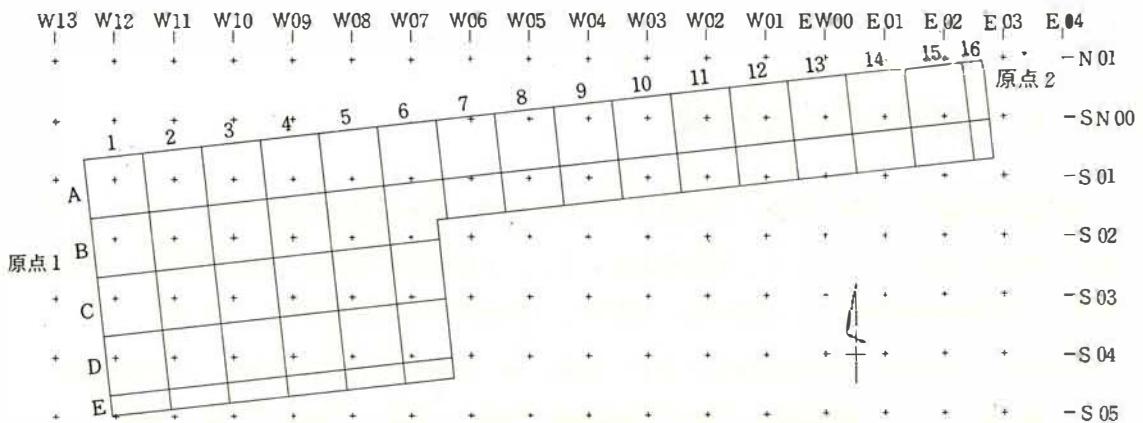
本遺跡の所在する市川・浮島・高崎地区の水田地帯は、近年小規模開発が徐々に増加し、宅地化の傾向が強まつてきている。市教育委員会では、多賀城跡を取り巻く周辺の遺跡の重要性を考え、昭和54年度以降、小規模開発に対応するため継続的な調査を実施してきた。

本調査は、平成元年2月に地権者から宅地造成工事の計画が提示されたため、その内容等について協議を行った。当該地は、平安時代の溝跡や多量の土器類や木製品が出土した第4・5次調査の東南に隣接する位置にあたり、さらに近接する地域でも集落跡や水田跡が確認されていることから、当該地においても同様な遺構が存在する可能性が考えられていた。このため地権者に対し調査の協力を依頼し、平成元年2月に発掘調査の承諾を受けて、5月15日から調査を実施したものである。

II 調査方法と経過

今回の発掘調査は、調査予定地が水田であるため、水田の地形にそって調査区を設定した。その際に、調査区の西側に隣接する第4次調査において、平安時代の溝跡や多量の土器類・木製品が発見されていることを考慮し、調査区の西側を広げた。調査対象面積は925m²でその内の434m²について調査を実施した。調査は、平成元年5月15日より開始した。まず、調査区に隣接する地域が水田で耕作されているため、調査区内の水貯き作業を行い、翌日から重機による表土剥離を行った。また、排水溝を兼ねた土層観察用のトレンチを掘り込んだ。調査区の東側において、整地層を検出し、整地層上面での遺構検出作業を行い、土塹、溝跡、ピット等を検出す。西側では、第Ⅲ層の掘り込みを行い、畦畔を検出す。整地層6上面で検出した遺構の掘り込み調査を行い、並行しながら実測図作成のため、原点1（X：-189,236.766、Y：14,210.139）と原点2（X：-189,246.213、Y：14,161.269）を基準とし、遺り方を設定する（6月8日）。遺り方水糸高は、標高3,000mである。整地層6上面において検出した遺構の平面図及びセクション図作成を行い、6月14日に全景写真を撮影する。西側では、第Ⅶ層上面で遺構検出作業を行い、灰白色火山灰を含む溝跡や土塹を検出し、重複関係を確認した後に掘り込み調査を行った。6月29日からは、整地層を掘り込み、地山面での遺構検出を行い、土塹を検出し、掘り込み調査を行う。7月11日に最終の全景写真を撮影し、7月13日ですべて

の調査を終了した。



第2図 調査区設定図

III 調査成 果

〈基本層位〉

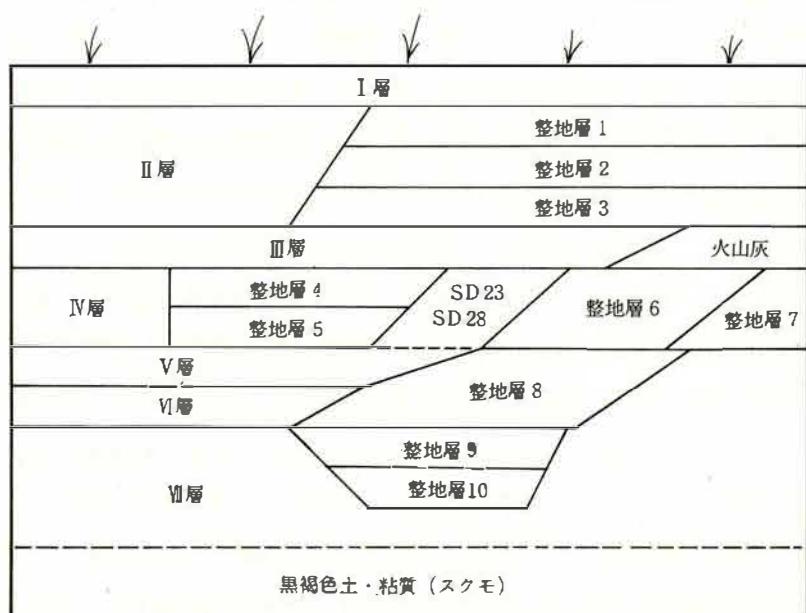
第Ⅰ層 現在の水田耕作土で灰色の粘土質からなる。層厚は、10~20cmを計る。

第Ⅱ層 褐灰色の粘土質で、調査区の西側に堆積する。層厚は、10~15cmを計り、酸化鉄が帯状に層全体に認められる。

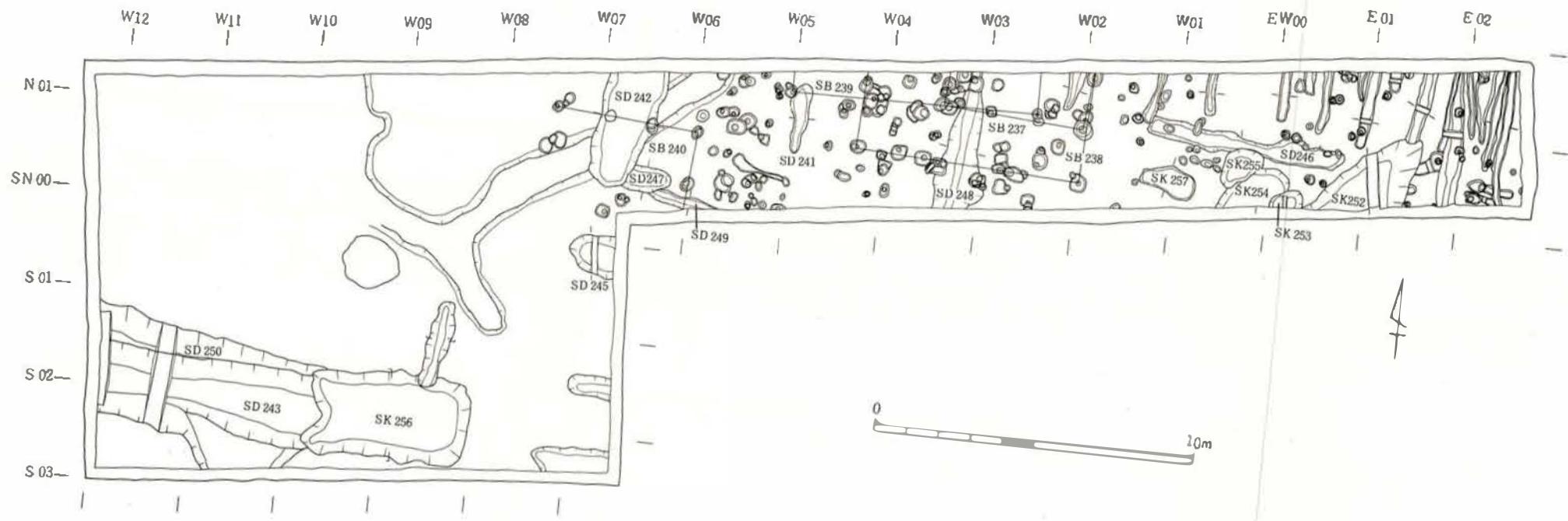
第Ⅲ層 黄灰色の粘土質で、調査区の西側に堆積する。層厚は、10~15cmを計り、黒褐色土をブロック状に部分的に含み、さらにマンガン粒を多量に含む。

第Ⅳ層 灰黄褐色の粘土質シルトで、調査区の西側に堆積する。層厚は、10~20cmを計り、全体的に酸化鉄の集積があり、また、マンガン粒を多量に含む。

さらに上層では、炭



第3図 基本層位模式図



第4図 遺構配置図

化物を小ブロック状に含む。

第V層 灰黄褐色の粘土質シルトで、調査区の北西部に堆積する。層厚は、10~20cmを計り、第IV層との層界は起伏がある。灰白色火山灰を層全体にブロック状に含む。

第VI層 灰黄褐色の粘土質シルトで、調査区の西側に堆積する。層厚は、10~20cmを計り、部分的にグライ化している。

〈発見遺構と遺物〉

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物跡4棟、溝跡29条、土塙5基、水田跡、整地層があり、この他に多数の柱穴を検出した。

(1) 整 地 層

整地層は、調査区の中央部付近から東側一帯にかけて検出され、10層に細分化される。

整地層1 A・B-04、C・D-05、E-06グリットから調査区の東側にかけて堆積する。にぶい黄褐色のシルト層で、層厚は3~6cmを計り、層中には、暗灰黄色土や炭化物が小ブロック状に含まれる。

整地層2 西側は整地層1と同じラインからA・B-11グリットにかけて堆積する。黄灰色のシルト層で、層厚は5~20cmを計る。層中には、褐灰色土や炭化物が小ブロック状に含まれる。

整地層3 B-06~11グリットにかけて堆積する。黄褐色のシルト層で、層厚は5~20cmを計り、層中には、炭化物が多量に含まれる。

整地層4 A~E-04~06グリットにかけて堆積する。黄灰色のシルト層で、層厚は5~15cmを計り、層中には、黄灰色の粘質土をブロック状に含み、また、炭化物をも含まれる。

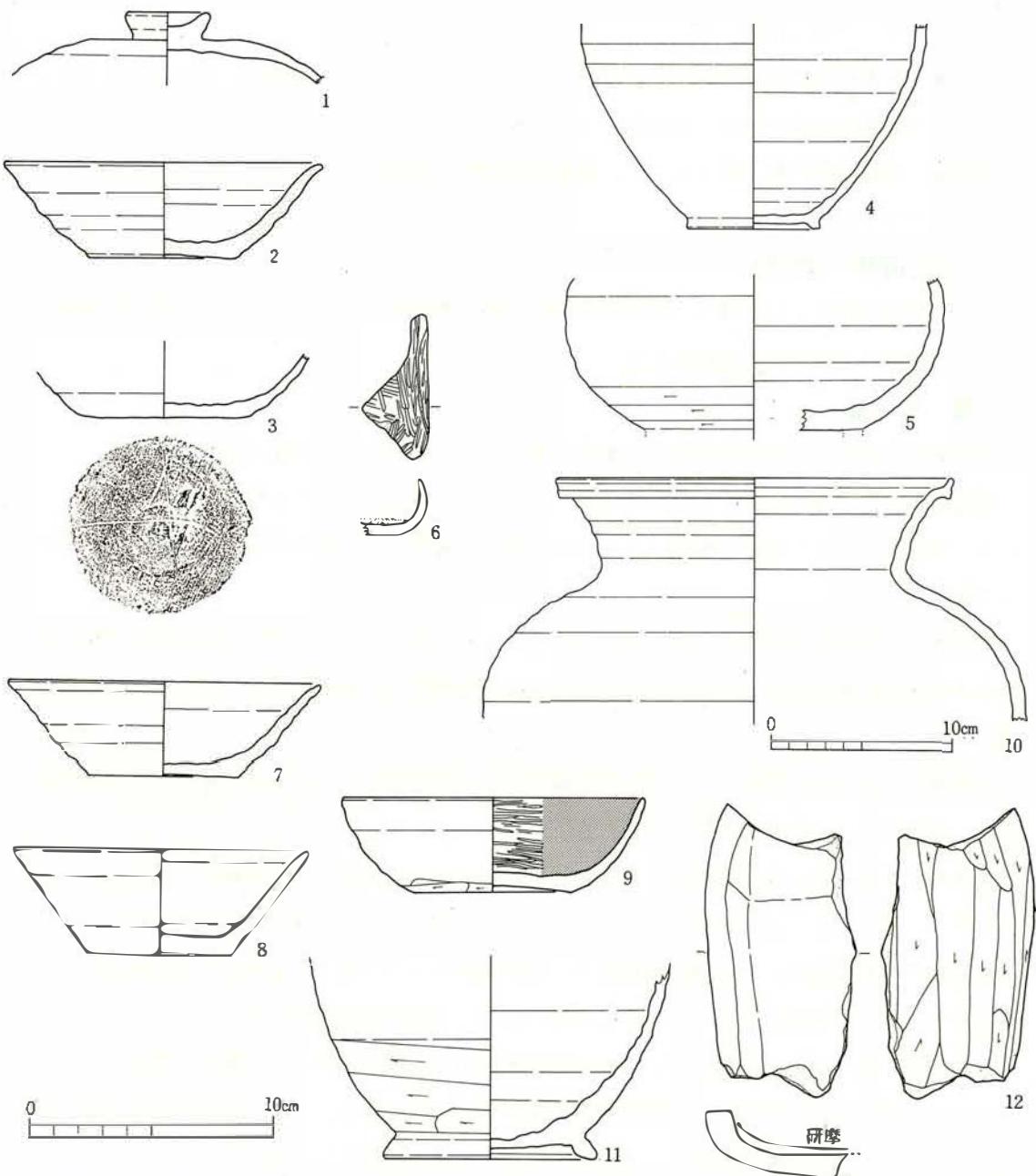
整地層5 整地層4と同範囲に堆積する。暗灰黄色のシルト層で、層厚は5~20cmを計り、層中には、焼土や黄色土をブロック状に含み、また、炭化物をも含まれる。

整地層6 A・B-06~13グリットにかけて堆積する。黄灰色のシルト層で、層厚は3~15cmを計り、層中には、褐色土・黄色土・焼土をブロック状に含み、また、炭化物をも多量に含まれる。セクションを観察すると、上層に灰白色火山灰が堆積している。

整地層7 A・B-03グリットから調査区の東側へ帶にかけて堆積する。黄灰色のシルト層で、層厚は10~20cmを計り、層中には、黄橙色土や黄褐色土を小ブロック状に含み、また、炭化物をも含まれる。

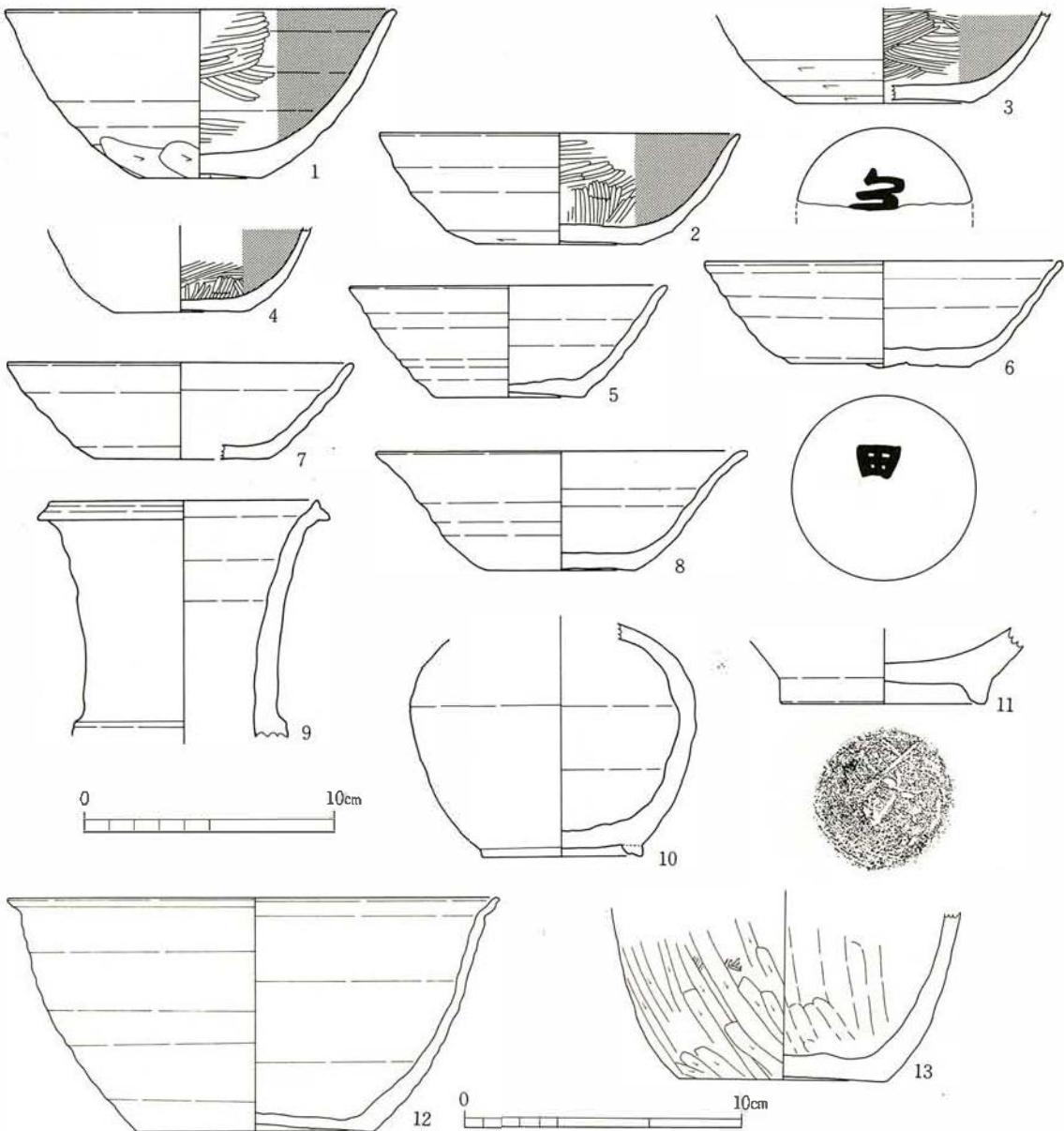
整地層8 A・B-06~13グリットにかけて堆積する。暗灰黄色のシルト層で、層厚は2~10cmを計り、層中には、炭化物や黄色土が含まれる。

整地層9 A・B-07・08グリットにかけて堆積する。暗灰黄色のシルト層で、層厚は3~5cmを計り、層中には、炭化物が少量含まれる。



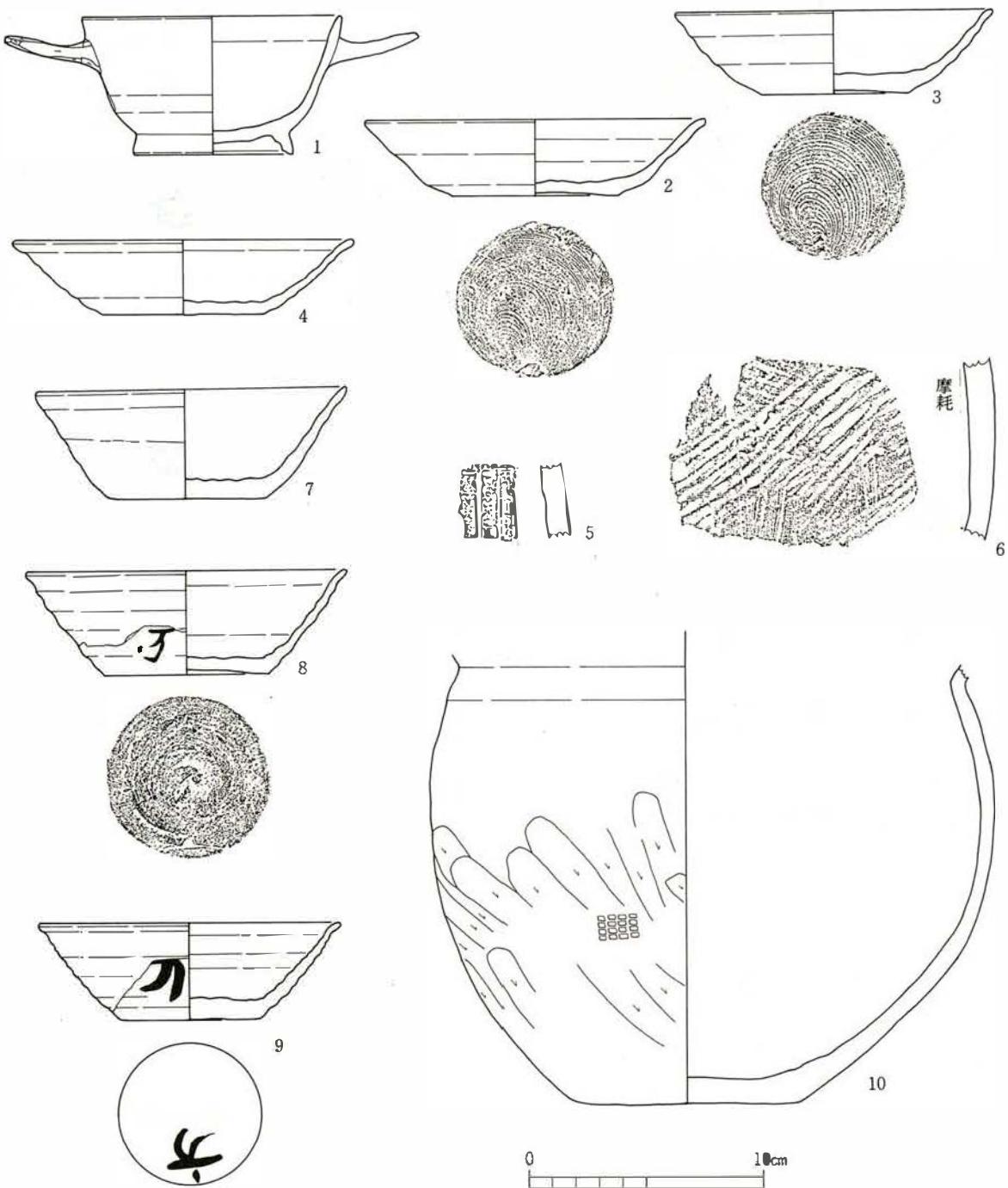
No.	層位	種類	器形	外 面 調 整	内 面 調整	口徑	底径	高	備考
1	整地層 1	須恵器	蓋	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ				
2	整地層 3	・	杯	・ 底部回転糸切り	・	13.0	6.0	4.9	
3	・	・	・	・ 底部回転ヘラ切りのちナデ	・		7.1		
4	・	・	長頸瓶	・ 回転ヘラケズリ	・		7.4		
5	・	・	短頸瓶	・ ・	・				
6	整地層 5	土師器	耳皿	ヘラミガキ黒色処理、底部回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理				
7	・	須恵器	杯	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	(12.8)	6.1	3.8	
8	整地層 6	・	・	・ 底部回転ヘラ切り	・	12.0	6.0	4.3	
9	・	土師器	杯	ロクロナデ、底部下端	ヘラミガキ、黒色処理	(12.3)	6.3	3.8	
10	・	須恵器	甕	手持ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り	(21.9)				
11	・	・	長頸瓶	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り ナデのち断底	ロクロナデ		8.7		
12	・	・	腹字瓶	手持ヘラケズリ	研磨				

第5図 セイチ 1・3・5・6層出土遺物



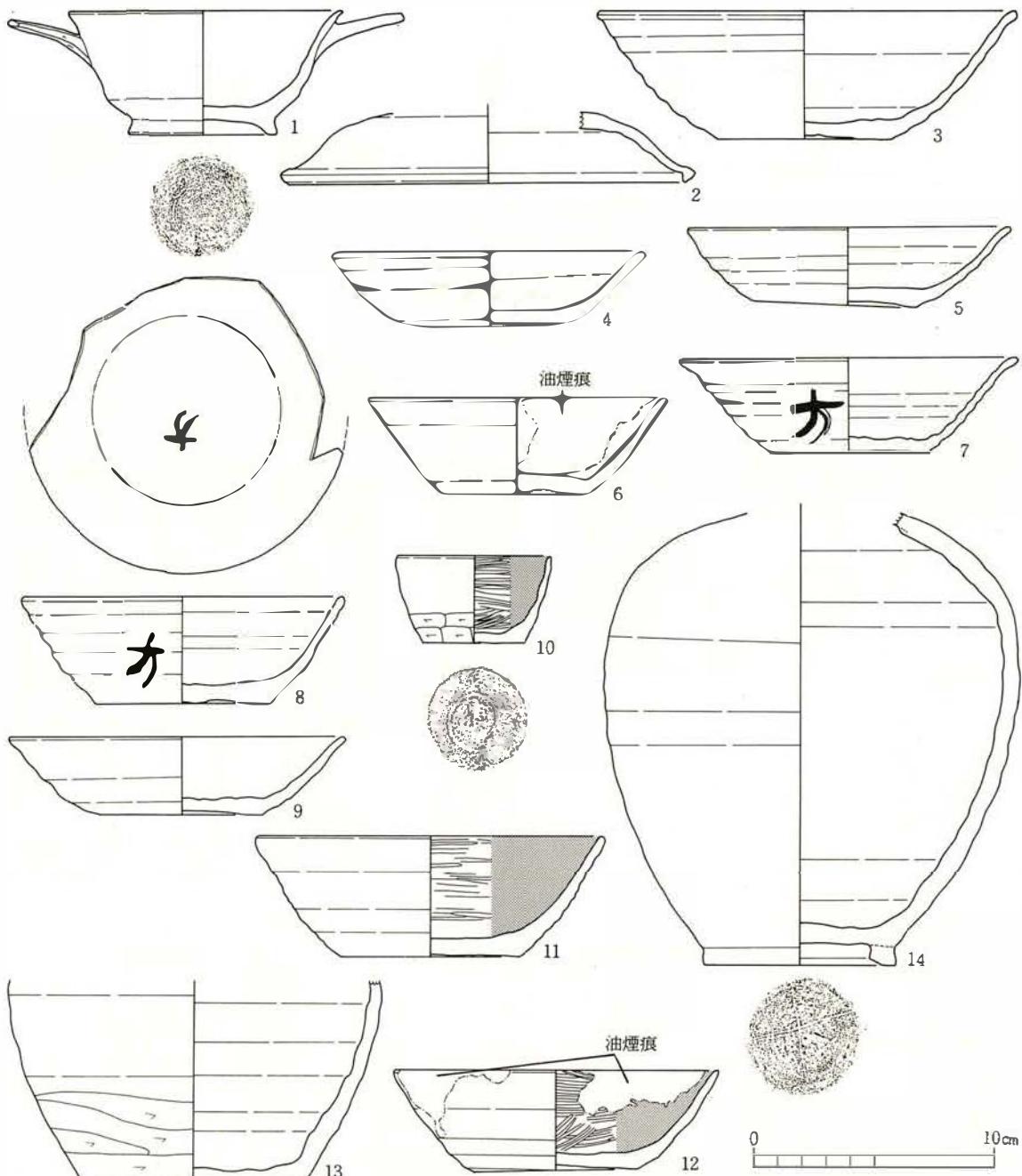
No.	種類	器形	外面調査	内面調査	口径	底径	器高	備考
1	土師器	杯	ロクロナデ 底部回転糸切り(底部下端~底部周縁手持ヘラケズリ)	ロクロナデ、部ヘラミガキ黒色処理	(15.6)	(5.0)	6.6	
2		タ	タ 底部回転ヘラ切り(体部下端回転ヘラケズリ)	ヘラミガキ・黒色処理	(14.4)		6.6	
3		タ	タ 体部下端~底部回転ヘラケズリ	タ		(7.0)	4.4	外底部墨書き「口」
4		タ	タ 底部回転糸切り	タ			5.5	
5	須恵器	タ	タ タ	ロクロナデ	(12.6)	(6.0)	4.4	
6		タ	タ 底部回転ヘラ切り	タ		14.2	7.2	
7		タ	タ	タ	(13.8)	(7.0)	3.8	外底部墨書き「田」
8		タ	タ 底部回転糸切り	タ	(14.6)	6.0	4.7	
9		長頸瓶	タ	タ	11.6			
10		ル	タ	タ			11.3	
11		タ	タ 底部回転糸切りのちナデ	ナデ				底部ヘラ描き「ノ」
12		鉢	タ 底部不明	ロクロナデ	26.5	12.7	12.5	外底部に付着物
13		甕	平行叩きのち手持ヘラケズリ 底部ナデ	指ナデ			11.2	

第6図 セイチ4層出土遺物



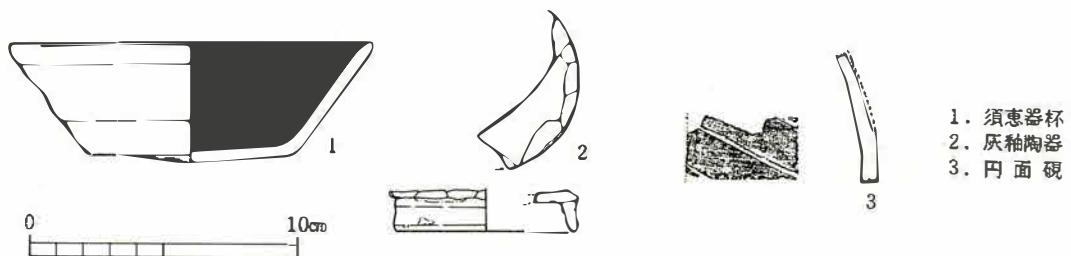
No.	層位	種類	器形	外 面 調 整	内面調整	口 径	底 径	器 高	備 考
1	整地層7	須恵器	双耳杯	ロクロナデ、耳部手持へラケズリ、底部回転へラ切り	ロクロナデ	(11.0)	6.4	5.8	
2	整地層8	◆	杯	◆ 底部回転杀切り	◆	(14.4)	7.0	3.2	
3	◆	◆	ク	◆	◆	(13.5)	6.2	3.5	
4	◆	◆	◆	◆ 底部回転へラ切り	◆	(14.5)	6.9	3.2	
5	◆	◆	円面鏡	ロクロナデのちナデ消し	◆				
6	◆	◆	鏡	平行叩き	摩耗度				
7	整地層9	◆	杯	ロクロナデ、底部回転へラ切り	ロクロナデ	13.2	6.8	4.7	方形透かし、舞刻文
8	◆	◆	ク	◆	◆	(13.7)	7.0	4.4	転用鏡か
9	◆	◆	ク	◆	◆	(12.9)	6.0	4.1	底部にヘラキズ
10	◆	土師器	盤	格子叩きのら手持へラケズリ	◆	10.0			外体部墨書「万」か正位 外体部墨書「カ」か、外底部「方」

第7図 セイチ7・8・9層出土遺物

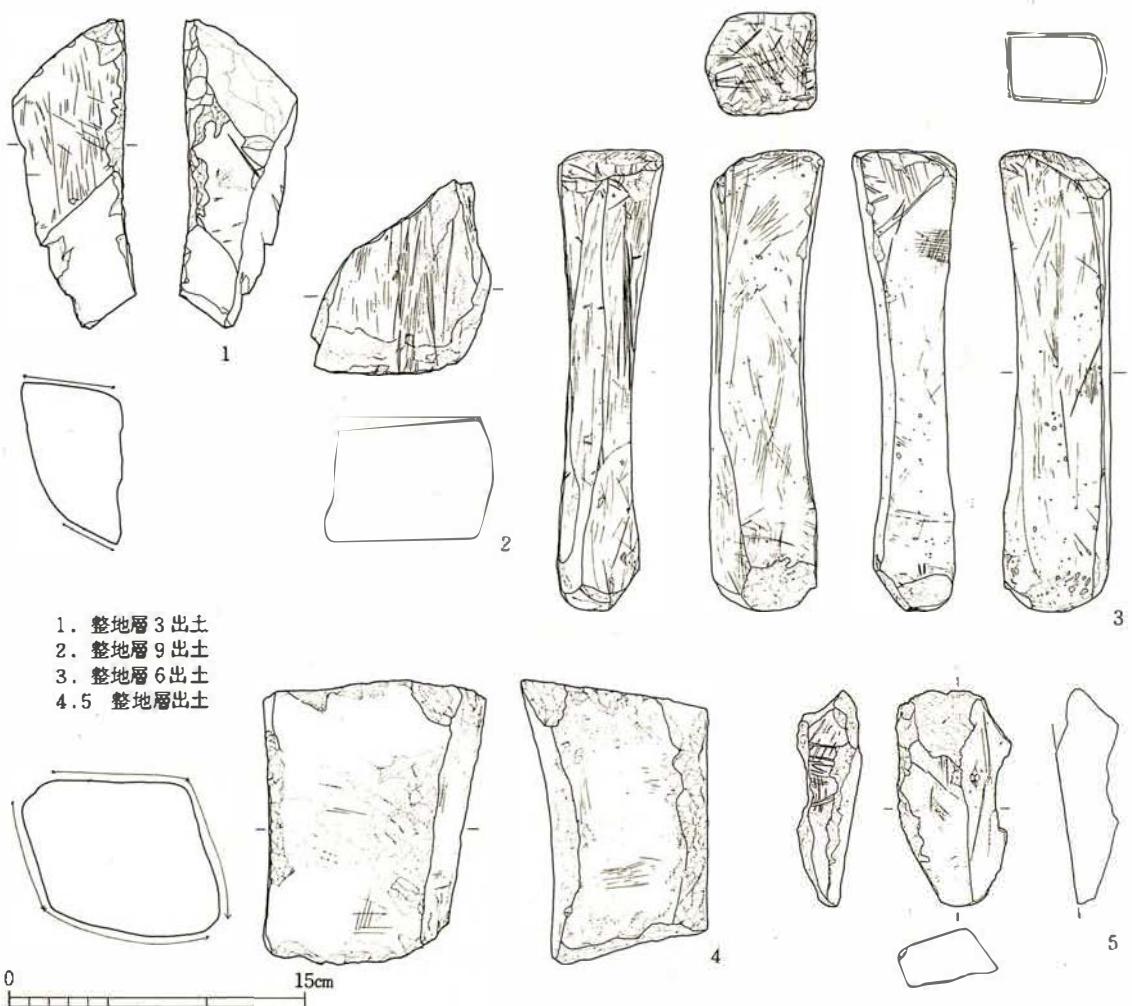


No.	種類	器形	外 面 調 整	内 面 刷 装	口 径	底 径	器 高	備 考
1	須恵器	双耳杯	ロクロナデ 耳部手持へラケズリ、底部回転糸切り	ロクロナデ	11.5 (17.2)	7.0	5.1	
2		蓋	◆	◆	17.4	7.2	5.3	
3		杯	◆ 底部回転へラ切り	◆	12.8	7.6	3.1	ほぼ丸形
4			◆ 底部回転へラ切りのちナデ	◆	13.2	6.9	3.2	
5			◆ 底部回転糸切り	◆	12.4	6.4	4.0	内面油煙痕
6			◆ 底部回転へラセリ	◆	(14.0)	6.4	3.9	
7			◆	◆	(13.4)	7.2	4.4	内底部 外体部墨書き「方」
8			◆	◆	(14.0)	6.8	3.2	
9			◆	◆	(14.0)	6.8	3.2	
10	土師器	小型杯	◆ 体部下端～底部回転手持へラケズリ ◆ 底部手持へラケズリか	ペラミガキ、黒色処理	6.5 (14.6)	4.2 7.4	3.6 5.0	
11		杯	◆ 底部回転糸切りのち体部下端～底部回転へラケズリ	◆	(13.6)	6.7	4.2	
12			◆ 手持へラケズリ	ロクロナデ	9.4			
13		蓋	◆	◆	8.0			底部へラ描き「メ」
14	須恵器	長颈瓶	◆					

第8図 セイチ10層出土遺物



第9図 整地層出土



第10図 整地層出土遺物（砥石）

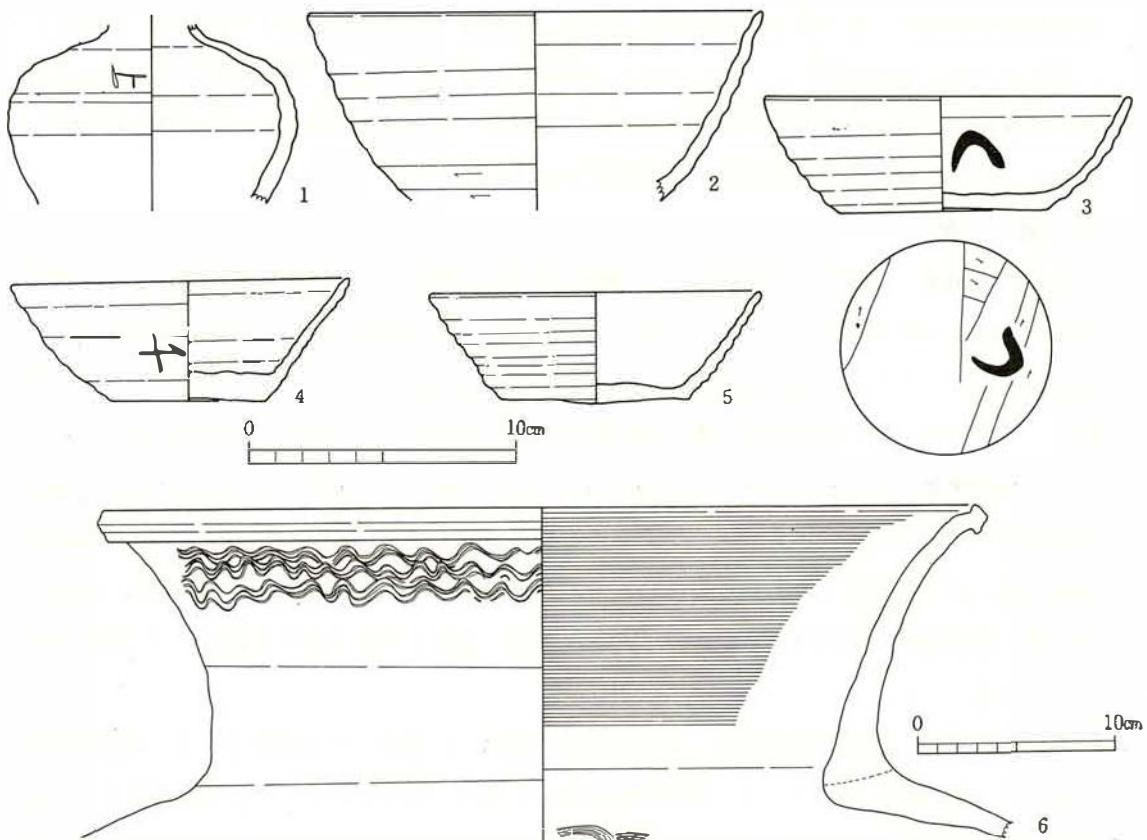
整地層 10 整地層 9 と同範囲に堆積する。黒褐色の粘土質シルトで、層厚は 3 ~ 10cm を計り、層中には、焼土や炭化物が小ブロック状に含まれる。

(2) 堀立柱建物跡

S-B 237 建物跡 調査区東側の整地層 6 上面で検出した南北 1 間以上、東西 3 間の建物跡で

ある。SB 238・239建物跡と重複関係があり、これらより新しい。建物の方向は東側柱列でみると、北で約4度東に偏している。柱間は、南側柱列で西より1.48m、1.49m、1.47mで総長4.44mである。東側柱列で1.69mを計り、総長については不明である。柱穴は、楕円形を呈するものと、隅丸方形のものとがあり、規模は65×56cmのものや、32×32cmのものなどがあり様々である。柱痕跡は径約20cmを計る。掘り方埋土は、黒褐色シルト、灰黄褐色シルトが主体となっている。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕、丸瓦の他に土製カマドの破片が出土している。

SB 238建物跡 調査区東側の整地層6上面で検出した南北1間以上、東西3間の建物跡である。SB 237建物跡と重複関係があり、これよりも古い。建物の方向は東側柱列でみると、北で約3度東に偏している。柱間は、南側柱列で西より2.12m、2.69m、2.20mで、総長7.01mである。東側柱列では1.98mを計り、総長については不明である。柱穴は、隅丸方形のもの



No.	遺構	種類	器形	外 面 調 整	内 面 調 整	口径	底径	器高	備 考
1	pit 106	須恵器	小型甕	ロクロナア	ロクロナア				ヘラ描「上」模倣
2	pit 167	ク	杯	ロクロナア、回転ヘラケズリ	ク	17.0			
3	ク	ク	杯	◆ 底部回転ヘラ切りのち一部手持ヘラケズリ	ク	13.6	7.8	4.3	外面底部、「フ」内面 底部墨書き
4	ク	ク	ク	ク 底部回転ヘラ切りのちナデ	ク	12.7	5.7	4.4	外面底部墨書き
5	ク	ク	ク	ク 底部回転ヘラ切り	ク	12.4	7.0	4.1	完形
6	pit 91	ク	甕	ク ナデ	カキ目、ロクロナア、青海波文當て具鋸	45.1			

第11図 柱穴出土遺物

と、橢円形を呈するものがあり、規模は一辺47×53cmのものや、40×50cmのものがあり様々である。柱痕跡は約18cmである。掘り方埋土は、黒褐色シルトを主体としている。遺物は、土師器杯・甕・長頸瓶が出土している。

S B 239 建物跡 調査区東側の整地層6上面で東西3間を検出しているが、南北についてはおそらく北側の調査区外に延びる建物跡である。S B 237 建物跡、S D 241 溝跡と重複関係があり、これらよりも新しい。建物の方向は東で約1度北に偏している。柱間は、南側柱列で西より2.54m、2.35m、2.75mで総長7.64mである。柱穴は、橢円形を呈し、規模は42×49cm前後を計る。柱痕跡は径約18cmである。掘り方埋土は、黄褐色土をブロック状に含む灰黄褐色シルトを主体としている。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・壺、平瓦が出土している。

S B 240 建物跡 調査区中央部の整地層6上面と第VI層上面で検出した東西3間以上、南北1間以上の建物跡である。S D 242 溝跡と重複関係があり、これよりも新しい。建物の方向は東側柱列でみると、北で約4度東に偏している。柱間は、北側柱列で東より1.49m、1.35m、1.68mを計る。東側柱列では1.65mである。柱穴は、橢円形を呈し、規模は37×45cm前後を計る。柱痕跡は径約13cmである。掘り方埋土は、黒褐色シルト、褐灰色シルトを主体としている。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯が出土している。

(3) 溝 跡

S D 241 溝跡 調査区のほぼ中央、整地層6上面で検出した南北に走る溝跡である。重複関係からS B 239 建物跡よりも古い。長さは約2.20mで、上幅35~65cm、深さ約15cmを計る。埋土は4層に分けられ、灰黄褐色シルトを主体とし、最下層は暗褐色粘土質シルトである。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・壺、丸瓦の他に土製カマドの破片と砥石が出土している。

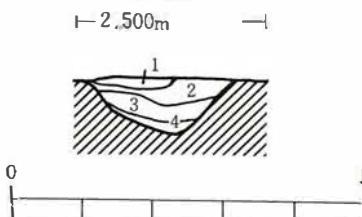
S D 242 溝跡 調査区のほぼ中央、整地層6上面で検出した南北に走る溝跡である。重複関係からSB 240 建物跡よりも古い。確認できる長さは約4mで、上幅約1.80m、深さ約15cmを計る。埋土は、黄褐色シルトと黒褐色シルトの2層に分けられる。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕・壺、赤焼き土器、平瓦・丸瓦の他に土製カマドの破片が出土している。

S D 243 溝跡 調査区の南西部、第VII層上面で検出した東西に走る溝跡である。溝跡の東側において、南へ張り出している。重複関係からSK 256 土塙よりも古く、S D 250 溝跡よりも新しい。確認できる長さは約8.5mで、上幅約250cm、深さ約65cmを計る。埋土は、8層に分けられるが、基本的には灰黄褐色シルト、灰色シルト、黒褐色シルトである。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕・壺、赤焼き土器、瓦の他に曲物や盤などの木製品が出土している。

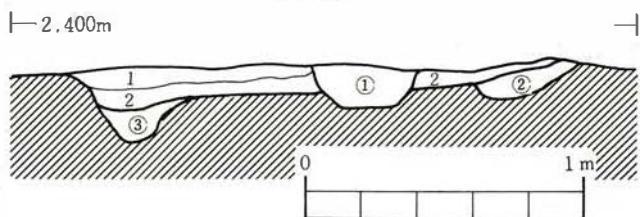
S D 244 溝跡 調査区南西部のVII層上面で検出した南北に走る溝跡である。SK 256 土塙と

重複関係があり、これよりも古い。確認できる長さは2.7mで、上幅50~75cm、深さ約25cmを計る。埋土は、オリーブ黒色の粘土質シルト層とオリーブ黒色の砂質層の2層に分けられる。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・壺、平瓦・丸瓦の他に円盤状土製品が出土している。

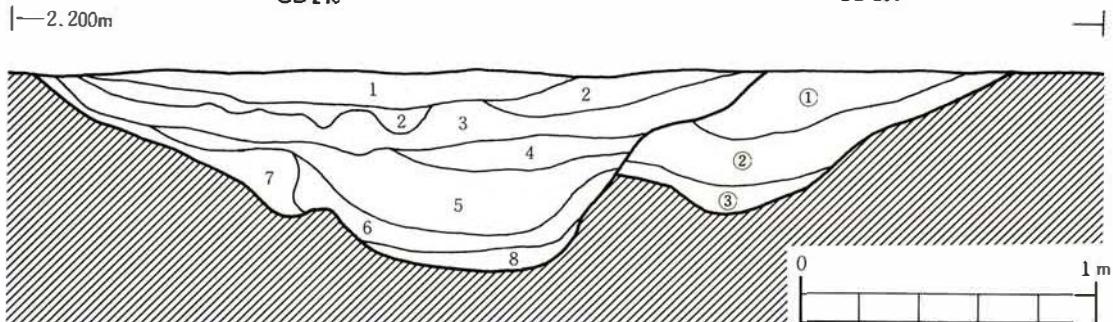
SD241



SD 242

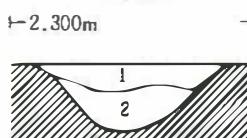


SD 243



SD 250

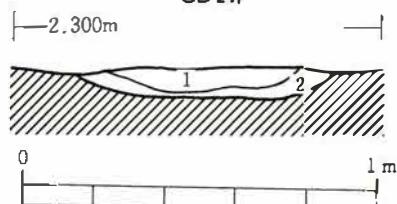
SD244



SD 245



SD 247



遺構	No.	土色	備考
SD 243	1	10YR 5/4 厚黄褐色	シルト、灰黃褐色砂土層がブロック状、 し巣状に含まれる。 粘土質シルト、灰黃褐色砂土層がブロ ック状に含む。
	2	2.5Y 3/4 黑褐色	粘土質シルト、灰白色火山灰ブロック を巣状に含む。
	3	10YR 5/4 厚黄褐色	粘土質シルト、灰白色火山灰ブロック を巣状に含む。
	4	5GY 3/4 オリーブ灰色	砂上、黑色シルト層が帯状、巣状 に一部含まれる。
	5	2.5Y 3/4 黑褐色	粘土質シルト、略オリーブ灰褐色砂土質 シルト層が巣状に堆積する。
	6	5Y 3/4 オリーブ褐色	粘土、マンガン粒、炭化物ブロック含む
	7	2.5GY 3/4 オリーブ灰色	
	8	5Y 3/4 オリーブ黑色	砂質シルト 。

スクモ層

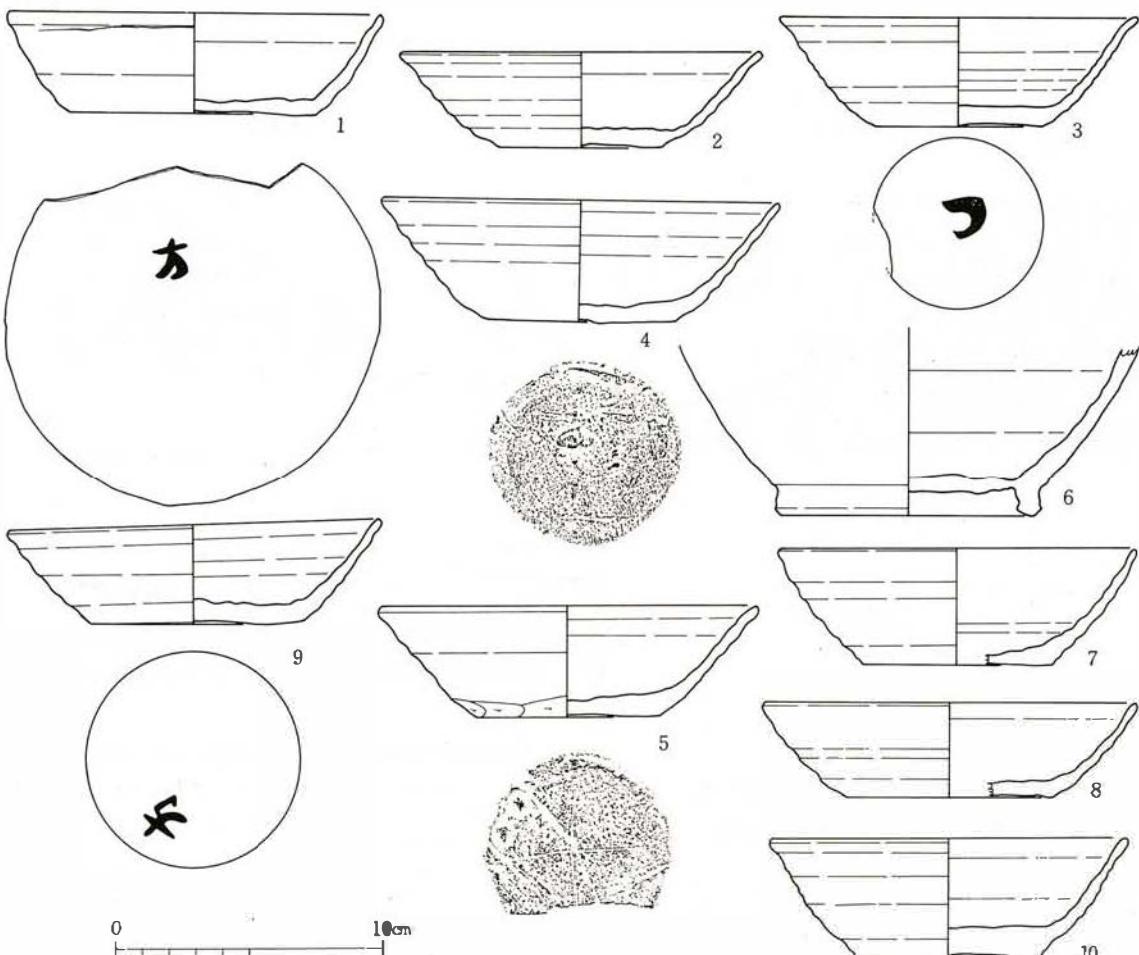
遺構	No.	土色	備考
SD 241	1	10YR 5/4 厚黄褐色	シルト、炭化物ブロック、焼土ブロッ ク微量含む
	2	々	シルト、炭化物ブロック多量含む
	3	々	々 黄色ブロックを一部含む
	4	10YR 5/4 厚褐色	粘土質シルト、炭化物ブロック多量に含む
SD 242	1	2.5Y 3/4 黄褐色	シルト、灰白色火山灰ブロックを含む 炭化物灰灰に多量に含む
	2	2.5Y 3/4 黑褐色	シルト、白色、黄色ブロックを少量含む
①	10G Y 3/4 暗緑灰色	粘土質シルト、炭化物焼土ブロックを含む	
②	10Y R 3/4 黑褐色	シルト、炭化物、白色、黄色ブロック を多量に含む	
③	5Y 3/4 灰色	粘土質シルト、炭化物ブロックを含む	

遺構	No.	土色	備考
SD 244	1	5Y 3/4 オリーブ黑色	粘土質シルトに本い黄色砂層にブロ ック、巣状に含む
	2	7.5Y 3/4 オリーブ黑色	粘土、灰白色火山灰ブロック巣状に含む
SD 245	1	2.5Y 3/4 暗灰褐色	砂土、酸化鉄層全体に多量に含む
	2	2.5Y 3/4 黄灰色	粘土質シルト、炭化物ブロック、マン ガン粒多量に含む
	3	2.5Y 3/4 黑褐色	粘土、灰白色火山灰ブロック多量に含む
SD 247	1	10YR 5/4 厚黄褐色	シルト、炭化物ブロック、マンガン粒 シルト、炭化物層が巣状に堆積する
	2	2.5Y 3/4 黄灰色	
SD 250	1	5Y 3/4 オリーブ黑色	シルト、灰白色火山灰ブロック一部し ま状に含む
	2	2.5Y 3/4 黑褐色	粘土質シルト、黄色ブロック微量含む
	3	5Y 3/4 オリーブ黑色	粘土、灰色粘土層ブロック小量含む

第12図 溝跡セクション図

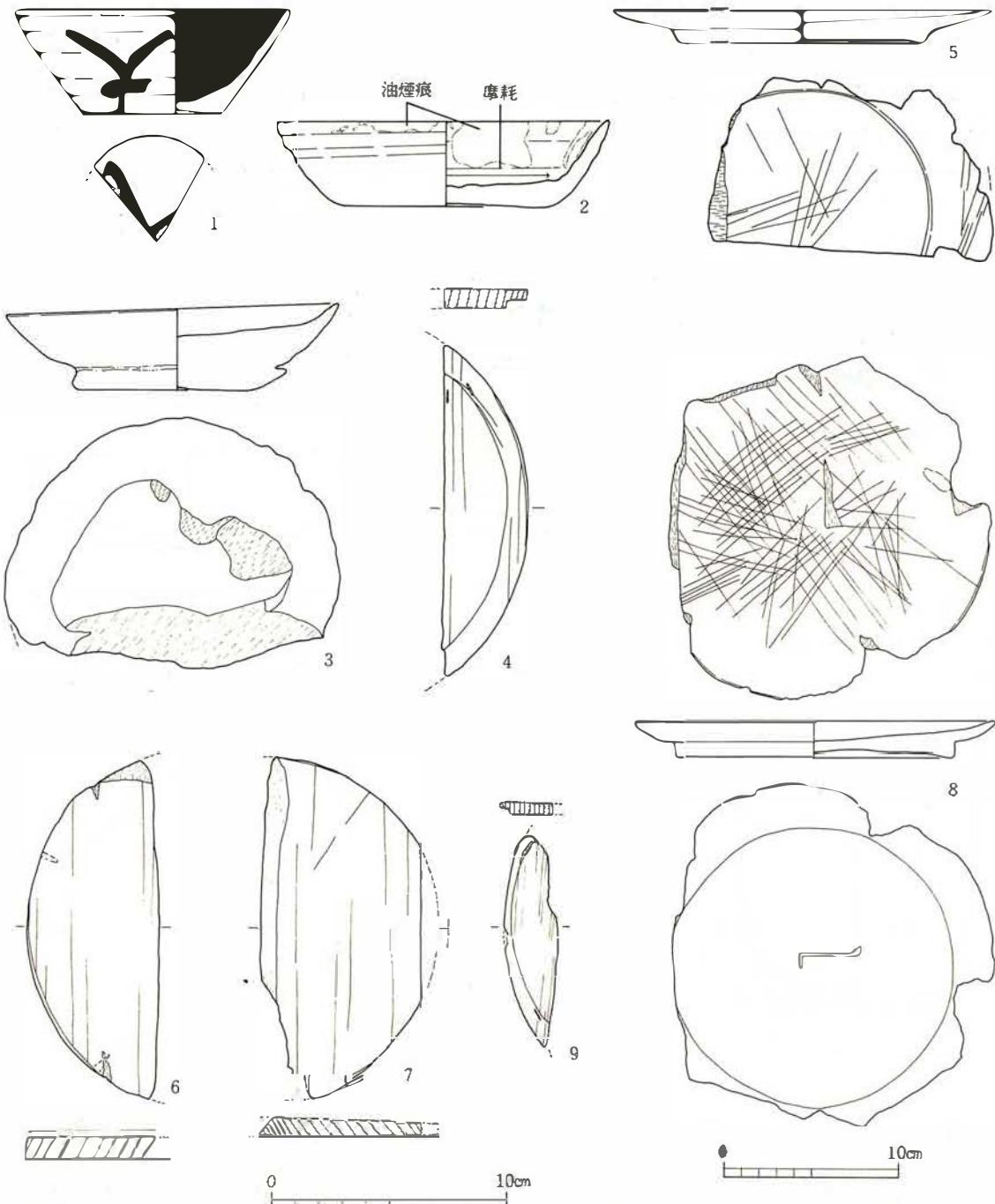
SD 245 溝跡 調査区のほぼ中央部、整地層 6 上面で検出した東西に走る溝跡である。長さは約1.8mで上幅約1.4m、深さ約25cmを計る。埋土は、上層から暗灰黄色シルト層、黄灰色シルト層、黒褐色粘土質層の3層に分けられ、第1層には灰白色火山灰がプロック状に含まれる。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・長頸瓶、平瓦・丸瓦が出土している。

SD 246 溝跡 調査区東側の整地層 6 上面で検出した東西に走る溝跡である。SD 251小溝跡群と SK 255 土塹と重複関係があり、これらよりも古い。長さは約6.2mで、上幅35~80cm、深さ約10cmを計る。埋土は、黒褐色シルトの単層である。遺物は、土師器甕、須恵器杯・甕、



No.	遺構	層位	種類	器形	外 面 調 整	内面調整	口径	底径	高さ	備 考
1	SD251	3層	須恵器	杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	(14.0)	9.2	4.2	
2	・	1層	・	・	・ 底部回転ヘラ切りのちナデ	・	(13.4)	6.0	3.5	
3	・	・	・	・	・ 底部回転ヘラ切り	・	(13.2)	6.2	4.0	外面底部墨書き「つ」
4	SD242	2層	・	・	・	・	(14.7)	7.1	4.4	
5	・	・	・	・	体部下端~底部手持ヘラケズリ	・	(14.1)	6.8	4.1	底部ヘラ描き「十」
6	・	・	・	甕か	・	・		9.8		外面に若干付着物
7	・	・	・	杯	底部回転ヘラ切り	・	(13.3)	(7.1)	4.3	
8	・	3層	・	・	・	・	(13.9)	7.6	3.5	
9	・	・	・	・	底部回転ヘラ切りのちナデ	・	14.0	8.0	3.7	内外底部墨書き「方」
10	・	4層	・	・	底部回転ヘラ切り	・	(13.3)	6.9	4.4	

第13図 SD 242・251 出土遺物

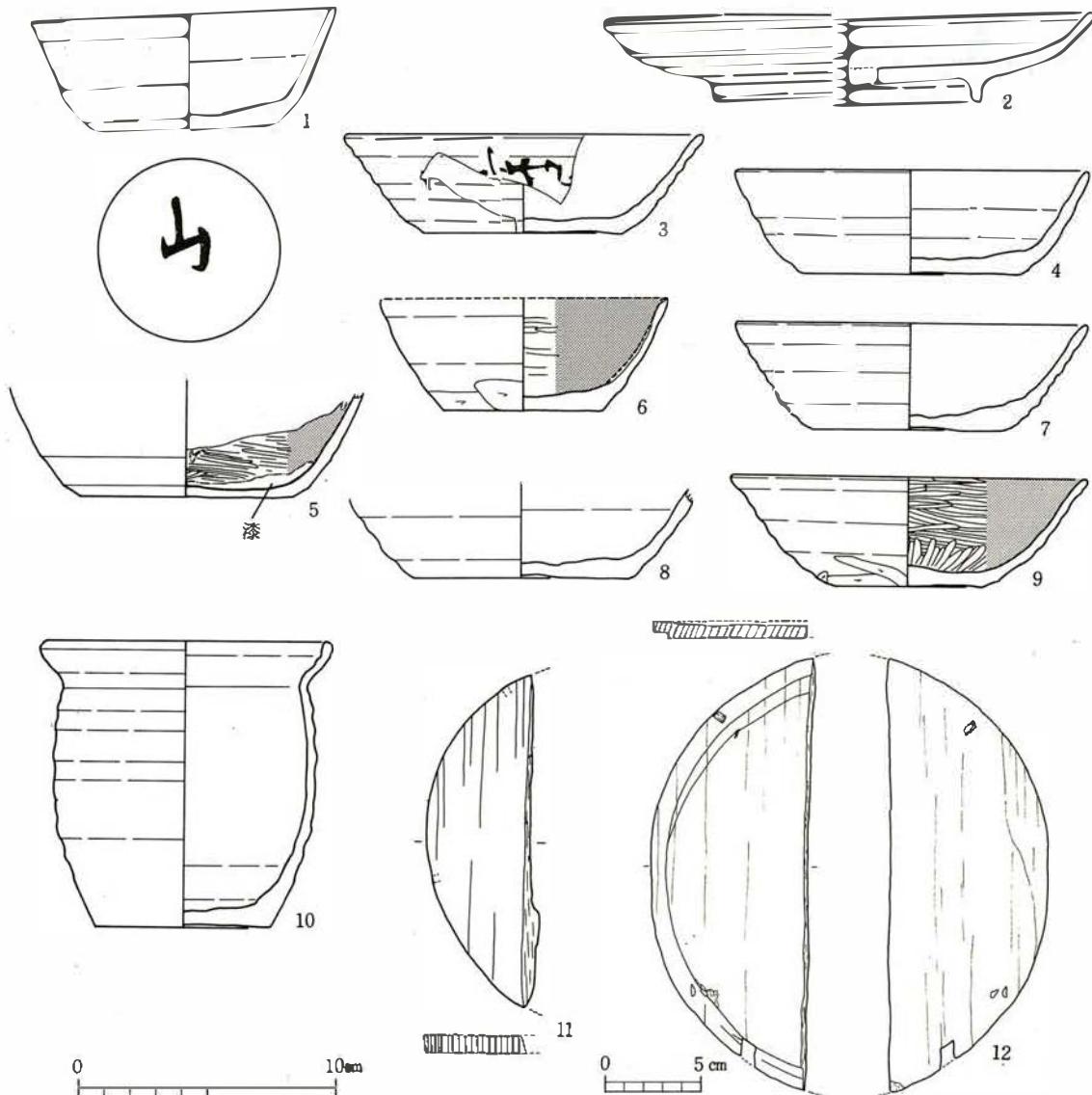


No.	遺構	層位	種類	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	SD243	1層	須恵器	杯	ロクロナデ 懸部周転糸切り	ロクロナデ	(11.7)	(6.0)	4.4	算盤繩目、火炎
2		2層	ク	ク	ク	ク	14.1	8.6	3.6	完形、油煙痕
3	ク	ク	木製品	盤か	未製品 口径13.2cm、底径(9.2)cm、器高2.8cm					
4	ク	3層	ク	曲物蓋板	柾目材 外径(17.7)cm、内径(15.7)cm、厚さ0.8cm、周縁の厚さ0.5cm					
5	ク	ク	ク	盤	ロクロ挽き、外面にキズ多數	ロクロ挽き、底部摩耗	(16.0)	(10.4)	1.4cm	
6	ク	ク	ク	曲物底板	柾目材 径(15.0)cm、厚さ1.0cm、内面黒漆塗りか、側面に釘孔2ヶ所残存					
7	ク	ク	ク	ク	ク	ク	14.4cm	0.8~0.5cm		
8	ク	5層	ク	盤	ロクロ挽き、内面に焦痕、多数のキズ有、外底部に焼印有、口径(20.7)cm、底径16.0cm、器高2.0cm					
9	SD244	1層	ク	曲物蓋板	柾目材 径(16.8)cm、厚さ0.5cm、周縁の厚さ0.3cm					

第14図 SD 243・244出土遺物

赤焼き土器が出土している。

SD 247 溝跡 調査区のほぼ中央部、整地層 6 上面で検出した東西に走る溝跡である。重複関係から SD 242 溝跡より古く、SD 249 溝跡より新しい。確認できる長さは約1.4m、上幅約



No.	遺構	層位	種類	器形	外 面 調 整	内 面 調 整	口 径	底 径	器 高	備 考
1	SD248	1層	須恵器	杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切りのちナデ	ロクロナデ	11.8	7.0	4.6	外面部墨書き「山」
2	ク	ク	ク	盤	ク	(18.9)	10.4	3.3	外底部に墨痕	
3	ク	ク	ク	杯	ク 底部回転糸切り	ク (14.0)	7.8	3.8	外体部に墨書き横位	
4	ク	ク	ク	ク	ク 底部回転ヘラ切りのちナデ	ク (13.7)	8.3	4.0		
5	ク	ク	土師器	ク	ク 体部下端～底部回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(8.2)			内面漆付着
6	ク	ク	ク	ク	ク 手持ヘラケズリ	ク (11.2)	6.2	(4.3)		
7	ク	2層	須恵器	ク	ク 底部回転ヘラ切りのちナデ	ゴクロナデ	(13.6)	7.4	4.1	
8	ク	ク	ク	ク	ク 底部回転ヘラ切り	ク (8.4)				
9	SD250	ク	土師器	ク	ク 体部下端～底部手持ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	13.8	5.6	4.2	内外底部に付着物
10	ク	3層	ク	小型 壺	ク 工具状のナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ、ナデ	11.7	6.7	11.1	完形
11	ク	2層	木製品	曲物底板	柱目材 径(14.4)cm、厚さ0.7cm、目釘2ヶ所残存					
12	ク	3層	ク	曲物蓋板	ク 外径(23.6)cm、内径(21.7)cm、厚さ0.9cm、同縁の厚さ0.6cm					

第15図 SD248・250出土遺物

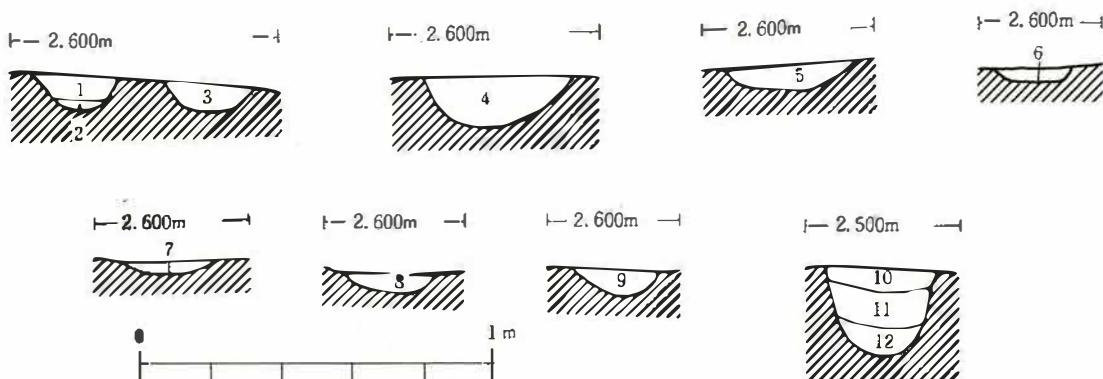
75cm、深さ約8cmを計る。埋土は、灰黄褐色シルト層、黄灰色シルト層の2層に分けられる。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕・長頸瓶・小型壺、赤焼き土器、平瓦・丸瓦の他に円盤状土製品が出土している。

SD 248 溝跡 調査区東側の整地層6上面で検出した南北に走る溝跡である。確認できる長さは約4.5m、上幅50~160cm、深さ約25cmを計る。埋土は、5層に分けられるが、基本的には黒褐色シルトと黄灰色シルトである。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・高台付杯・蓋・甕・長頸瓶、赤焼き土器、丸瓦が出土している。

SD 249 溝跡 調査区の中央部、整地層6上面で検出した東西に走る溝跡である。SD 247溝跡と重複関係があり、これよりも古い。確認できる長さは約2mで、上幅約25cm、深さ約5cmを計る。埋土は、灰黄褐色シルト層の単層である。遺物は、土師器甕、須恵器杯・甕・長頸瓶、赤焼き土器、丸瓦が出土している。

SD 250 溝跡 調査区南西部の第VII層上面で検出した東西に走る溝跡である。SD 243溝跡とSK 256 土塙と重複関係があり、これらよりも古い。SD 243溝跡とほぼ同じ位置で重複しており、大半が壊されている。確認できる長さは約7.8m、深さ約50cmを計る。埋土は、オリーブ黒色シルト層、黒褐色粘土質シルト層、オリーブ黒色粘土質層の3層に分けられる。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕・長頸瓶、平瓦・丸瓦の他に曲物の底板・蓋板などの木製品が出土している。

SD 251 小溝跡群 調査区東側の整地層6上面及び整地層7上面で検出した南北に走る小溝跡である。重複関係からSK 252 土塙よりも古く、SD 246溝跡より新しい。規模は、上幅が



遺構	No.	土色	備考	遺構	No.	色	備考
SD251	1	10YR ½灰黄褐色	シルト、炭化物ブロック多量に含む	SD251	7	10YR ½灰黄褐色	シルト、炭化物ブロック微量含む
	2	々	々 黄色ブロック含む		8	々	シルト炭化物、ブロック微量含む
	3	々	々 炭化物ブロック多量に含む		9	々	シルト、黄ブロック少量含む
	4	々	々 黄色ブロック多量に含む		10	10YR ¾黒褐色	シルト、炭化物ブロック多量含む
	5	々	々 炭化物ブロック多量に含む		11	10YR ½灰黄褐色	粘土質シルト、酸化鉄帯状に含む
	6	々	々 炭化物ブロック微量含む		12	10YR ½褐灰色	々 黄色ブロック多量含む

第16図 SD251小溝跡群セクション図

20~65cmで、深さ5~25cmを計る。埋土は、灰黄褐色シルトが主体になっている。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・稜碗・甕・長頸瓶、丸瓦の他に土製カマドの破片が出土している。

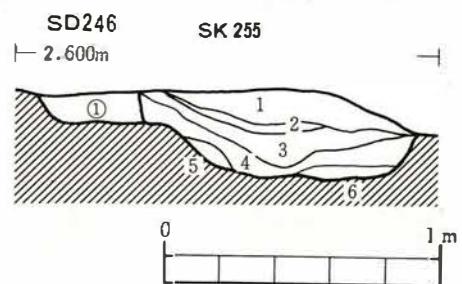
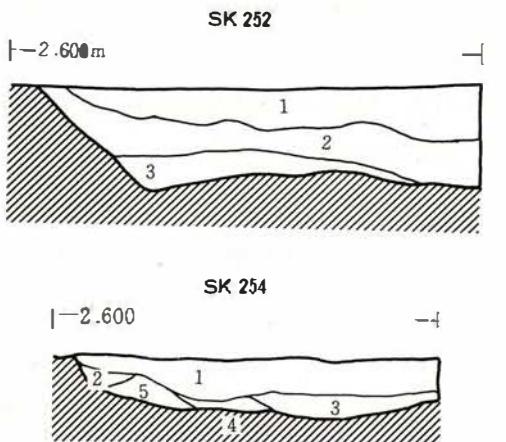
(4) 土 塚

SK 252 土塚 調査区東側の南壁ぎわの整地層1上面で検出した。SD 251 小溝跡群と重複関係があり、これよりも新しい。平面形は不整形を呈するものと考えられる。規模は、長軸を約3.0mまで確認し、短軸は約1.9mである。深さは約35cmを計る。埋土は、3層に分けられ、灰黄褐色を基調とし、上層が粘土質で、最下層は砂質シルトである。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・壺、赤焼き土器杯・高台付杯、平瓦・丸瓦の他にキセルが出土している。

SK 253 土塚 調査区東側の南壁ぎわの整地層1上面で検出した。SK 254 土塚と重複関係があり、これよりも新しい。平面形は不整円形を呈するものと考えられる。規模は、長軸が約1.0mで、短軸は約0.5mまで確認した。深さは約25cmを計る。遺物は、土師器甕、須恵器杯・壺が出土している。

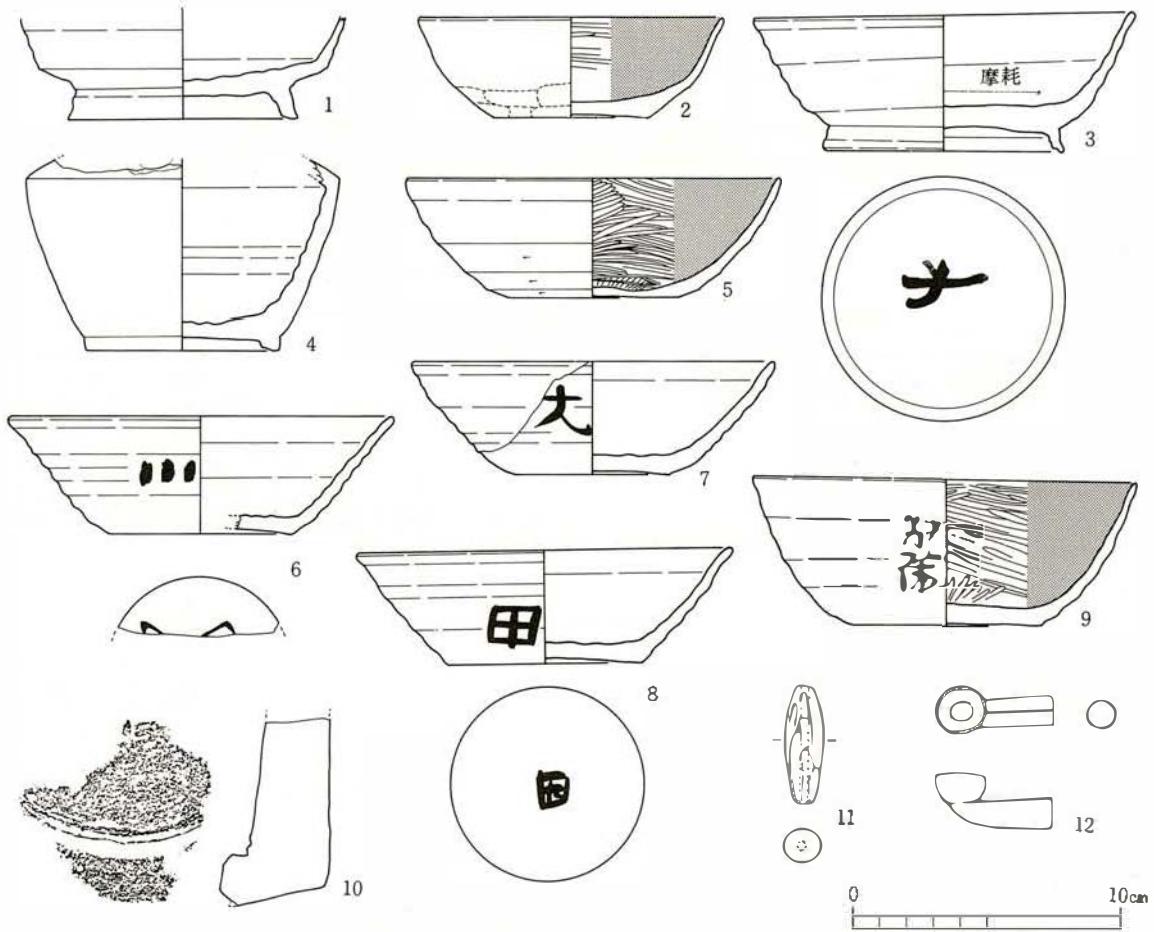
SK 254 土塚 調査区東側の南壁ぎわの整地層1上面で検出した。重複関係からSK 255 土塚より新しく、SK 253 土塚よりも古い。平面形は不整形を呈するものと考えられる。規模は、長軸が約1.8mで、短軸は約1.3mまで確認した。深さは約20cmを計る。埋土は、5層に分けられるが、基本的には灰黄褐色シルト層と褐灰色シルト層である。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・稜碗・甕・長頸瓶、赤焼き土器、丸瓦が出土している。

SK 255 土塚 調査区東側の整地層6上面で検出した。重複関係からSK 254 土塚よりも古くSD 246 溝跡よりも新しい。平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。規模は長



遺構	No.	土色	備考
SK 252	1	10YR 5/6灰黄褐色	粘土、酸化鉄ブロック状に多く含む
	2	〃	〃
	3	10YR 5/6	砂質シルト、灰黄褐色粘土と互層
SK 254	1	10YR 5/6灰黄褐色	シルト、マンガン粒微量、酸化鉄ブロッ
	2	7.5YR 5/6褐灰色	ク量に含む
	3	10YR 5/6褐灰色	シルト、炭化物ブロック含む
	4	〃	炭化物ブロック含む
	5	10YR 5/6灰黄褐色	粘土、5mm以下の炭化物ブロックを含む
SK 255	1	10YR 5/6褐灰色	シルト、酸化鉄ブロック多量に含む
	2	10YR 5/6黒褐色	粘土、黒色粘土層を帯状に含む
	3	10YR 5/6褐灰色	炭化物ブロック、マンガン粒微量含む
	4	〃	粘土質シルト、灰黄褐色砂層しま状に含む
	5	〃	〃
	6	10YR 5/6灰黄褐色	オリーブ灰砂層しま状に一部含む
SD 250	①	10YR 5/6黑褐色	シルト 黄褐色土を帯状に含む

第17図 SK 252・254・255土塚、SD 246溝跡セクション図

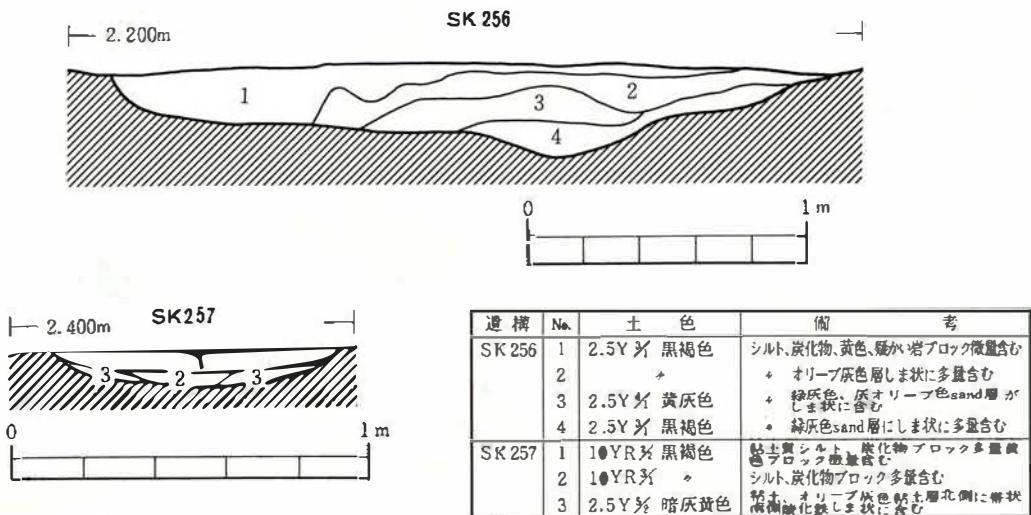


No.	遺構	層位	種類	器形	外 面 調 査	内 面 調 査	口径	底径	器高	備 考
1	SK254	1層	須恵器	棱 杭	ロクロナデ	ロクロナデ	(8.6)			
2	SK 257	・	土師器	杯	・ (体部下端手持ヘラケズり、底部不明)	ヘラミガキ・黒色処理	(11.4)	5.8	3.7	
3	・	・	須恵器	高台付杯	・ 底部回転糸切り	ロクロナデ・底部摩耗	14.2	9.0	5.0	外底部墨書き「口」 注口をもつ
4	SK256	・	・	長頸瓶	・ ク	ロクロナデ		7.3		
5	・	2層	土師器	杯	・ (体部下端～底部回転ヘラケズり)	ヘラミガキ・黒色処理	(13.9)	6.3	4.4	
6	・	・	須恵器	・ 器	・ 底部回転糸切り	ロクロナデ	(14.4)	(6.8)	4.4	外体底部墨書き 外体部墨書き「大」
7	・	・	・	・ ク	・ ク	・ (13.5)	5.7	4.2		
8	・	3層	・	・ ク	・ ク	・ (14.1)	7.2	4.2		外体底部墨書き「田」
9	・	・	土師器	・ 壺	・ ク	ヘラミガキ・黒色処理	14.3	7.0	5.4	外体部墨書き「口口」
10	・	・	軒丸瓦	・ 瓦	重圓文 長さ 4.4cm、幅 1.4cm					
11	・	・	土 鍵	・ 鍵						
12	SK252	1層	銅製品	キ セル	雁首部					

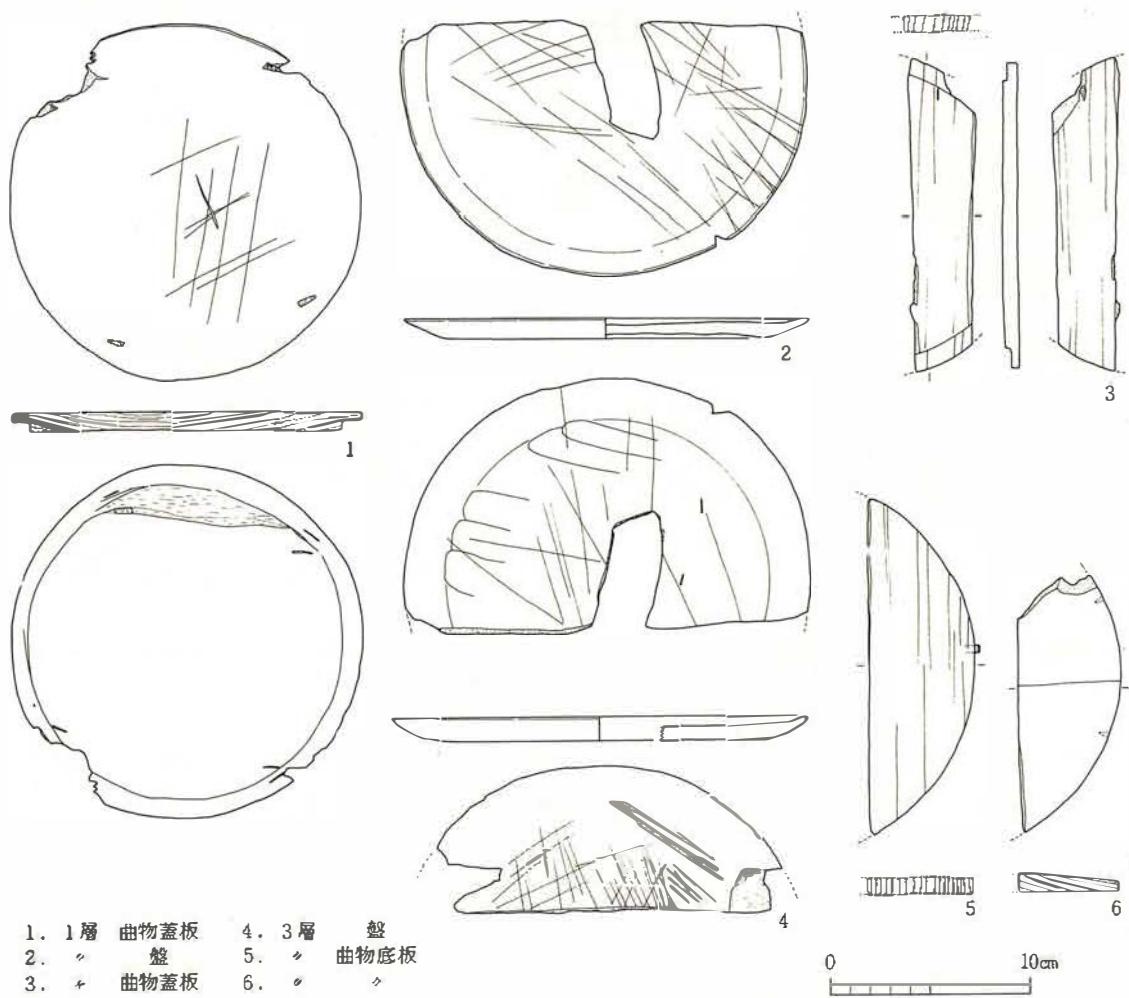
第18図 SK 出土遺物

軸約1.4m、短軸約1.2m、深さ約25cmを計る。埋土は6層に細分されるが、基本的には褐灰色シルトである。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕・壺、赤焼き土器、平瓦・丸瓦の他に土製カマドの破片が出土している。

SK 256 土塙 調査区南西部の第Ⅳ層上面で検出した。SD 243・250 溝跡と重複関係があり、これらよりも新しい。平面形は不整方形を呈する。規模は長軸約5.2m、短軸約2.9m、深さ約30cmを計る。埋土は4層に分けられるが、基本的には黒褐色シルト・黄灰色シルトである。遺



第19図 SK 256・257 土塙セクション図



第20図 SK 256 土塙出土遺物（木製品）

物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・蓋・甕・長頸瓶・壺、赤焼き土器杯・高台付皿、平瓦・丸瓦の他に木製品（盤・曲物）や土製カマドの破片が出土している。

SK 257 土塙 調査区東側の地山面で検出した。平面形は不整形を呈する。規模は長軸が約1.7m、短軸約0.9m、深さ約10cmを計る。埋土は3層に分けられ、基本的に黒褐色と暗灰黄色である。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕、赤焼き土器が出土している。

〈堆積層出土遺物〉

I～VI層からは、土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、縁釉陶器、瓦、土製品、木製品、鉄製品、砥石等が出土している。

I層（表土）には、近世以降の陶器の他に土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦等がある。

II～VI層には、土師器杯・高台付杯・耳皿・甕、須恵器杯・高台付杯・双耳杯・蓋・甕・壺・長頸瓶、赤焼き土師器杯、灰釉陶器、縁釉陶器等があり、このうち、特にVI層からの出土量が多い。なお、各層ごとの特徴的な違いは見い出せなかった。

土師器杯は、全てロクロを使用しており、内面はヘラミガキ・黒色処理を施しており、製作技法からの違いがみられない。ロクロからの切り離し・調整技法をみると、回転糸切り無調整のものが多く認められ、他に静止糸切り無調整のもの、回転ヘラケズリ・手持ちヘラケズリ調整を施しているものがある。

須恵器杯については、ロクロからの切り離し・調整技法から5種類に分類できる。このうちA類の出土量が最も多く、ついでB類であり、両者が杯全体の主流を占める。

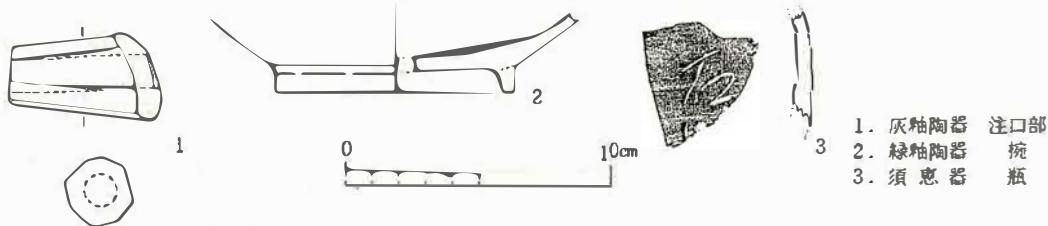
A類：回転糸切りでロクロから切り離し、無調整のもの。

B類：回転ヘラ切りでロクロから切り離し、無調整のもの。

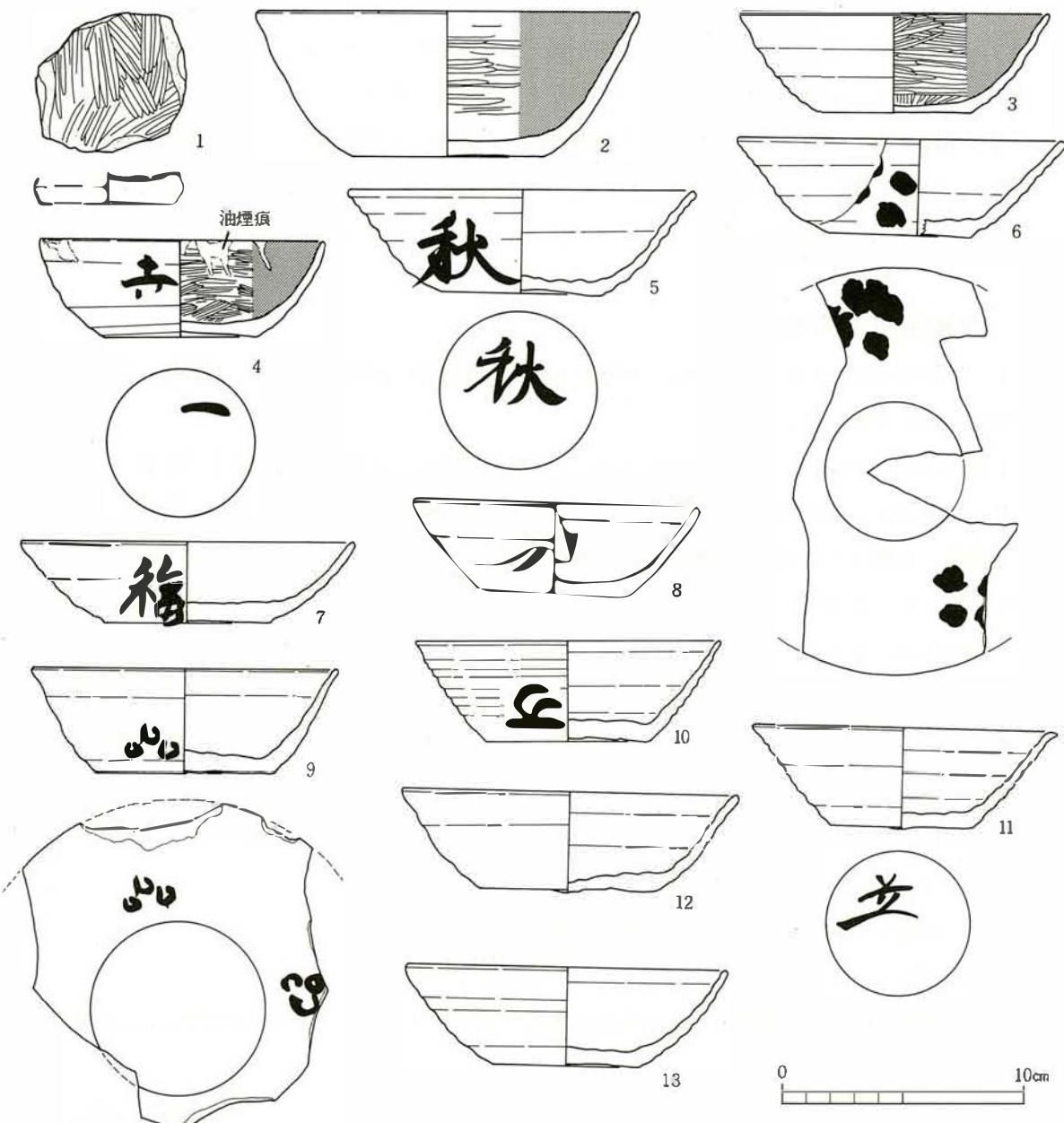
C類：回転ヘラケズリ調整を底部全面から体部下端にかけて施しており、切り離し痕跡が残らないもの。

D類：手持ちヘラケズリ調整を底部全面から体部下端にかけて施しており、切り離し痕跡が残らないもの。

E類：回転ヘラ切りでロクロから切り離した後にナデ調整を施しているもの。



第21図 VI層出土遺物

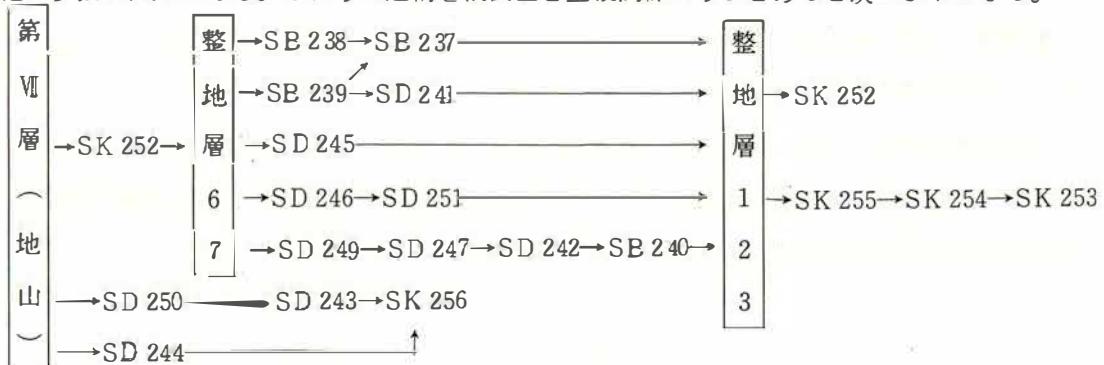


No.	層位	種類	器形	外 面 調 整	内 面 調整	口径	底径	器高	備 考
1	V層	土師器	耳皿	ロクロナデ 底部回転糸切りのち周縁手持ヘラケズリ	ヘラミガキ	5.6			
2	VI層		杯	タ 底部摩滅	ヘラミガキ、黒色処理	7.9	6.0		
3	タ		タ	タ 底部回転糸切り	タ	(12.8)	6.4	4.1	
4	タ		タ	タ 体部下端～底部回転ヘラケズリ	タ	11.8	6.2	4.0	黒書「先」「一」
5	タ	須恵器	杯	タ 底部回転糸切り	ロクロナデ	14.4	6.6	4.3	外体底部墨書き「秋」
6	タ		タ	タ	タ	13.6	5.8	4.1	墨書き文様
7	+		タ	タ 底部回転ヘラ切り	タ	13.8	7.0	3.4	外体部墨書き「福」
8	+		タ	タ 底部手持ヘラケズリ	タ	(11.9)	6.0	3.8	体部両面墨書き「口」
9	+		タ	タ 底部回転ヘラ切り	タ	(12.7)	7.2	4.3	墨書き文様
10	+		タ	タ	タ	12.6	6.8	4.2	外体部墨書き「万」
11	タ		タ	タ	タ	(12.6)	6.0	4.1	外底部墨書き「並」
12	タ		タ	タ	タ	14.0	7.3	4.1	
13	タ		タ	タ 底部回転糸切り	タ	13.3	6.0	4.1	

第22図 V層・VI層出土遺物

IVまとめ

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物跡4棟、溝跡29条、土塙6基、水田跡、整地層の他に多数の柱穴がある。これらの遺構を検出面と重複関係からまとめると次のようになる。



各遺構は、このように整地層を介在して複雑に重複している。ここでは各遺構群の年代を中心について述べることにする。

はじめに、整地層6・7上面検出遺構を覆っている整地層1~3の年代について検討し、これより下層で検出した遺構の下限年代を与えておきたい。整地層1~3より出土した遺物は、土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器がある。土師器杯は、ロクロ使用のもので表杉ノ入式の範疇に属するもので、ロクロからの切り離し技法が回転糸切り無調整のものが大部分である。須恵器杯においては、回転糸切り無調整のものと回転ヘラ切り無調整のものが主流を占めている。赤焼き土器は、多賀城跡出土土器のうちF群土器の須恵系土器に対比できるもので、F群土器に10世紀中頃の年代が与えられている（註11・12）。したがって、整地層1~3の年代は、おおむね10世紀中頃としておきたい。

整地層6・7上面で検出した遺構群より出土した遺物から検討してみると、土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器が出土しており、土師器杯は、ロクロ使用のものでロクロからの切り離し技法が回転糸切り無調整のものが主流である。須恵器杯においては、回転糸切り無調整のものと回転ヘラ切り無調整のものが大部分を占めている。次に10世紀前半に降灰したと考えられている灰白色火山灰が、SD 245溝跡付近に自然堆積していることや、SD 245溝跡の層中にブロック状に含まれる。したがって、整地層6・7上面で検出した遺構の年代は、10世紀前半と考えておきたい。

第VII層上面で検出したSK 252土より出土した遺物をみると、土師器、須恵器、赤焼き土器があり、土師器杯は、整地層6・7上面で検出した遺構群から出土するものと同じロクロ使用のものであることや、赤焼き土器が出土していることより、おおむね10世紀初頭と考えておき

たい。

南西部の第Ⅸ層上面で検出した遺構群については、出土遺物から検討すると、土師器、須恵器、赤焼き土器があり、土師器杯はロクロ使用のもので、切り離し技法が回転糸切り無調整のものである。また、灰白色火山灰がS D 243溝跡の層中にブロック状に含まれていることより10世紀前半には機能していたと考えられる。

整地層1上面で検出した遺構群については、古代の土器類の他にキセルが出土していることより、近世以降のものと考えられる。

今回の調査では、10層に細分される整地層が検出されたが、これは、本調査区が低丘陵の裾部から低湿地に移行する箇所にあたることや、地山面に起伏があることから、整地事業を行い居住地域を広げたものと考えられる。

(註)

- 註 1. 宮城県多賀城跡調査研究所「第22次発掘調査」多賀城跡調査研究所次報1973(1974)
- 註 2. 宮城県教育委員会「市川橋、山王遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報(昭和53年度分)』
宮城県文化財調査報告書第57集(1979)
- 註 3. シ 「水入遺跡発掘調査報告書」宮城県文化財調査報告書第84集(1982)
- 註 4. 宮城県多賀城跡調査研究所「第37次発掘調査」多賀城跡調査研究所年報1980(1981)
- 註 5. 多賀城市教育委員会「高崎・市川橋遺跡調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第3集(1982)
- 註 6. シ 「市川橋遺跡調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第4集(1983)
- 註 7. シ 「市川橋遺跡調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第5集(1984)
- 註 8. 訳 7 と同じ
- 註 9. 多賀城市教育委員会「市川橋遺跡—昭和59年度発掘調査報告書—」多賀城市文化財調査報告書第8集(1985)
- 註10. シ 「市川橋遺跡—昭和61年度発掘調査報告書—」多賀城市文化財調査報告書第13集(1987)
- 註11. 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』宮城県多賀城跡調査研究所(1981)
- 註12. 宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡・政庁跡本文編」(1982)

(引用・参考文献)

1. 多賀城市教育委員会「篠前遺跡—昭和54年度発掘調査報告—」多賀城市文化財調査報告書第1集(1980)
2. 田中則和他「山口遺跡II」仙台市文化財調査報告書第61集(1984)
3. 吉岡恭平他「高速鉄道関係遺跡調査概報V」仙台市文化財調査報告書第89集(1986)
4. 八賀 晋「古代における水田開発—その土壤的環鏡—」『日本史研究96』(1968)

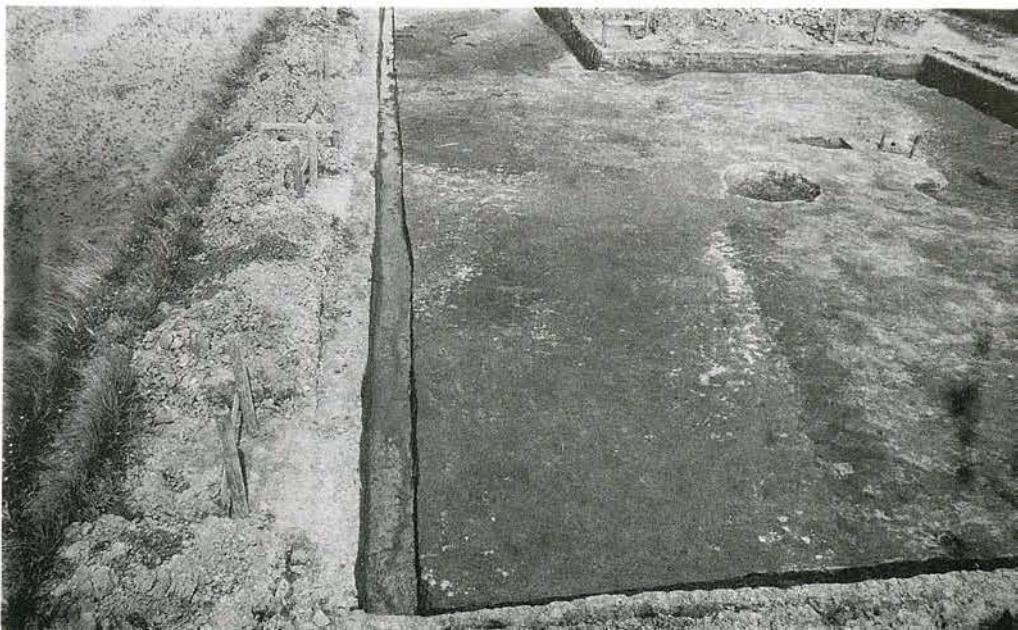
図版 1
遺構全景
(東から)



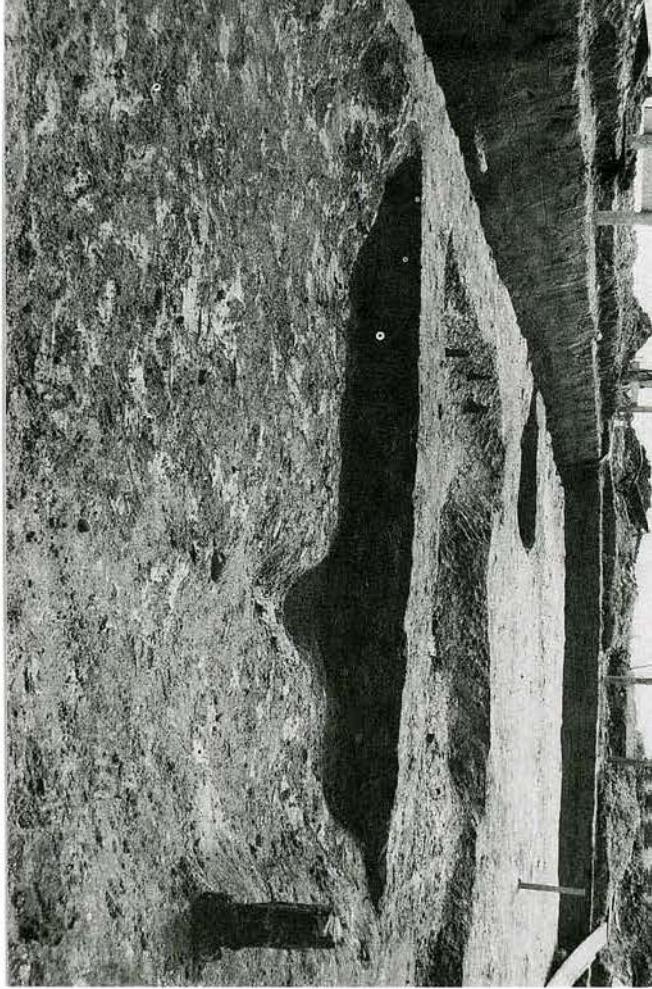
図版 2
遺構全景
(西から)



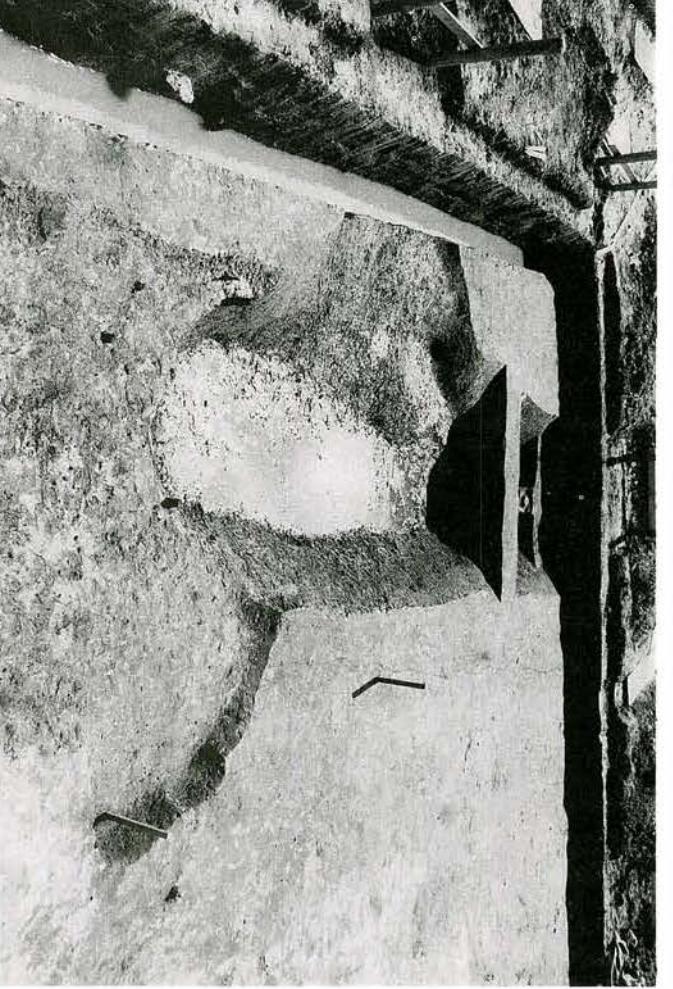
図版 3
水田跡検出状況
(西から)



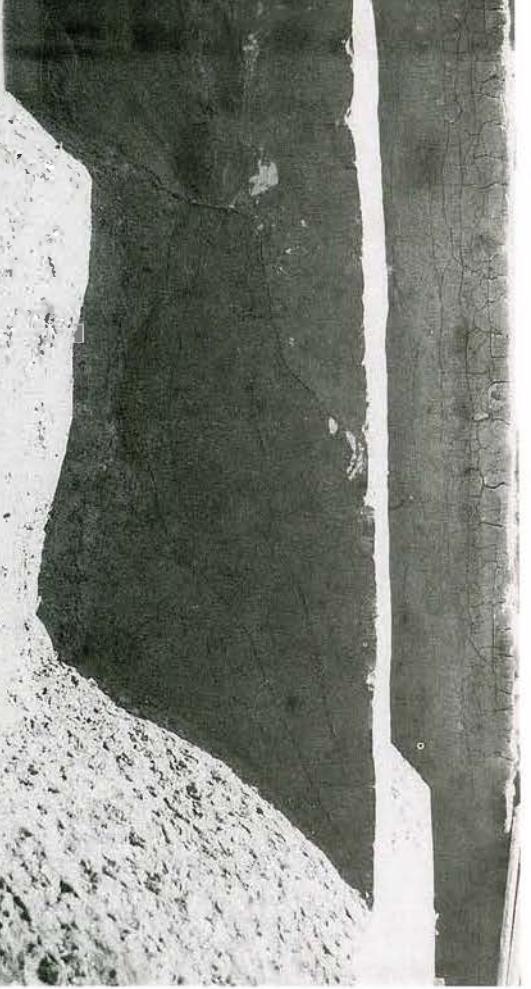
図版4
SK 256土塙
(東から)



図版5
SD 243溝跡
(東から)



図版6
SD 250溝跡
(東から)



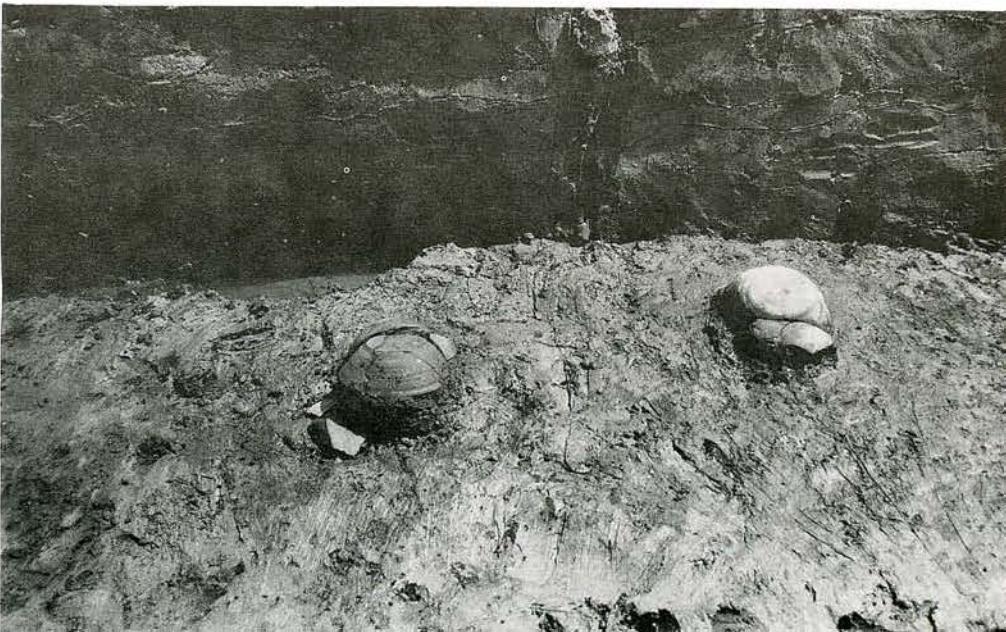
図版 7
地山上面全景
(東から)

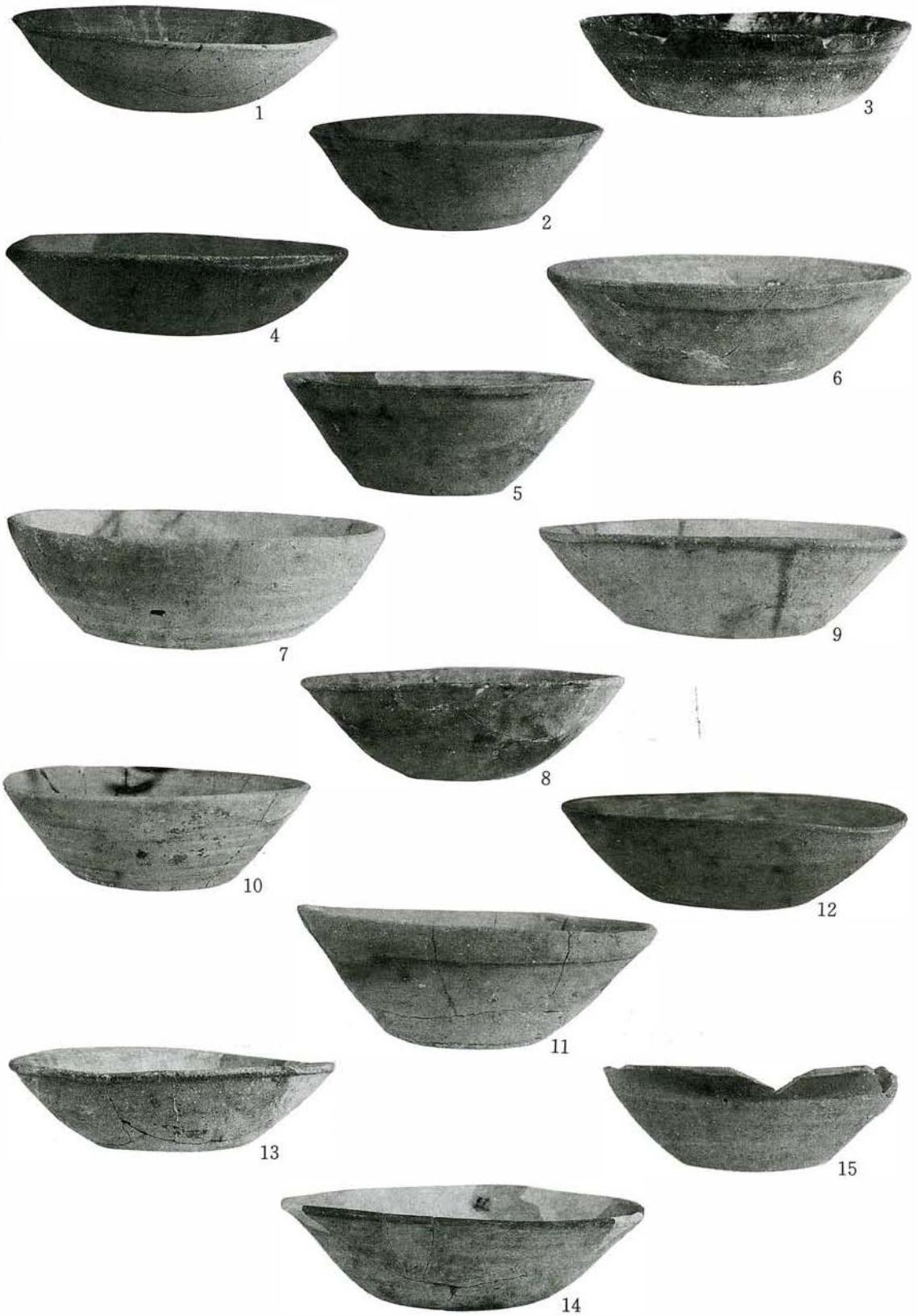


図版 8
SK 257土塚
(西から)

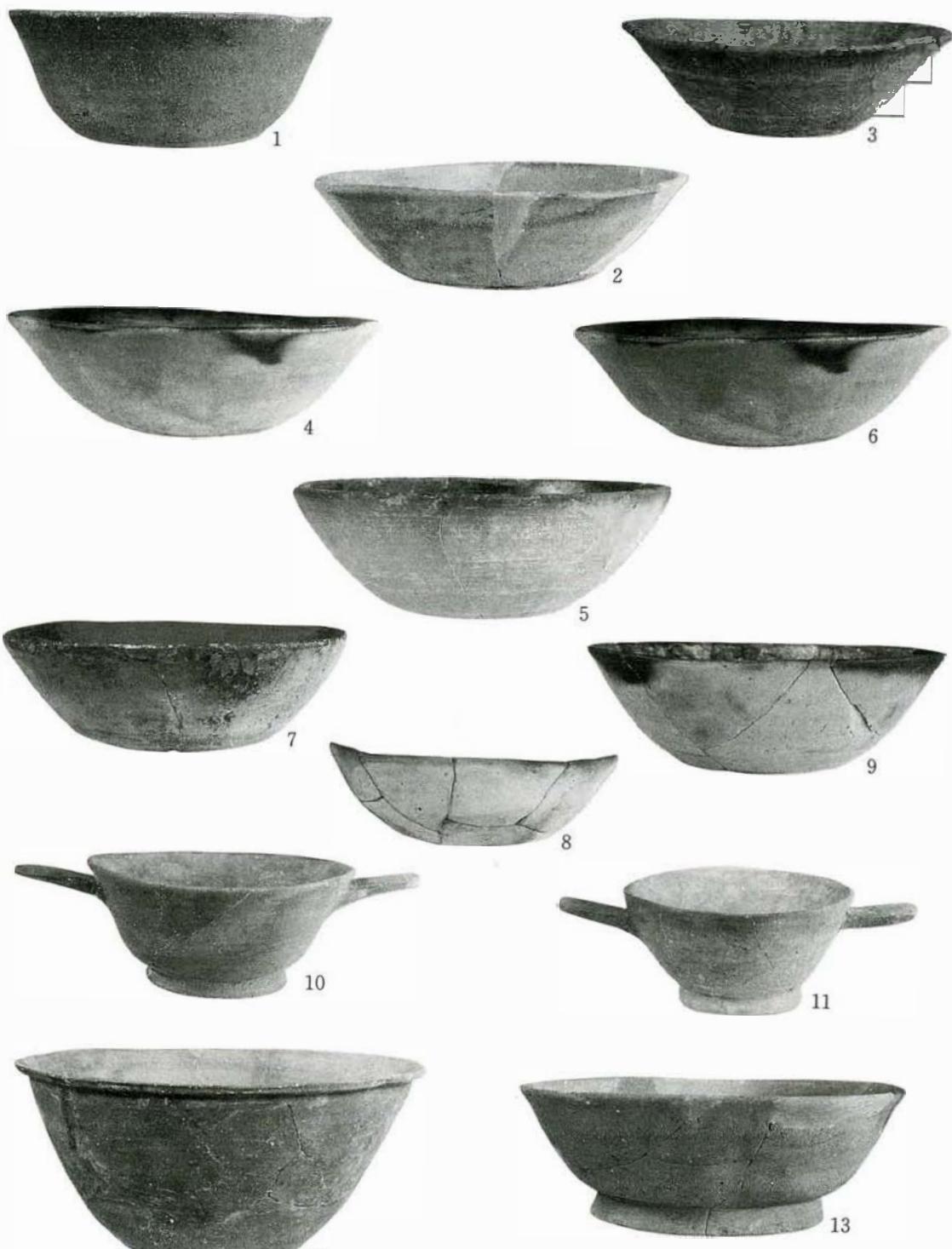


図版 9
整地層10遺物
出土状況
(北から)



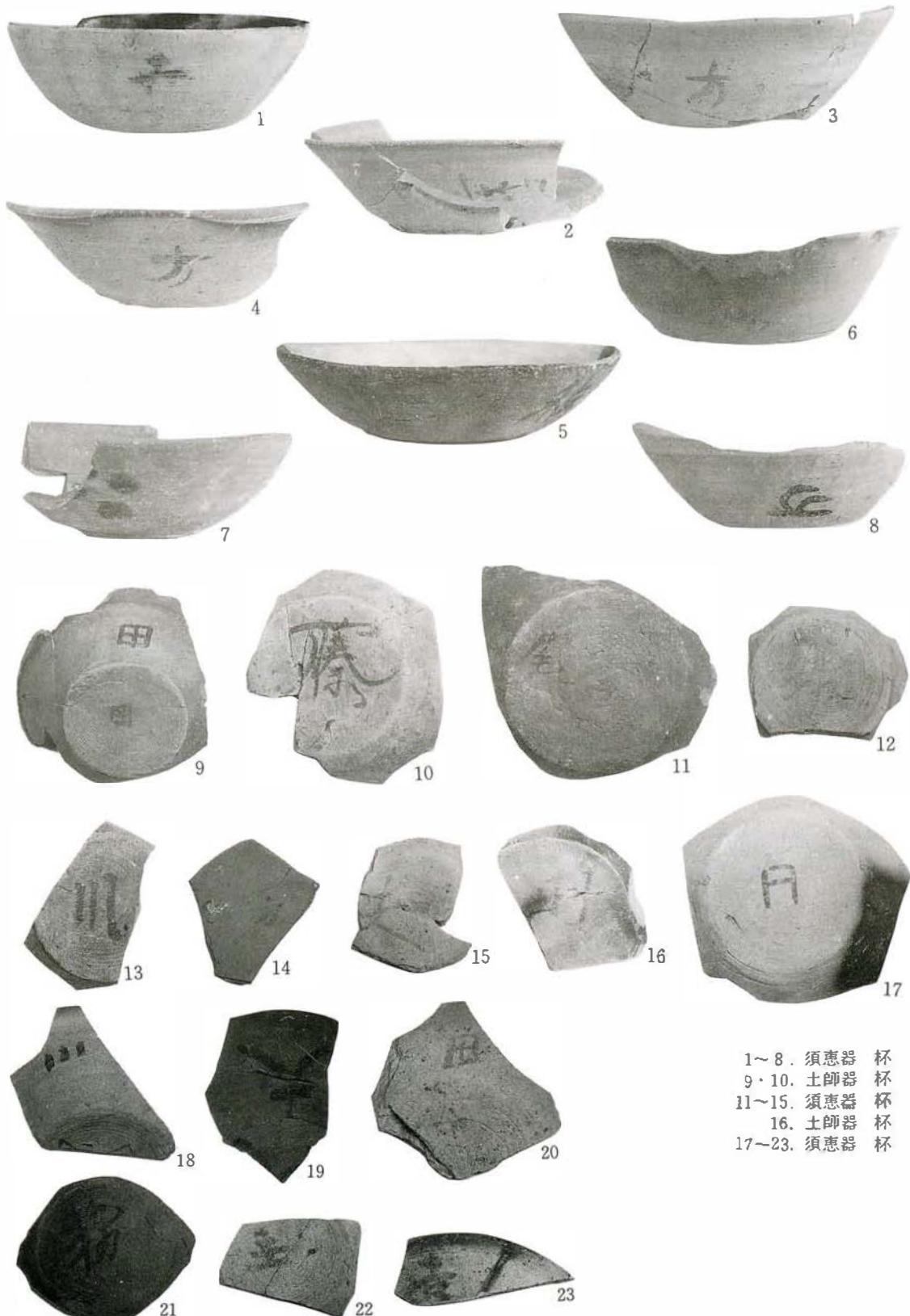


図版10 出土遺物（須惠器杯）



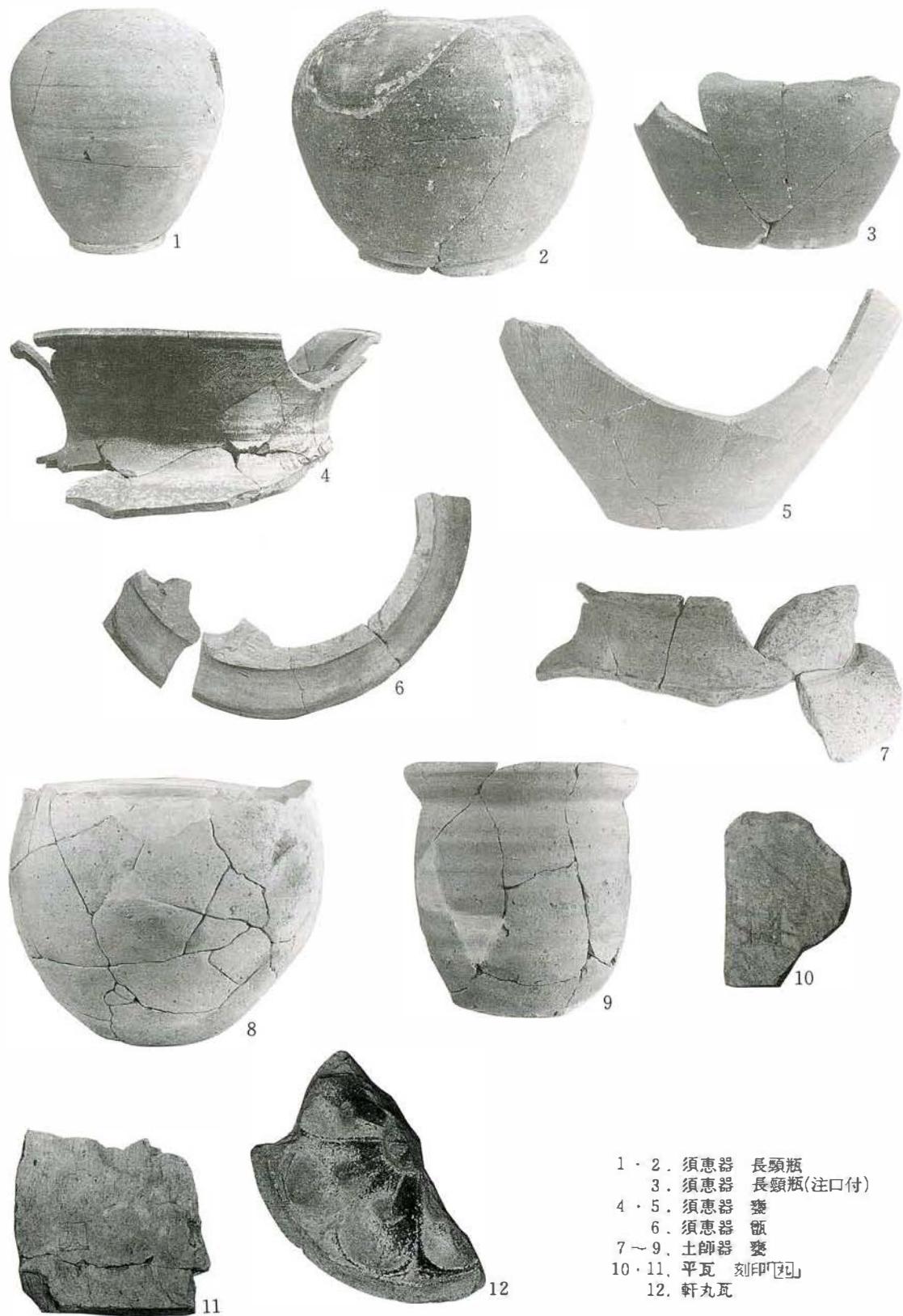
1~3. 須恵器 杯
 4~9. 土師器 杯
 10·11. 須恵器 双耳杯
 12. 須恵器 鉢
 13. 須恵器 高台付杯

図版11 出土遺物



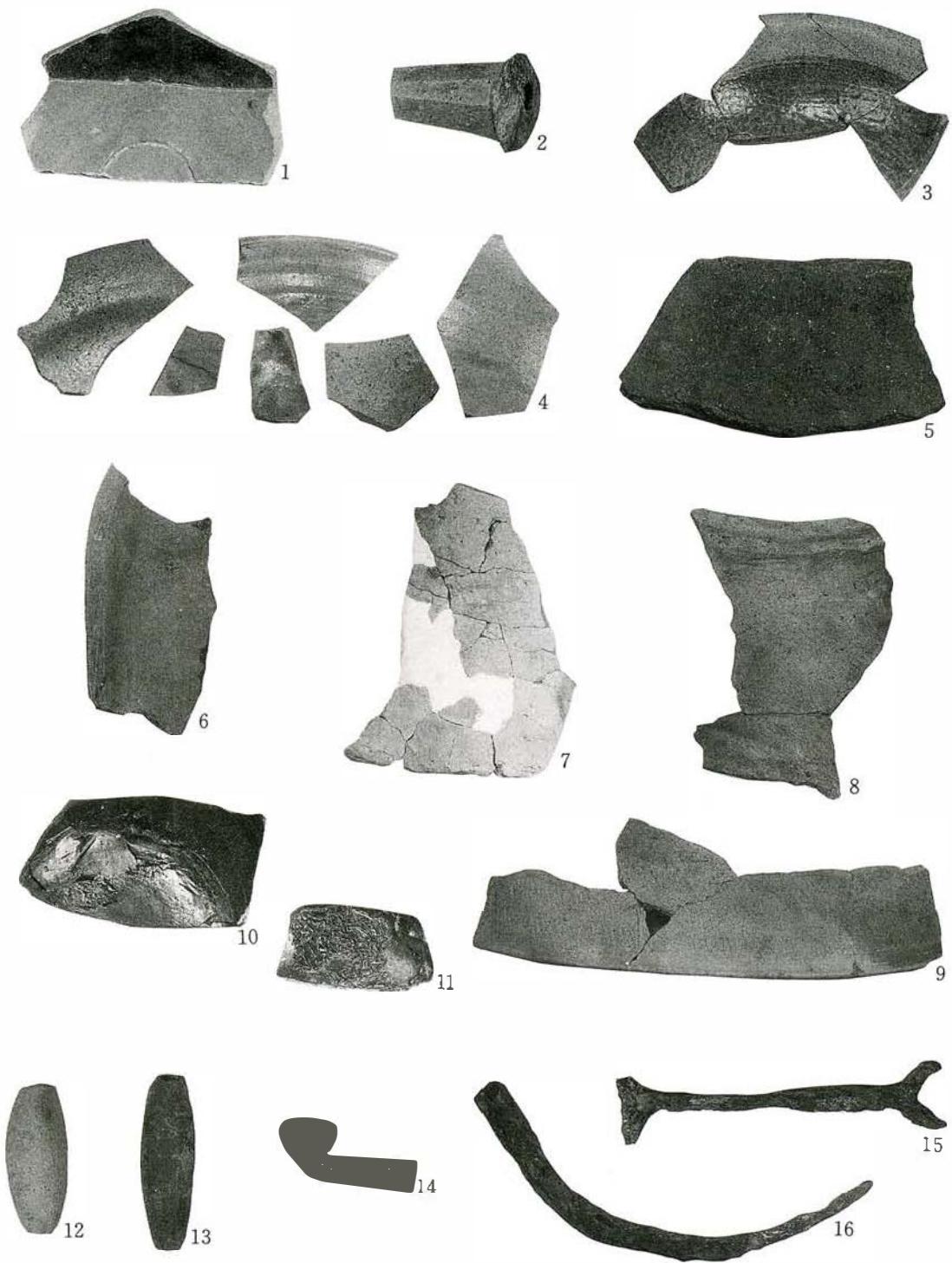
1~8. 須恵器 杯
 9·10. 土師器 杯
 11~15. 須恵器 杯
 16. 土師器 杯
 17~23. 須恵器 杯

図版12 出土遺物



1・2. 須恵器 長頸瓶
 3. 須恵器 長頸瓶(注口付)
 4・5. 須恵器 瓢
 6. 須恵器 飯
 7～9. 土師器 麽
 10・11. 平瓦 刻印冂瓦
 12. 軒丸瓦

図版13 出土遺物



- | | | |
|-------------|-----------------|------------|
| 1. 線釉陶器 楪 | 5. 平瓦 転用硯 | 12・13. 土 锤 |
| 2. 灰釉陶器 注口部 | 6. 風字硯 | 14. キセル |
| 3. 灰釉陶器 楪 | 7～9. 土製カマド | 15. 鉄製品 不明 |
| 4. 灰釉陶器 破片 | 10・11. 漆付着土師器 杯 | 16. 鉄製品 釘 |

図版14 出土遺物

市川橋遺跡第9次調査

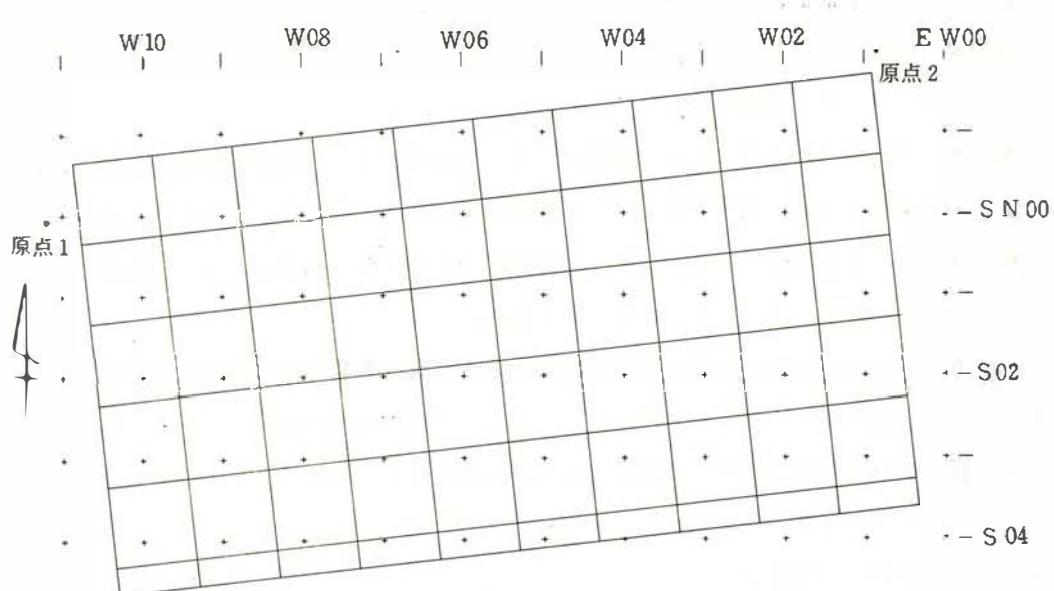
I 調査に至る経緯

本調査については、平成元年3月に地権者から宅地造成工事の計画が提示されたため、その内容等について協議を行った。当該地は、昭和59年度に調査を実施した第5次調査区の北側水田部に隣接し、また、本年度調査を実施した第7次調査区の西側に位置する。その際に多量の遺物を含む整地層や掘立柱建物跡・一本柱列跡・井戸跡・溝跡・水田跡等が発見されており、当該地においても同様な遺構の存在が考えられた(註1)。

このため、地権者に対し調査の協力を依頼し、平成元年9月に発掘調査の承諾書の提出を受け、9月18日から調査を実施した。

II 調査方法と経過

今回の発掘調査は、調査区の南側に隣接する第5次調査において発見された遺構の延びなどを考慮し、また、調査予定地が水田であるため、水田の地形にそって調査区を設定した。調査対象面積は、1020m²でその内の480m²について調査を実施した。



第1図 調査区設定図

調査は、平成元年9月18日より開始したが、調査区が耕作されていたため、水貫き用の排水溝を兼ねた土層観察用のトレンチを設けた。また、重機での表土剥離作業を行うことができないため、手掘りで表土剥離作業を行った。調査区内を一辺3mのグリッドで区画し、南北をアルファベット、東西をアラビア数字で示した。遺物の取り上げにはこれを用いた。表土剥離を10月9日に掘り終え、第Ⅱ層の掘り込みを行う。第Ⅲ層上面及び整地層上面での遺構検出作業を開始するが、遺構は検出できなかった。第Ⅲ層の掘り込みを行い、並行しながら実測図作成のため、原点1(X:-189 169.973, Y:13,966.367)と原点2(X:-189,164.035, Y:13,997.331)を基準とし、遣り方を設定する。10月27日に整地層上面での全景写真撮影を行う。調査区西側の整地層の掘り込みを行い、その際に土層観察用に「十」字にベルトを残した。地山面での遺構検出作業を行い、溝跡・ピット等を検出し、遺構の掘り込み調査を行う。11月30日に調査区西側の全景写真を撮影する。調査区に東側においては、整地層D上面での遺構検出作業を行い、溝跡・柱穴等を検出し、遺構の掘り込み調査を行う。また、調査区の東南部においては、整地層B・Cの掘り込みを行い、地山面で溝跡を検出する。12月19日に調査区東側の全景写真を撮影し、12月25日には、柱穴の断ち割りを行い調査を終了した。

III 調査成果

〈基本層位〉

第Ⅰ層 現在の水田耕作土（表土）で灰色の粘土質からなる。層厚は、10~20cmを計る。

第Ⅱ層 暗灰黄色の粘土層である。層厚は、5~10cmを計り、調査区の南東部に堆積する。酸化鉄・マンガン粒を多量に含む。

第Ⅲ層 黒褐色の粘土層である。層厚は、5~15cmを計る。整地層の窪地に堆積し、特にSD 263・264溝跡の上層に厚く堆積している。層中には、炭化物や焼土をわずかに含む。

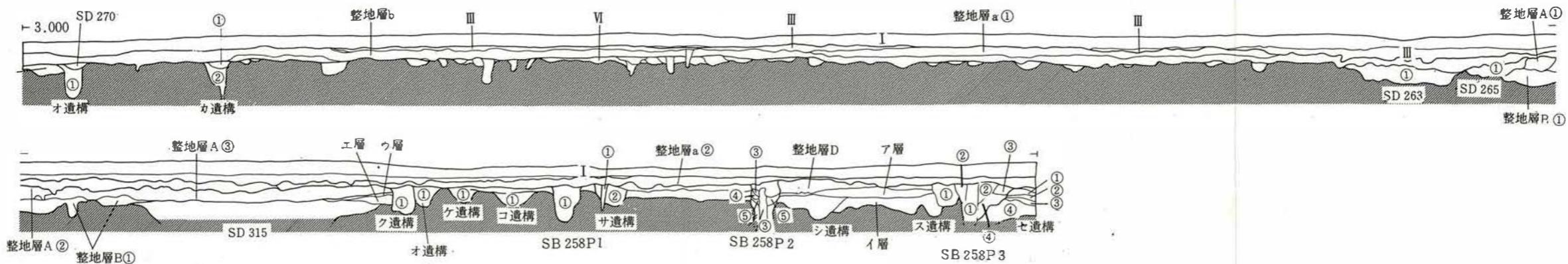
第Ⅳ層 暗灰黄色の粘土層で、調査区の南東部に堆積する。層厚は、5~30cmを計り、下面是起伏がある。層中には、わずかに炭化物を含む。

第Ⅴ層 暗オリーブ灰色の粘土層で、調査区の南東部に堆積する。層厚は、5~20cmを計る。層中には、黒褐色粘土をブロック状に含む。また、下部には地山がブロック状に含まれる。

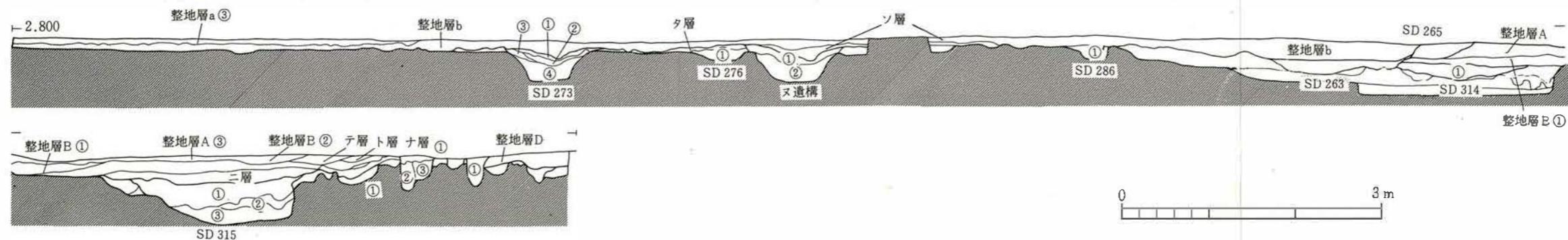
第Ⅵ層 黒褐色の粘土層で、調査区の南西部に堆積する。層厚は、5~30cmを計り、南に傾いて厚さを増す。

〈発見遺構と遺物〉

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物跡5棟、土塙1基、溝跡57条、整地層、多数の柱穴である。



遺構名	層位	土色	土性	その他の	遺構名	層位	土色	土性	その他の	遺構名	層位	土色	土性	その他の	
整地層a ①		10YR 5/2	灰黃褐色土	粘土質シルト	灰白色火山灰をブロック状に含む	⑥	2.5Y 5/2	暗灰黃色土	粘土	燒土粒・炭化物粒を含み、地山をブロック状に含む	コ 遺 構	①	10YR 5/2	黑褐色土	粘土
②		2.5Y 5/2	暗灰黃色土	砂 質シルト	マンガン粒・燒土粒を含む	①	10YR 5/2	灰黃褐色土	砂 質シルト	炭化物粒を含む	サ 遺 構	①	10YR 5/2	灰黃褐色土	粘土質シルト
③		10YR 5/2	灰黃褐色土	粘土質シルト	マンガン・灰化物粒・燒土粒を含み灰白色火山灰を部分的に含む	②	10YR 5/2	灰黃褐色土	砂 質シルト	地山をブロック状に含み、小石も含む	シ 遺 構	①	10YR 5/2	灰黃褐色土	粘土
整地層b		2.5Y 5/2	暗灰黃色土	砂 質シルト	炭化物粒・燒土粒を含む	④	10YR 5/2	灰黃褐色土	粘 土	炭化物粒を含む、地山をブロック状に含む	ス 遺 構	①	10YR 5/2	灰黃褐色土	砂 質シルト
整地層A ①		2.5Y 5/2	暗灰黃色土	砂 質シルト	炭化物粒・燒土粒を多く含む	④	2.5Y 5/2	暗灰黃色土	粘 土	炭化物粒・マンガン粒を含み、地山をブロック状に含む	セ 遺 構	①	10YR 5/2	灰黃褐色土	砂 質シルト
②		2.5Y 5/2	暗灰黃色土	砂 質シルト	炭化物粒・燒土粒をわずかに含む	SD 263	1	2.5Y 5/2	暗灰黃色土	砂 質シルト	燒土を含む	②	10YR 5/2	灰黃褐色土	粘 土
整地層D ①		2.5Y 5/2	暗灰黃色土	砂 質シルト	炭化物粒・マンガン粒を含み、黄色土粒を多量に含む	SD 265	1	10YR 5/2	灰黃褐色土	粘 土	地山をブロック状に少し含む	③	10YR 5/2	灰 黑色土	粘 土
整地層D		2.5Y 5/2	暗灰黃色土	砂 質シルト	炭化物粒・マンガン粒を含み、地山をブロック状に含む	SD 270	1	10YR 5/2	灰黃褐色土	粘 土	地山をブロック状に含む	④	10YR 5/2	黑色土	粘 土
SB 258P1	①	10YR 5/2	灰黃褐色土	粘土質シルト	炭化物粒・マンガン粒を含み、地山をブロック状に含む	オ 遺 構	①	10YR 5/2	灰黃褐色土	粘 土	地山をブロック状に含む	ア イ	2.5Y 5/2	暗灰黃色土	砂 質シルト
SB 258P2	①	2.5Y 5/2	暗灰黃色土	シルト	炭化物粒・燒土粒・黃色土状を含む	カ 遺 構	①	10YR 5/2	灰黃褐色土	粘 土	炭化物粒・燒土を含み、地山をブロック状に含む	ウ	2.5Y 5/2	黑褐色土	粘 土
	②	10YR 5/2	灰黃褐色土	粘 土	炭化物粒・燒土粒を含み、地山をブロック状に含む、柱が残る	キ 遺 構	①	2.5Y 5/2	暗灰黃色土	粘土質シルト	炭化物粒を含み、地山をブロック状に含む	エ	10YR 5/2	灰黃褐色土	砂 質シルト
	③	2.5Y 5/2	灰 黑色土	シルト	暗灰黄色粘土を含む	ク 遺 構	①	10YR 5/2	黑褐色土	粘 土	炭化物粒を含み、地山をブロック状に含む		2.5Y 5/2	暗灰黃色土	粘土質シルト
	④	2.5Y 5/2	暗黃色土	砂	炭化物粒・燒土粒を含む	ケ 遺 構	①	10YR 5/2	黑褐色土	粒 土	地山をブロック状に含む				
	⑤	2.5Y 5/2	にふり黃色土	砂	暗黃色粘土・地山をブロック状に含む										



遺構名	層位	土色	土性	その他の	遺構名	層位	土色	土性	その他の	遺構名	層位	土色	土性	その他の	
SD 273	①	10YR 5/2	灰黃褐色土	粘 土	酸化鉄を多量に含む	③	7.5Y 5/2	暗オリーブ色土	粘 土	植物遺体を含む	テ 層	10YR 5/2	灰黃褐色土	砂 質シルト	炭化物粒・燒土粒を含む
	②	2.5Y 5/2	暗灰黃色土	粘 土	酸化鉄を含む	①	10YR 5/2	褐灰色土	粘 土	地山をブロック状に多く含む	ト 層	10YR 5/2	灰黃褐色土	シルト	炭化物粒・燒土粒を含む
	③	10YR 5/2	灰黃褐色土	粘 土	地山粒を含む	②	10YR 5/2	灰黃褐色土	粘 土	炭化物粒・燒土粒を少し含む	ナ 層	10YR 5/2	灰黃褐色土	粘土質シルト	炭化物粒を含み、地山粒を多く含む
	④	2.5Y 5/2	黃灰色土	粘 土	地山をブロック状に多く含む	③	10YR 5/2	灰黃褐色土	粘 土	炭化物粒を少し含み、地山をブロック状に含む	二	2.5Y 5/2	黑褐色土	粘 土	炭化物粒を少す含む
SD 276	①	10YR 5/2	灰黃褐色土	粘 土	地山をブロック状に含む	ノ 遺 構	①	10YR 5/2	灰黃褐色土	粘 土	炭化物粒・燒土粒を含み、地山をブロック状に多く含む				
又 遺 構	①	10YR 5/2	灰黃褐色土	粘土質シルト	酸化鉄・炭化物粒・燒土粒を含む	整地層B ②	2.5Y 5/2	暗灰黃色土	粘 土	炭化物粒・燒土粒を含み、地山をブロック状に多く含む					
	②	2.5Y 5/2	暗灰黃色土	粘 土	地山を層状に多く含む	ソ 層	2.5Y 5/2	暗灰黃色土	砂	炭化物粒・燒土粒を含む					
	③	2.5Y 5/2	暗灰黃色土	粘 土	炭化物粒・燒土を含み、地山をブロック状に少し含む	タ 層	10YR 5/2	灰黃褐色土	シルト	炭化物粒・燒土粒・地山粒を少し含む					
SD 286	①	2.5Y 5/2	黃褐色土	粘 土	炭化物粒を多く含み、地山をブロック状に多く含む	チ 層	10YR 5/2	灰黃褐色土	粘 土	炭化物粒・燒土粒を含み、地山をブロック状に多く含む					
SD 314	①	2.5Y 5/2	黃褐色土	粘 土	地山をブロック状に含む	ツ 層	10YR 5/2	褐灰色土	粘 土	炭化物粒を多く含み、地山をブロック状に多く含む					
SD 315	①	2.5Y 5/2	黑褐色土	粘 土	灰オリーブ色粘土をブロック状に含む										
	②	2.5Y 5/2	暗灰黃色土	粘 土											

第2図 北壁・東西ベルトセクション図

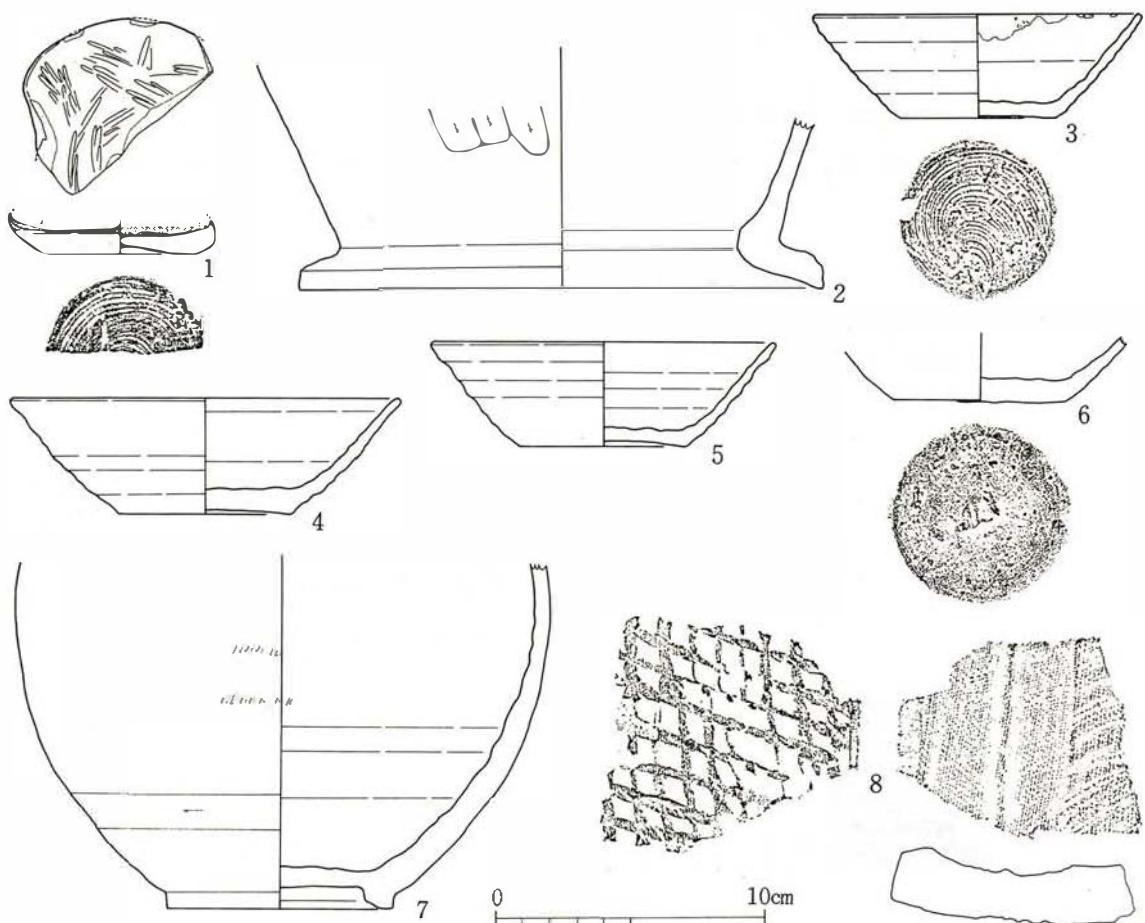
(1) 整地層

整地層は、調査区の全域で検出され、9層に細分化される。

整地層1は、D～F-09・10グリット付近において検出された。暗灰黄色の粘土質シルト層である。層厚は、10～25cmを計る。層中には、マンガン粒・炭化物や焼土を含む。

整地層2は、A～F-06～10グリット付近において検出された。灰黄褐色のシルト層である。層厚は、10～35cmを計る。層中には、炭化物・焼土や黄褐色土を小プロック状に含み、さらに灰白色火山灰を粒状に含んでいる。

整地層aは、A～F-01～07グリット付近において検出された。灰黄褐色の粘土質シルト層



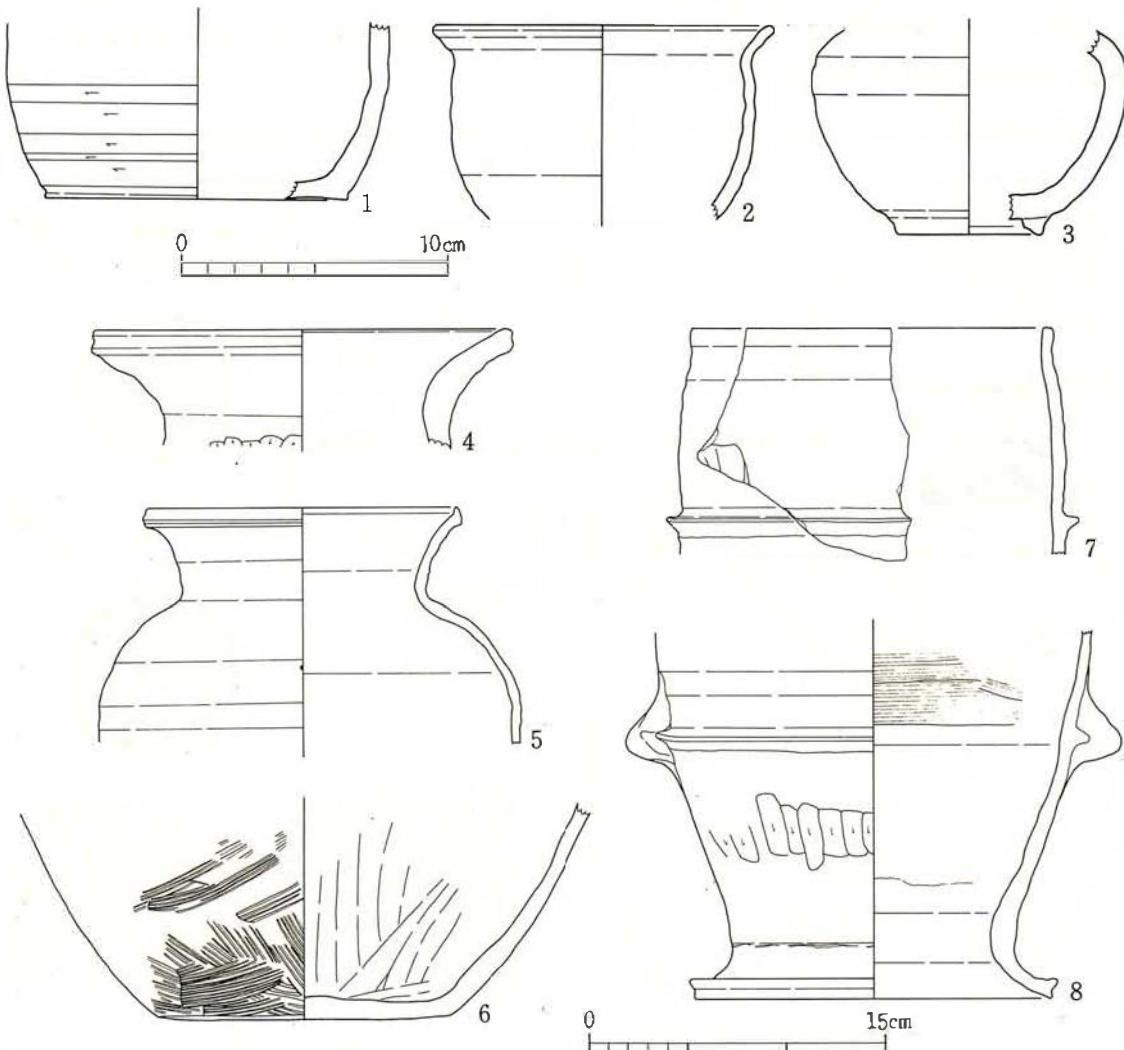
No	種類	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	土師器	耳皿	ロクロナデ、黒色処理、底部回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理 ロクロナデ	(8.8)	(5.6)		
2	ク	飯	ク 手持ヘラケズり	ク		19.4		
3	須恵器	杯	ク 底部回転糸切り	ク	(12.2)	5.9	3.8	無底 油煙痕
4	ク	タ	ク	ク	(10.5)	(6.4)	4.2	
5	ク	タ	ク	ク	(12.8)	6.0	3.8	
6	ク	タ	ク 底部回転ヘラ切り	ク		6.4		
7	ク	瓶	ク 回転ヘラケズり	ク		8.4		
8	平瓦	凹面	布目、糸切り痕	凸面格子叩き				

第3図 整地層2出土遺物

である。層厚は、10~30cmを計る。層中には、マンガン粒・炭化物や焼土を多量に含み、さらに上層には、灰白色火山灰がブロック状に多く含まれる。

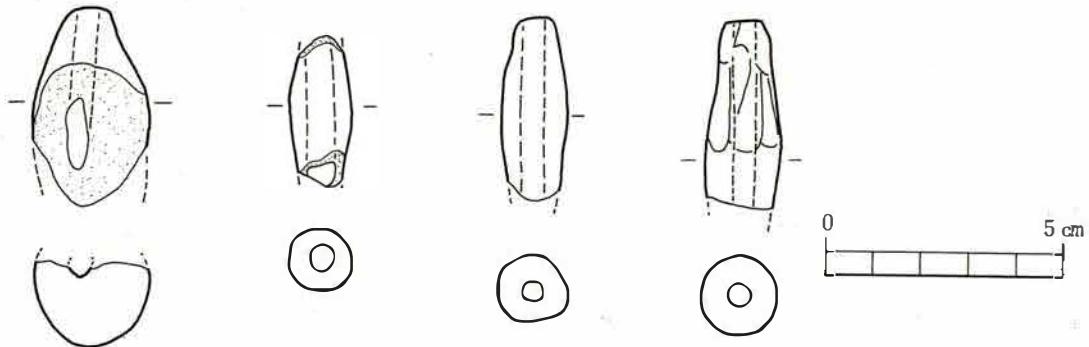
整地層bは、調査区の南西部において検出された。灰黄褐色のシルト層である。層厚は、5~15cmを計る。部分的に黄色土をブロック状に含み、さらに炭化物や焼土を含む。

整地層Aは、A~D-07·08グリット付近において検出された。暗灰黄色の砂質シルト層で



No	種類	器形	外 面 調 整	内 面 調 整	口 径	底 径	器 高	備 考
1	灰釉陶器	瓶	ロクロナデ、体部下半~底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ		(11.3)		
2	土師器	甕	〃	〃		(12.8)		
3	須恵器	壺	〃	〃		(5.5)		
4	〃	甕	〃 手持ヘラケズリ	ケナデ				口~頸部完形
5	〃	壺	ロクロナデ	ロクロナデ	21.4			
6	〃	甕	平行叩き、体部下端~底部刷毛目	指ナデ	16.2		(14.8)	
7	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ 部分的にヘラナデ	(18.2)			把手・銹付
8	〃	甕	〃 手持ヘラケズリ	ヘラナデ、ロクロナデ		(18.1)		〃

第4図 整地層a層出土遺物



第5図 整地層a出土（土鐘）

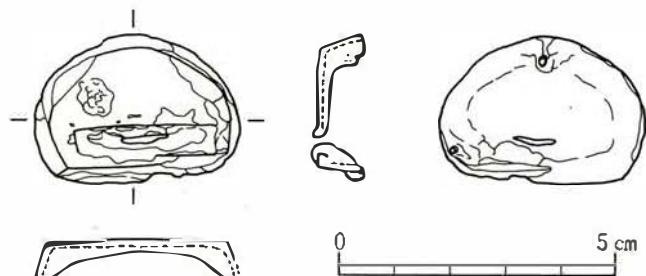
ある。層厚は、10~20cmを計る。層中には、炭化物や焼土を含み、またマンガン粒を多量に含む。

整地層Bは、A~F-07・08グリット付近において検出された。灰黃褐色の粘土質シルト層である。層厚は、5~20cmを計る。層中には、黄色土の粒子を多量に含む。さらに炭化物やマンガン粒を含む。

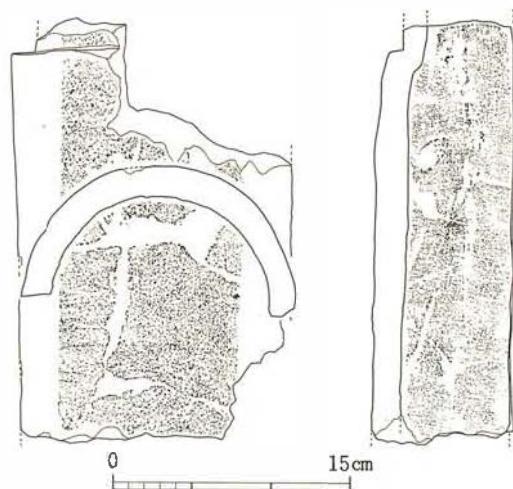
整地層Cは、C~F-06~09グリット付近において検出された。褐灰色の粘土質層である。層厚は、10~20cmを計る。層中には、炭化物や焼土を含む。

整地層Dは、A~D-08~10グリット付近において検出された。黄褐色のシルト質層である。層厚は、15~25cmを計る。層中には、黄色土（地山）をブロック状に多量に含み、さらに炭化物・焼土を含む。

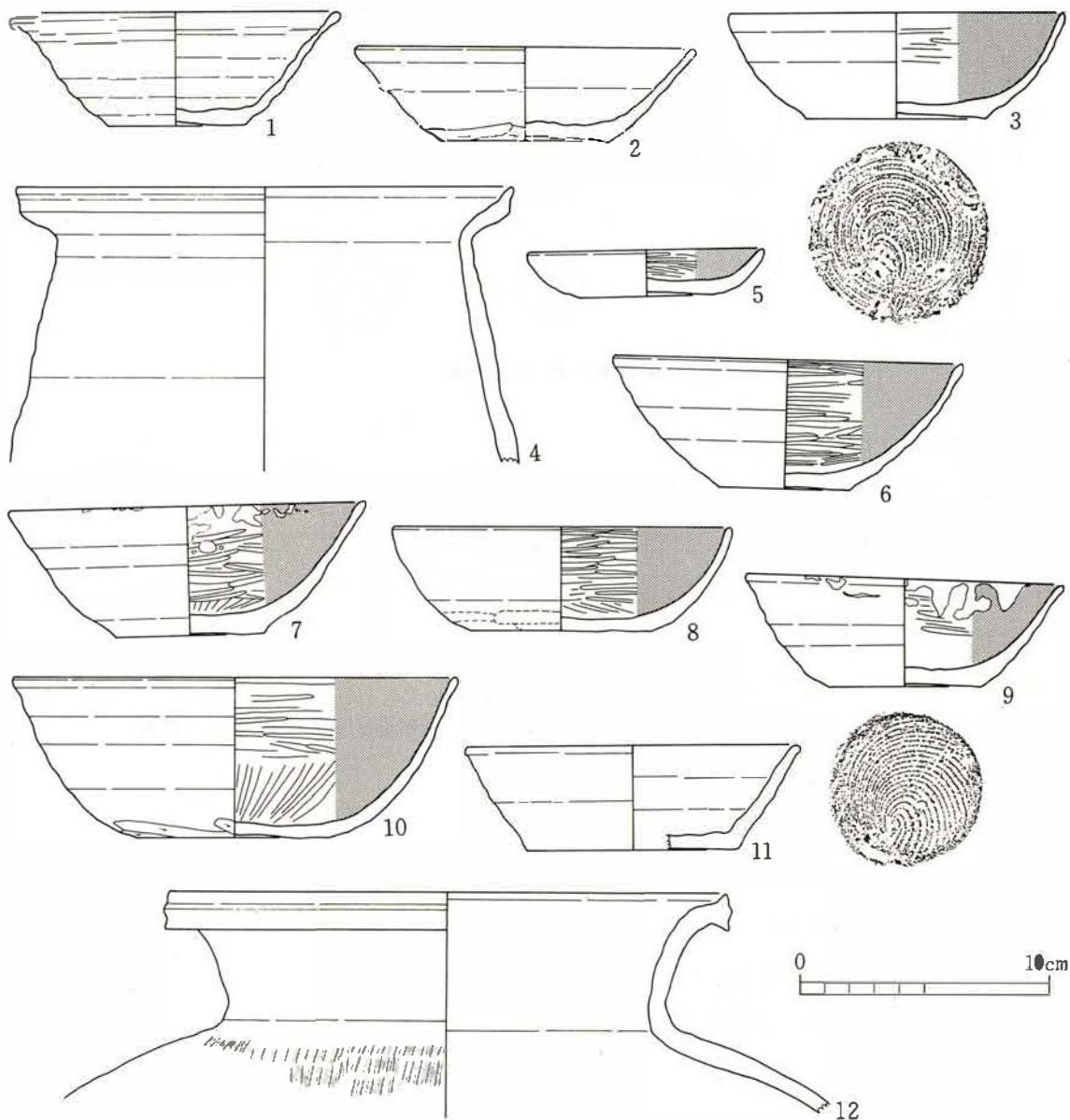
整地層Eは、D~F-08~10グリット付近において検出された。灰黃褐色で上層は砂質シルト、下層は粘土質である。層厚は、10~30cmを計る。層中には、黄色土（地山）をブロック状に含み、さらに炭化物・焼土・酸化鉄を含む。



第6図 整地層b出土金属整品（鎔帯）

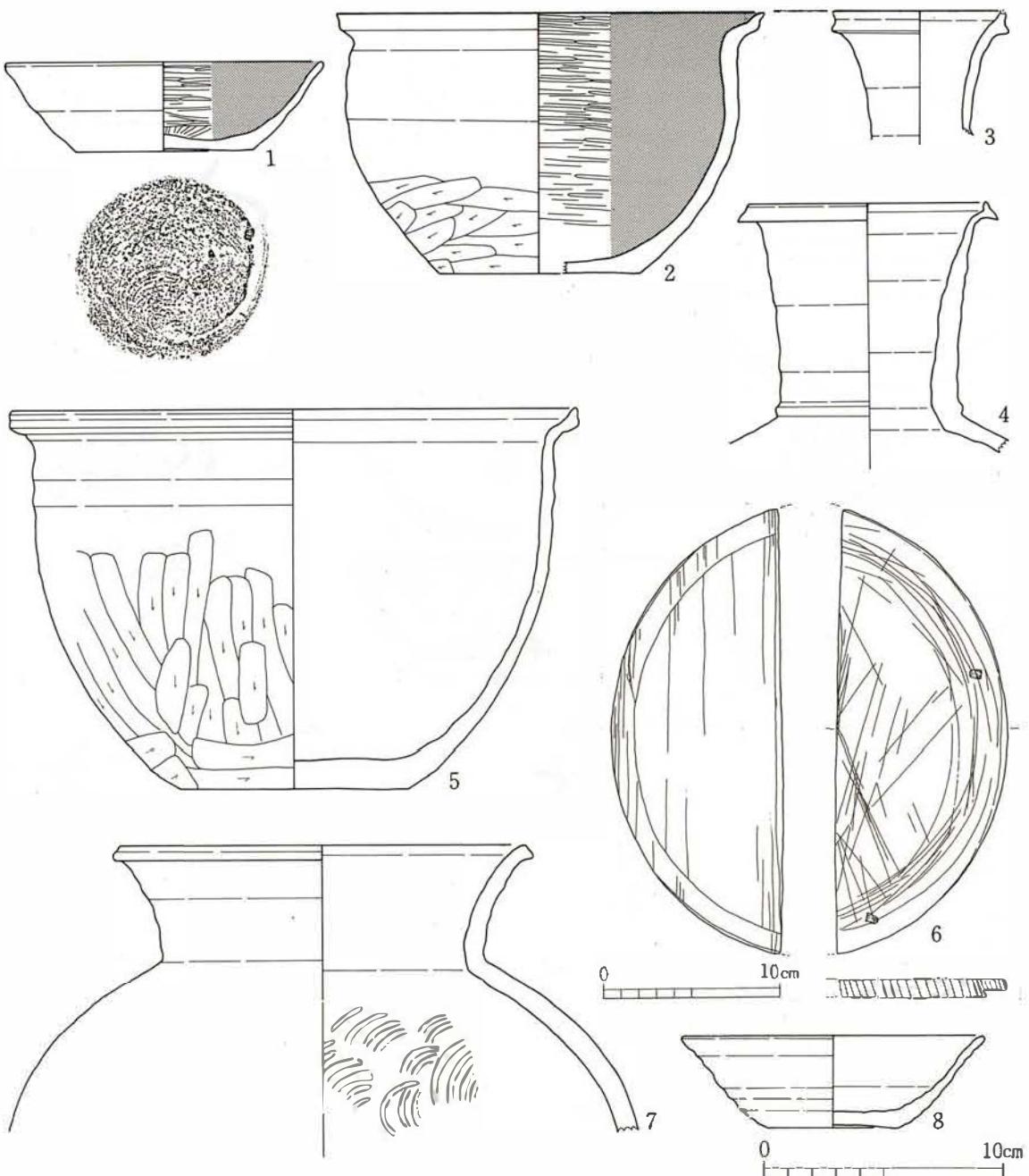


第7図 整地層A出土（丸瓦）



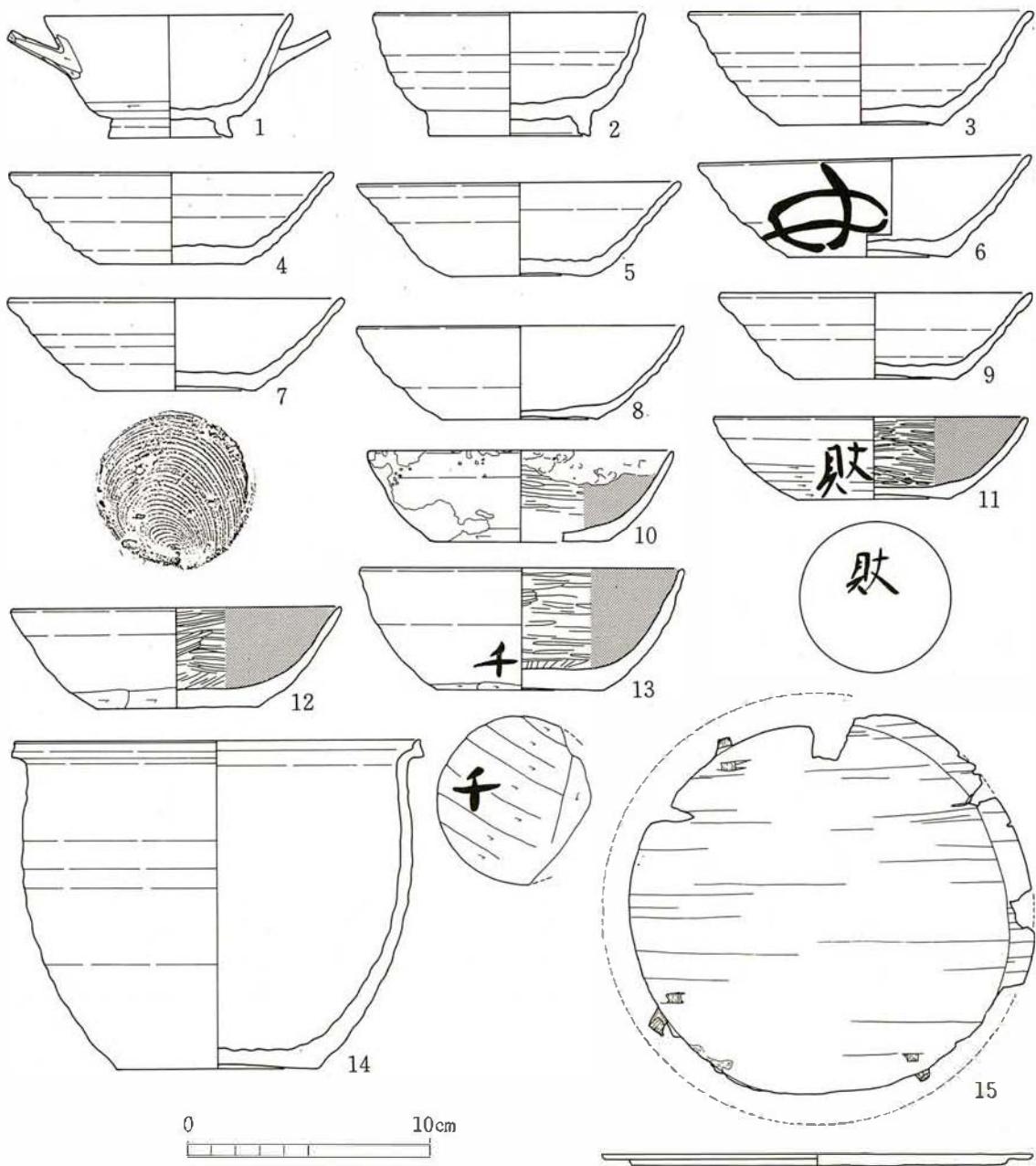
No.	層位	種類	器形	外面調整		内面調整		口徑	底径	器高	備考
				方法	特徴	方法	特徴				
1	セイチ層A	須恵器	杯	ロクロナデ、底部回転糸切り		ロクロナデ		(13.2)	5.5	4.5	
2	セイチ層A			ク	底部下端～底部手持ヘラケズリ	ク		(13.6)	6.6	3.7	
3	ク	土師器	ク	ク	底部回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理		(13.4)	7.2	4.2	
4	ク	甕	ク	ク		ロクロナデ		(19.8)			
5	セイチ層B	ク	小皿	ク	底部回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理		(9.5)	(5.4)	1.8	
6	ク	杯	ク	ク		ク		(14.0)	(5.2)	5.1	
7	ク	ク	ク	ク		ク		(14.3)	6.0	5.1	付着物
8	ク	ク	ク	ク	体部下端～底部手持ヘラケズリ	ク		(13.5)	7.2	4.1	
9	ク	ク	ク	ク	底部回転糸切り	ク		12.7	6.0	4.3	付着物
10	ク	須恵器	ク	ク	底部回転糸切り+底部下端～底部周縁 手持ヘラケズリ	ク		(17.8)	(7.8)	6.3	
11	ク	甕	ク	ク	底部回転ヘラ切り	ク		(13.4)	(8.4)	4.1	
12	ク	甕	ク	ク	平行叩き	ロクロナデ		(22.6)			

第8図 整地層A・B出土遺物



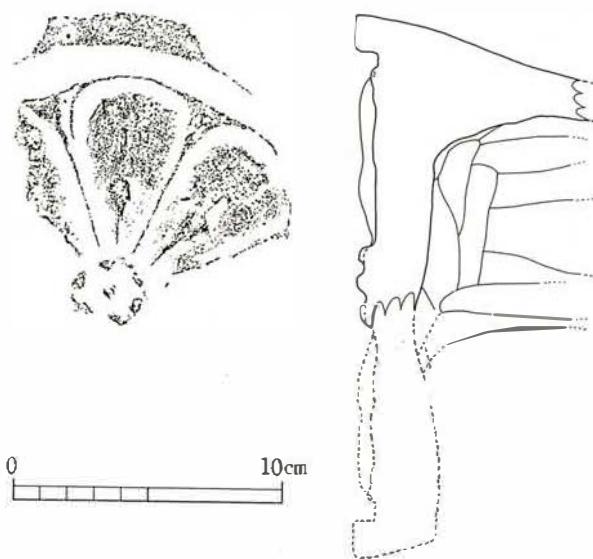
No	層位	種類	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	セイナ層C	土師器	杯	ロクロナデ、底部回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	(13.4)	7.5	3.7	
2	〃	〃	甕	ロクロナデ、体部下半～底部手持ヘラケズリ	〃	(17.8)	(8.4)	10.8	
3	〃	須恵器	長颈瓶	ロクロナデ	ロクロナデ	7.4			
4	〃	〃	ク	ク	ク	(10.8)			
5	〃	〃	甕	ロクロナデ、手持ヘラケズリ、底部ナデ	ロクロナデ、工具状のナデ	(23.8)	9.6	15.7	
6	〃	木製品	齒物壹板	柾目材、径(26.2)cm 厚さ1.0cm 周縁の厚さ0.7cm 外面にキズ多数					
7	セイナ層D	須恵器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ、青海波文當て具痕	17.5			
8	〃	〃	杯	〃 底部回転糸切り	〃	(12.6)	(5.4)	3.8	

第9図 整地層C・D出土遺物

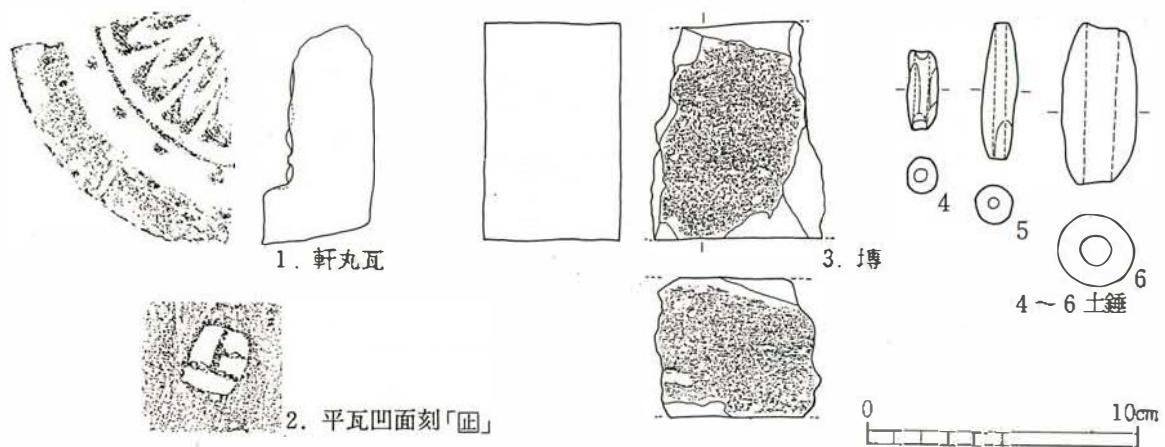


No.	種類	器形	外一面調整	内一面調整	口径	底径	高さ	備考
1	須恵器	双耳杯	ロクロナダ、回転ヘラケズリ、耳部手持ヘラケズリ	ロクロナダ	(10.2)	5.1	5.0	
2	ク	高台付杯	ロクロナダ	ク	(11.2)	6.6	5.0	
3	ク	杯	ク 底部回転糸切り	ク	(14.1)	6.6	4.6	
4	ク	ク	ク	ク	(13.3)	6.0	3.7	
5	ク	ク	ク	ク	(13.3)	5.6	3.8	
6	ク	ク	ク	ク	13.5	6.4	4.0	
7	ク	ク	ク	ク	(13.9)	6.4	3.8	
8	ク	ク	ク 底部回転ヘラ切り	ク	(13.4)	(6.4)	3.8	
9	ク	ク	ク	ク	(12.8)	6.6	3.5	
10	土師器	ロ	ロクロナダ、体部下端～底部回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒漆処理	(12.6)	(7.4)	3.7	外体部墨書き「口」
11	ク	ク	ク 体部下半～底部	ク	12.8	6.2	3.4	内底部に墨付看
12	ク	ク	ク 体部下端～底部手持ヘラケズリ	ク	(13.6)	6.6	4.1	外体底部に墨書き「財」
13	ク	ク	ク	ク	(13.4)	6.9	5.0	外体底部に墨書き「チ」
14	ク	甕	ロクロナダ、底部圓弧糸切り	ロクロナダ	(16.7)	8.3	13.4	
15	木製品	曲物蓋板	直目材 外径(17.6)cm 内径(15.4)cm 厚さ0.5cm 固縫の原さ0.2cm					

第16図 整地層E 出土遺物



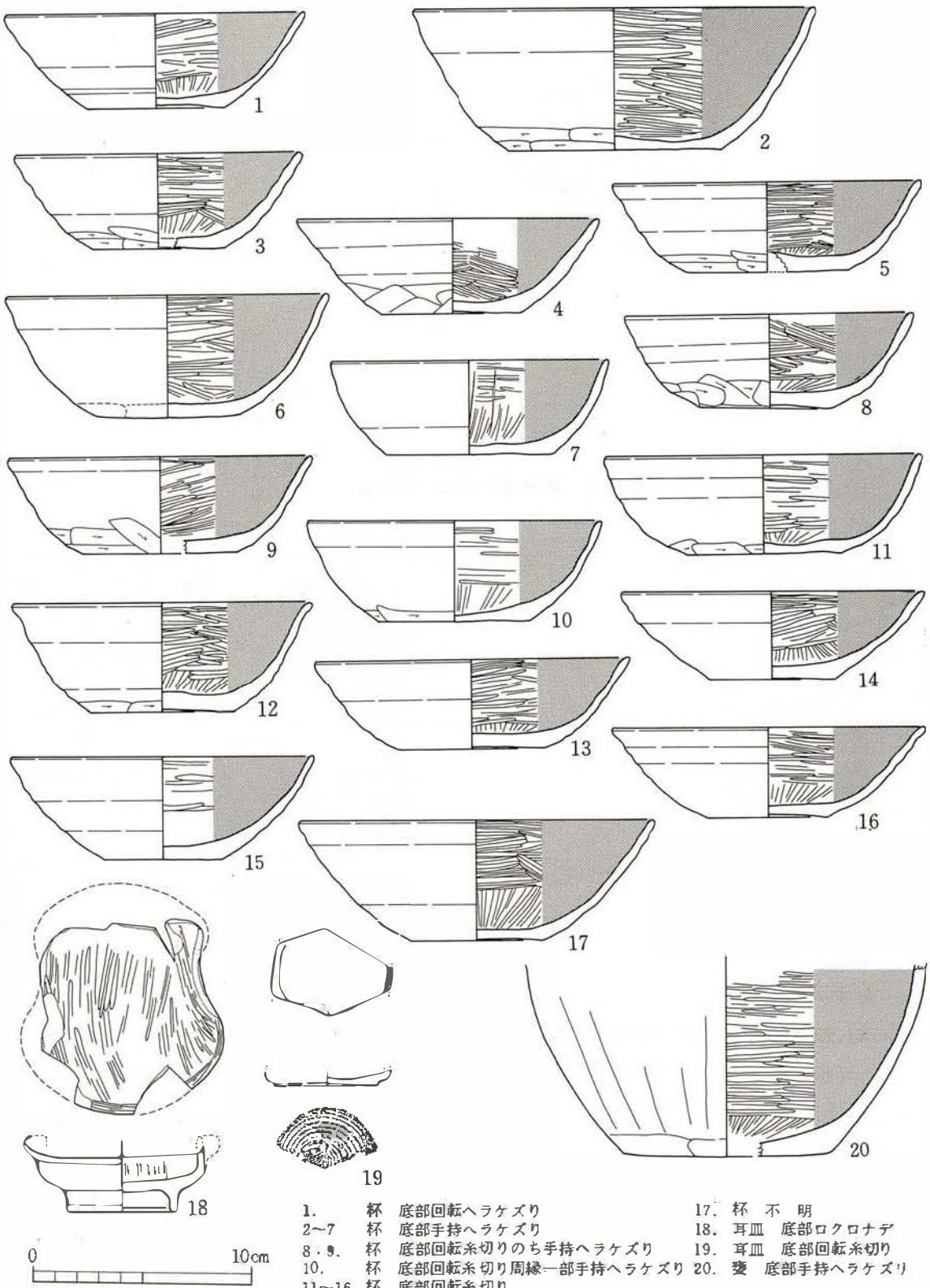
第11図 整地層E 出土 軒丸瓦



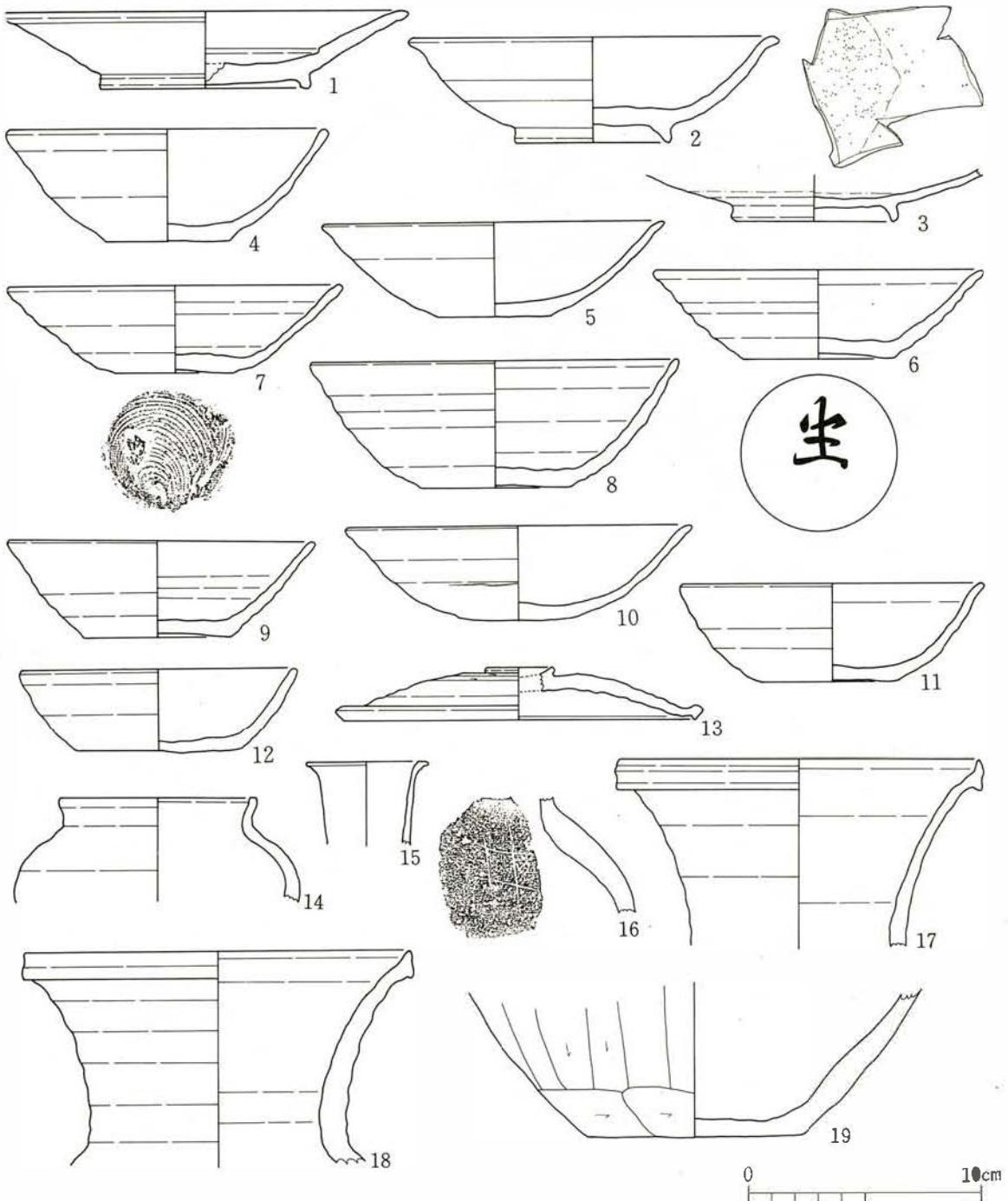
第12図 整地層出土

(2) 掘立柱建物跡

SB 258建物跡　調査区北東部の整地層D 上面で検出した南北2間、東西2間以上の建物跡で、西側柱列はSD 315溝跡と重複関係があるため不明である。重複関係より、SB 259建物跡より新しい。建物の方向は東側柱列でみると北で約4度西に偏している。柱間についてみると、北側柱列で東より2.46m、2.30mを計り、総長については不明である。東側柱列では、柱痕跡のないものもあるが、北より2.38m、2.42mで、総長4.80mを計る。柱穴は、隅丸方形を呈するものと梢円形を呈するものとがあり、規模も40×44cm、32×28cmのものなどがあり様々である。柱痕跡は径約16cmである。掘り方埋土は、灰黄褐色シルトを主体としている。遺物は、土師器杯・甕・小型甕・須恵器杯・甕、丸瓦が出土している。

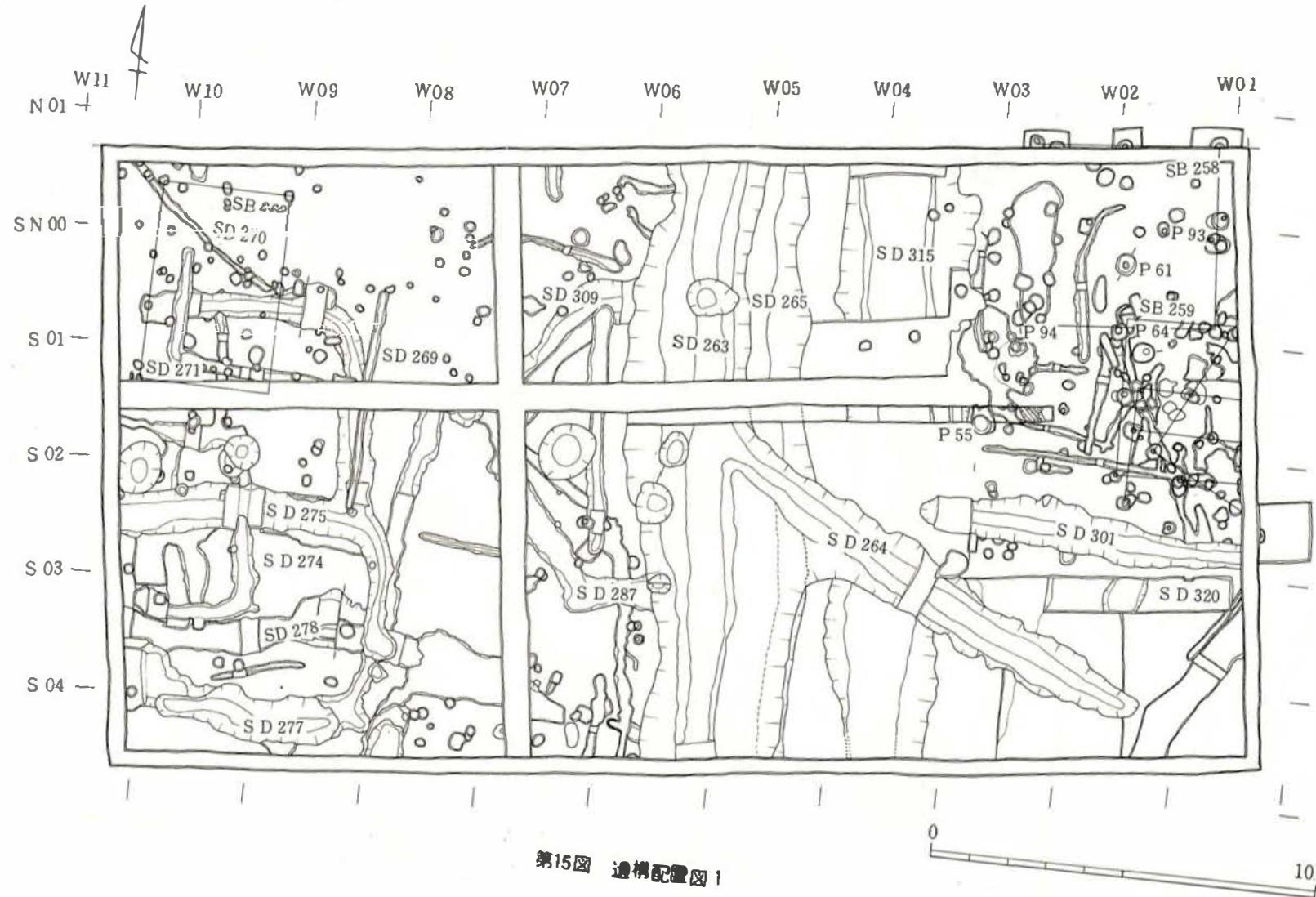


第13図 整地層出土遺物（土師器）



No.	種類	器形	備考	No.	種類	器形	備考
1	綠釉陶器	盤皿		11	須恵器	杯	回転糸切り
2	灰釉陶器	碗		12	・	・	回転糸切り
3	・	皿		13	・	・	
4	赤焼き土器	杯		14	・	短頸壺	
5	・	・		15	・	長頸瓶	
6	須恵器	杯	回転糸切り・外底部墨書き「生」	16	・	蓋	外体部ヘラ焼き「井」
7	・	・	回転糸切り	17	・	・	
8	・	・	・	18	・	・	
9	・	・	・	19	・	・	
10	・	・	・				

第14図 整地層出土

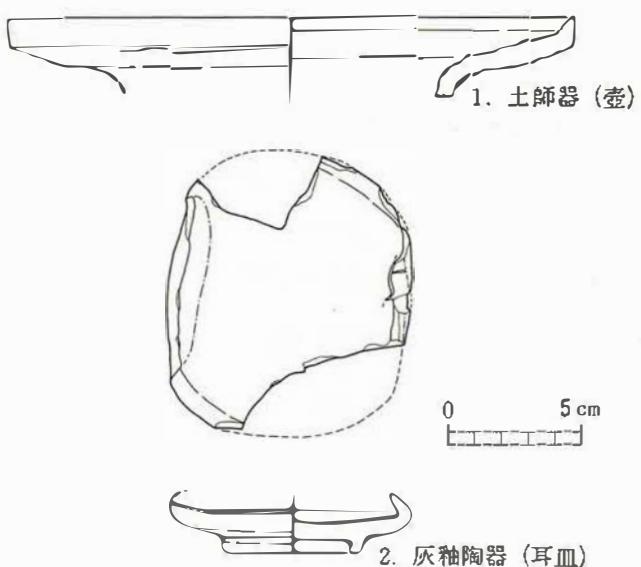


第15図 遺構配置図 1

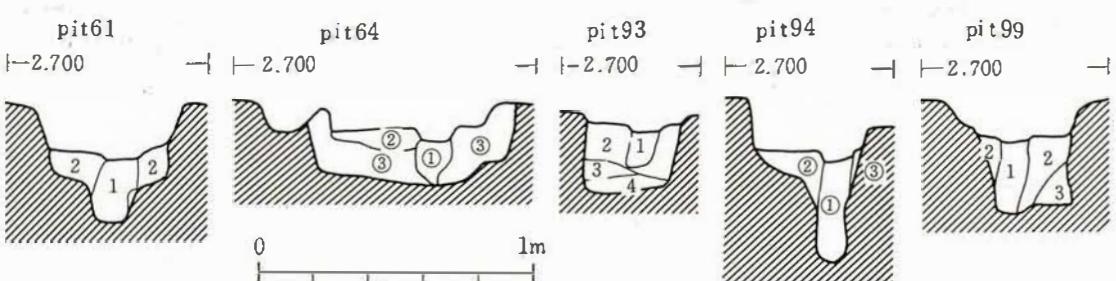
SB 259建物跡 調査区東側の整地層D上面で南北2間、東西2間を検出しているが、おそらく東側の調査区外に延びる建物跡である。SB 258建跡、SD 299溝跡と重複関係があり、これらより古い。建物の方向は西側柱列でみると北で約2度西に偏している。柱間は、柱痕跡のないものもあるが、南側柱列で西より1.6mを計り西側柱列では、北より1.98m、2.10mで、総長4.08mを計る。柱穴は、楕円形を呈するものと不整形を呈するものとがあり、規模は前ものもので41×44cmである。柱痕跡は径約16cmである。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕、平瓦の他に円盤状土製品が出土している。

SB 260建物跡 調査区東側の整地層D上面で検出した南北2間以上、東西1間以上の北側に廂がつく建物跡である。SB

259・261建物跡と重複関係があるが、直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。建物の方向はほぼ発掘基準線と一致する。柱間は柱痕跡が不明なものがあるが、北側柱列でおよそ1.40m、西側柱列で北側からおよそ1.14m、1.92mを計る。柱穴は隅丸方形のものと楕円形を呈するものがあり規模も35×32cm、42×48cmのものなどがあり様々である。柱痕跡は径約15cm



第16図 SB 260建物跡出土



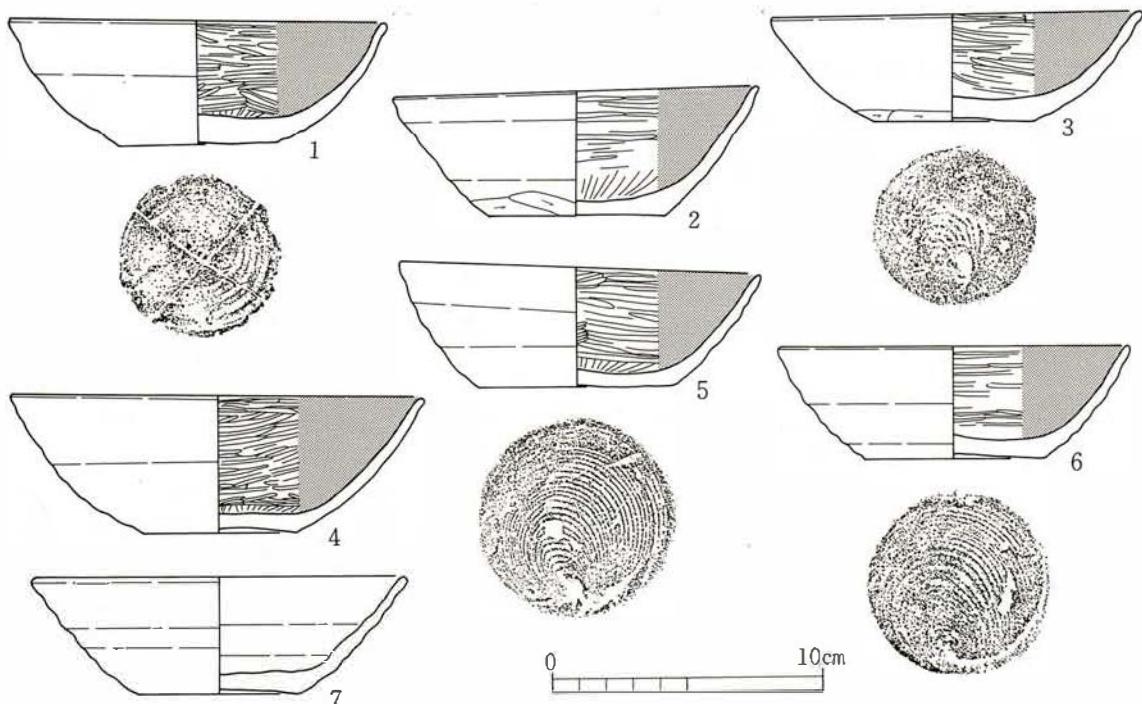
遺構	No	土色	備考	遺構	No	土色	備考	
pit 61	1	10YR 4/2	褐灰色	粘土 地山土粒・炭化物粒を含む	3	1.5Y 4/2	暗灰黄色	粘土ブロックを多量に含む
pit 64	2	10YR 4/2	灰黄褐色	粘土 地山ブロック・炭化物粒を含む	4	2.5Y 4/2	黄褐色	シルト 黄褐色土を含む
	①	10YR 4/2	灰黄褐色	粘土 地山ブロック炭化物を多く含む	①	2.5Y 4/2	褐灰色	粘土 地山粒を少し含み、また、炭化物粒を多く含む
	②	10YR 4/2	灰黄褐色	粘土 地山土粒を含む	●	10YR 4/2	灰黄褐色	粘土 地山土粒を多く含み、炭化物粒を含む
pit 93	③	10YR 4/2	灰黄褐色	粘土 地山ブロックを多量に含む	1	10YR 4/2	灰黄褐色	粘土 地山土粒を含む
	1	10YR 4/2	灰黄褐色	粘土 炭化物粒を含む	2	10YR 4/2	灰黄褐色	粘土地山土粒、炭化物粒を含む
pit 94	2	10YR 4/2	灰黄褐色	粘土 地山土粒を多く含む	3	10YR 4/2	灰黄褐色	粘土
	1	10YR 4/2	灰黄褐色	粘土 地山土粒を多く含む				
	2	10YR 4/2	灰黄褐色	粘土 地山土粒を多く含む				
pit 99	3	10YR 4/2	灰黄褐色	粘土 地山土粒を多く含む				
	4	10YR 4/2	灰黄褐色	粘土 地山土粒を多く含む				
	5	10YR 4/2	灰黄褐色	粘土 地山土粒を多く含む				

第17図 柱穴セクション図

を計る。遺物は、土師器杯・甕・甌、須恵器杯・甕・壺、灰釉陶器耳皿、平瓦・丸瓦が出土している。

SB 261建物跡 調査区東側の整地層D 上面で南北2間、東西2間を検出しているが、おそらく東側の調査区外に延びる建物跡である。SB 259・260 建物跡と重複関係があるが、新旧関係は不明である。建物の方向は西側柱列でみると北で東へ約28度偏している。柱間は柱痕跡が不明なものがあるが、西側柱列で北側よりおよそ1.40m、1.75mを計り、南側柱列では西側よりおよそ1.28m、1.30mを計る。柱穴は、楕円形を呈し、規模は34×42cmである。柱痕跡は径約13cmを計る。掘り方埋土は灰黄褐色を主体としている。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯が出土している。

SB 262建物跡 調査区西側の地山上面で検出した東西2間、南北3間の南北棟の建物跡である。SD 273 溝跡と重複関係があり、これよりも新しい。建物の方向はほぼ発掘基準線と一致する。柱間については柱痕跡が不明であるが、西側柱列で北側よりおよそ1.92m、1.34m、1.88mを計り、総長は5.14mである。北側柱列では西側よりおよそ1.60m、1.64mを計り、総



No	遺 情	種類	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備 考
1	pit55	土師器	杯	ロクロナデ・底部回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	14.1	6.0	4.6	底部ヘラ描き「メ」
2	〃	〃	〃	ロクロナデ・手持ヘラズリ・底部回転糸切り	〃	13.5	6.5	4.6	完形に近い
3	〃	〃	〃	〃	〃	13.7	6.0	3.9	ほぼ完形
4	pit57 掘り方	〃	〃	底部回転糸切り	〃	15.3	5.7	5.1	
5	p pit59	〃	〃	底部下端～底部周辺 手持ちヘラズリ	〃	13.3	7.3	4.9	
6	pit86	〃	〃	〃	〃	(13.0)	6.7	4.1	
7	pit90	須恵器	〃	ロクロナデ	〃	(14.0)	6.0	4.3	

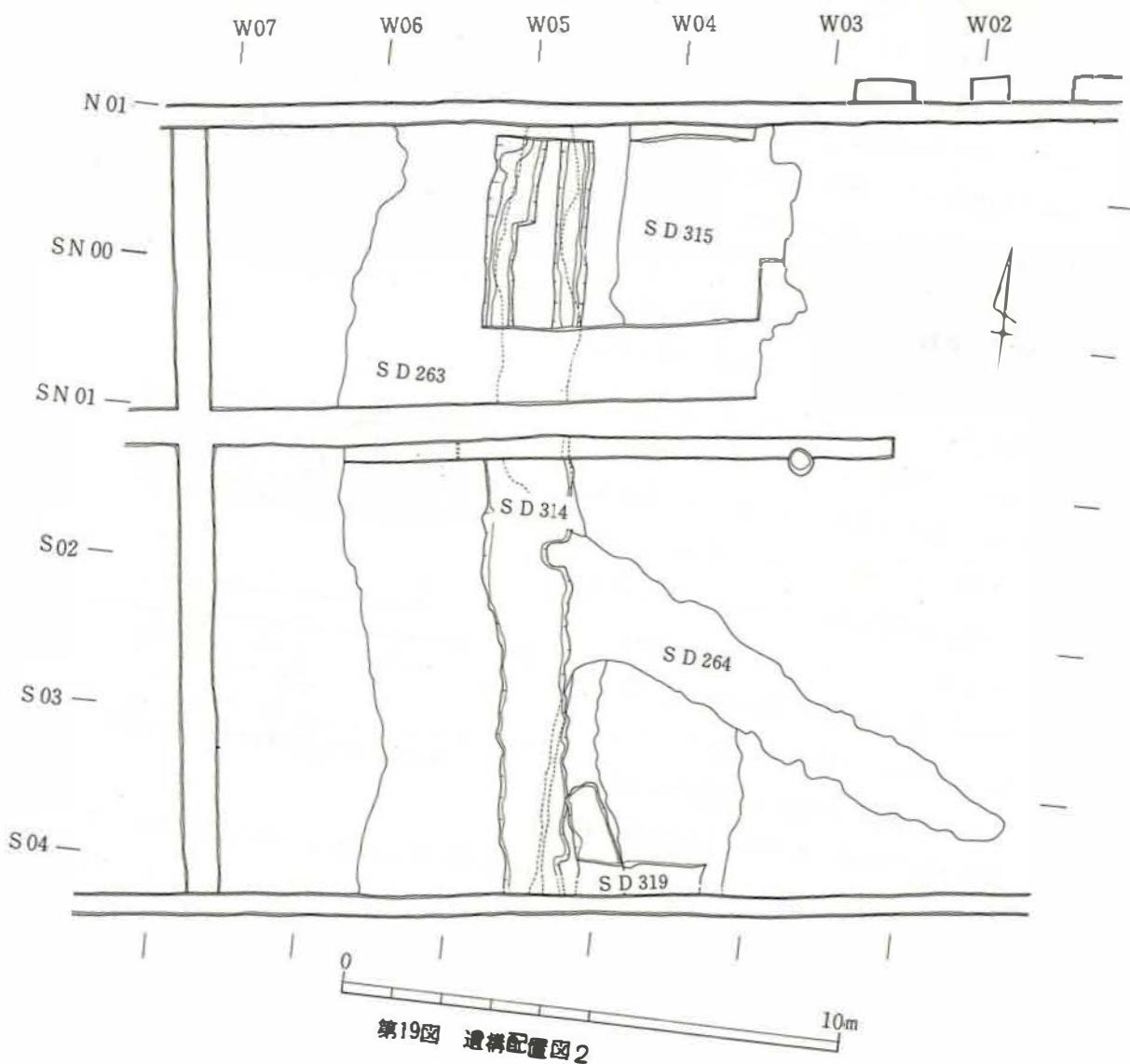
第18図 柱穴出土遺物

長は3.30mである。柱穴は、隅丸方形を呈するものと橢円形を呈するものがあり、規模は、一辺 20×20 cmのものや 30×20 cmのものがあり様々である。遺物は、土師器杯・甕が出土している。

(3) 溝 跡

SD 263溝跡

調査区のほぼ中央で検出した西北に走る溝跡である。検出面は東側で整地層A・B上面、西側で地山上面である。SD 265・287・309溝跡と重複関係があり、これらよりも新しい。確認できる長さは約16mで、上幅270~380cm、深さ約35cmを計る。埋土は灰黄褐色粘土と黒褐色粘土の2層に分けられる。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕・長頸瓶、赤焼き土器杯、平瓦・丸瓦の他に土製カマドが出土している。また、溝跡



第19図 遺構配置図2

の南側より牛の骨が出土している。

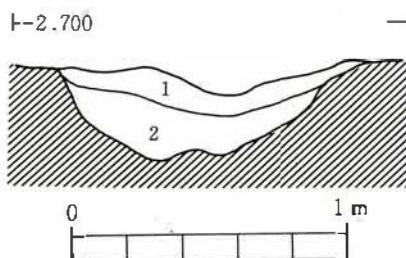
SD 264溝跡 調査区東側で、整地層B上面で検出した斜めに走る溝跡で、西側では、SD 263 溝跡と接続する。SD 265 溝跡と重複関係があり、これよりも新しい。長さは約12.5mで、上幅120~180cm、深さ約35cmを計る。埋土は、褐灰色粘土と黒褐色粘土の2層に分けられる。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕・壺、灰釉陶器、平瓦・丸瓦の他に円盤状土製品や土製カマドが出土している。

SD 265溝跡 SD 263 溝跡の東側、整地層A・B上面で検出した南北に走る溝跡である。SD 263・264溝跡と重複関係があり、これらよりも古い。確認できる長さは約16mで、幅については、SD 263溝跡に壊されているため不明である。深さは約20cmを計る。埋土は、暗灰黄色シルトを基調とし、層中には灰白色火山灰が層状に堆積している。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕・長頸瓶、赤焼き土器杯・高台付杯、灰釉陶器杯、平瓦・丸瓦の他に円盤状土製品や土製カマドが出土している。

SD 273溝跡 調査区西側の第VI層上面・地山上面で検出した東西に走る溝跡で、東側で南へほぼ直角に屈曲し、SD 275 溝跡に接続する。

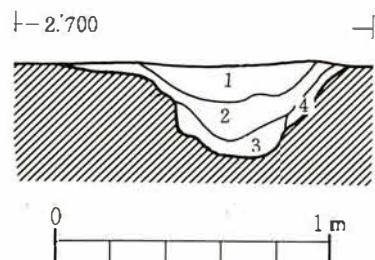
重複関係についてみるとSB 262 建物跡、SD 269・271溝跡より古く、SD 272 溝跡より新しい。長さは東西方向で約5.5m、南北方向では約4.5m、上幅55~120cm、深さ約35cmを計る。埋土は4層に分けられるが、いずれも灰黄褐色を主体としている。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・高台付杯・蓋・甕・壺、平瓦・丸瓦の他に土製カマドが出土している。

SD 275溝跡 調査区南西部の第VI層上面・地山上面で検出した東西に走る溝跡で、東側においてSD 273・279溝跡と接続する。重複関係からSD 269・274 溝跡より古く、SD 276・282・285溝跡より新しい。確認できる長さは約7mで、上幅80~120cm、深さ約25cmを計る。埋土は3層に分けられるが、いずれも灰黄褐色を主体としている。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・壺、丸瓦の他に土製カマドや円盤状土製品が出土している。



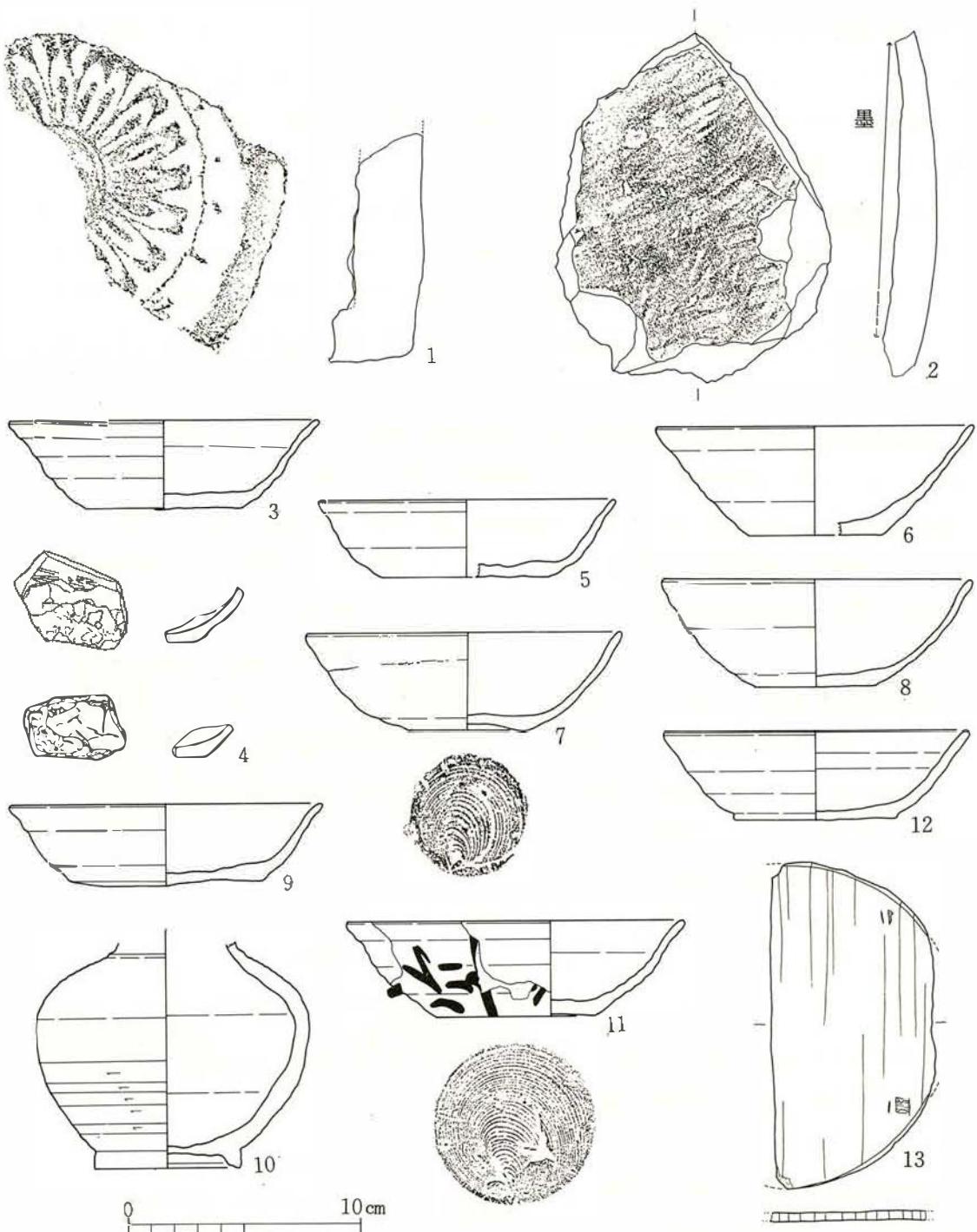
No	土色	備考
1	10YR 4/2 黄褐色	粘土、焼土粒、炭化物粒、酸化鉄、マンガン鉱を含む
2	2.5Y 3/4 黑褐色	粘土、酸化鉄層が産る

第20図 SD 264溝跡セクション図



No	土色	備考
1	10YR 4/2 黄褐色	砂質シルト 燃土粒、炭化物粒、酸化鉄を含む
2	10YR 4/2 黄褐色	粘土、砂質の炭化物を含む
3	4/2 黄褐色	砂質シルト ブロックを含む
4	4/2 黄褐色	3層より細かなシルトブロックを含む

第21図 SD 273溝跡セクション図



No.	遺構	層位	種類	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	SD 263	1層	軒丸瓦器	罐	細弁蓮華文	青海波文・摩耗				
2		2層	須恵器	杯	ケズリ・摩耗					
3		*		杯	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り					
4		3層		杯						
5		*		杯						
6		*		土師器	底部回転糸切り					
7	SD 263	1層	赤焼き土器	罐						
8		2層		罐						
9	SD 267	*	須恵器	長頸瓶						
10		*		杯						
11	SD 271	*		杯						
12	SD 272	1層		木製品						
13		2層		曲物底板	柱目材 径114.1) cm	厚さ 0.4cm				

第22図 SD 263・265・267・271・272溝跡出土遺物

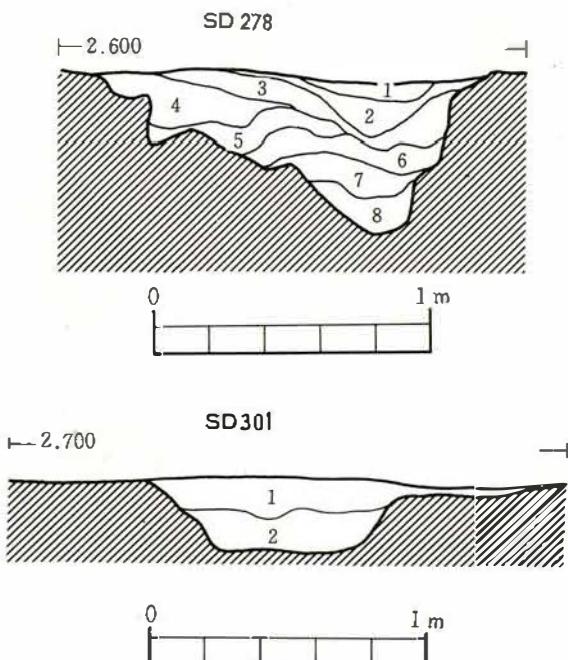
SD 276溝跡 調査区西側の地山上面で検出した南北に走る溝跡である。SD 279 溝跡と重複関係があり、これよりも古い。確認できる長さは約 6m、上幅約 70cm、深さ 15cm を計る。埋土は灰黄褐色の粘土質の单層である。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕・壺、赤焼き土器杯が出土している。

SD 277溝跡 調査区南西部の第 VI 層上面・地山上面で検出した東西に走る溝跡で、東側において SD 279 溝跡と接続する。SD 278 溝跡と重複関係があり、これよりも新しい。確認できる長さは約 6.5m、上幅 100~170cm、最も深いところで約 30cm を計る。埋土は灰黄褐色を主体としている。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・蓋・甕、赤焼き土師器杯、平瓦の他に土製カマドが出土している。

SD 278溝跡 調査区南西部の第 VI 層上面・地山上面で検出した東西に走る溝跡である。重複関係から SD 274・279 溝跡より古く、SD 283 溝跡より新しい。確認できる長さは約 8m で、上幅は広いところで約 160cm、狭いところでは約 55cm、深さは約 55cm を計る。埋土は 8 層に細分されるが、黄褐色・灰黄褐色・黒褐色を主体としている。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器杯、丸瓦の他に土製カマドが出土している。

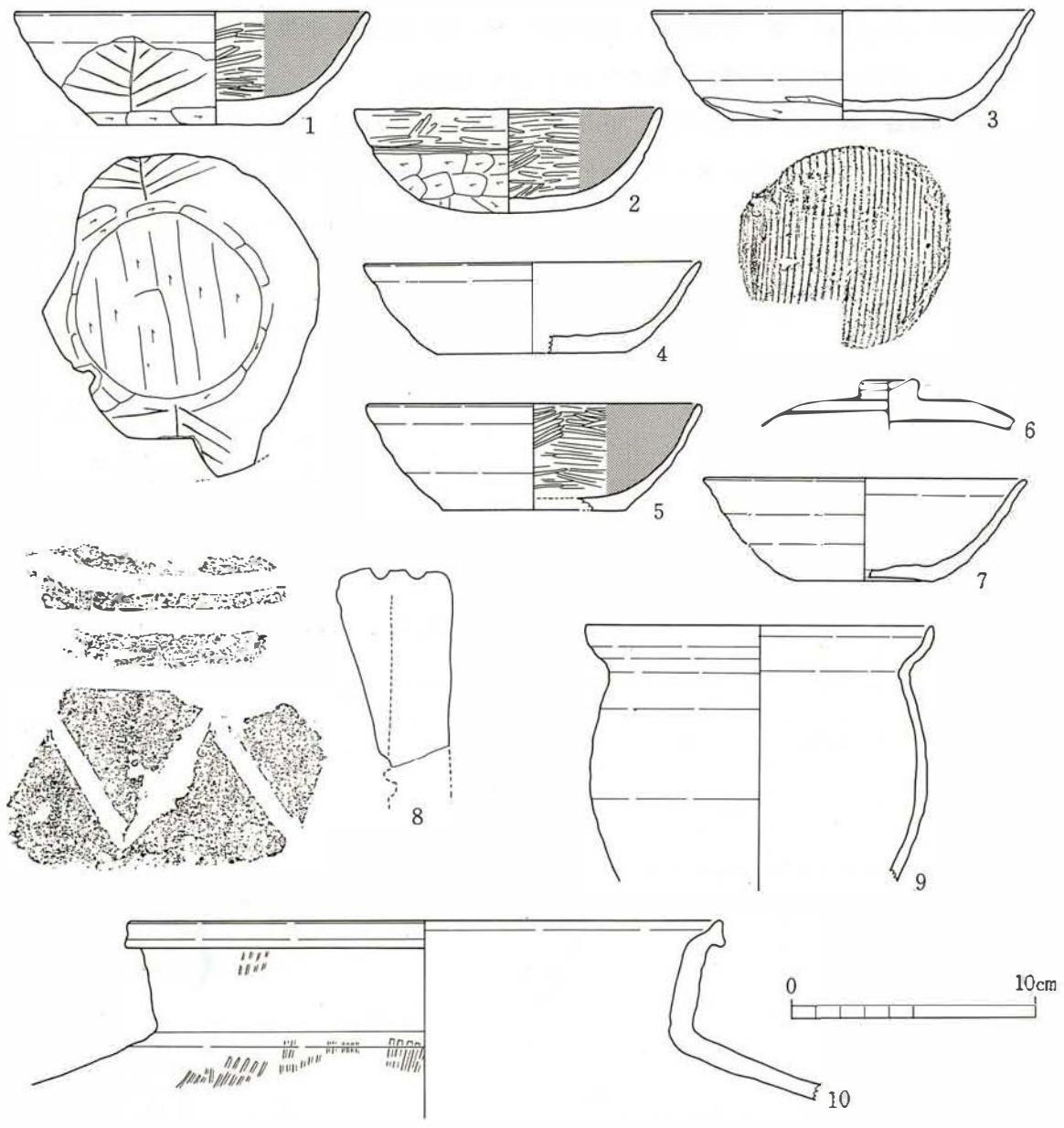
SD 279溝跡 調査区南西部の第 VI 層上面・地山上面で検出した南北に走る溝跡で、北側で SD 275 溝跡と接続し、南側においては幅が狭まり SD 277 溝跡と接続する。SD 276・278 溝跡と重複関係があり、これらよりも新しい。長さは約 6m を計り、上幅は広いところで約 95cm、狭いところで約 45cm で、深さは約 20cm であるが、幅の狭いところでは約 5cm と浅くなる。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕、平瓦が出土している。

SD 301溝跡 調査区東側の整地層 D 上面で検出した東西に走る溝跡である。確認できる長さは約 8.5m で、上幅 65~130cm、深さ約 30cm を計る。埋土は、整地層 2 と非常に類似する黒褐色のシルト質と黒褐色の粘土質が堆積している。遺物は



遺構名	層位	土色	備考
SD 278	1	10YR 5/6 に近い黄褐色	粘土 黄褐色土を含み、焼土粒・マンガン粒を含む
	2	10Y R 5/6 黄褐色	粘土
	3	10Y R 5/6 黄褐色	粘土 黄褐色土をブロック状に含み、マンガン粒を含む
	4	10Y R 5/6 黒褐色	粘土 黄色土を含む
	5	2.5 Y 5/6 に近い黄色	粘土質シルト 嘔吐黄色土をブロック状に少しある
	6	2.5 Y 5/6 黑褐色	粘土 黄色土をブロック状に含む
	7	2.5G Y 5/6 オリーブ灰色	シルト 黒褐色粘土をブロック状に含む
	8	2.5G Y 5/6 オリーブ灰色	粘土 オリーブ褐色粘土をブロック状に含む
SD 301	1	10Y R 5/6 黒褐色	シルト 炭化物・焼土粒・マンガン粒を含む
	2	10Y R 5/6 黑褐色	粘土 黄色土を含み、炭化物・焼土粒・マンガンを含む

第23図 SD 278・301溝跡セクション図

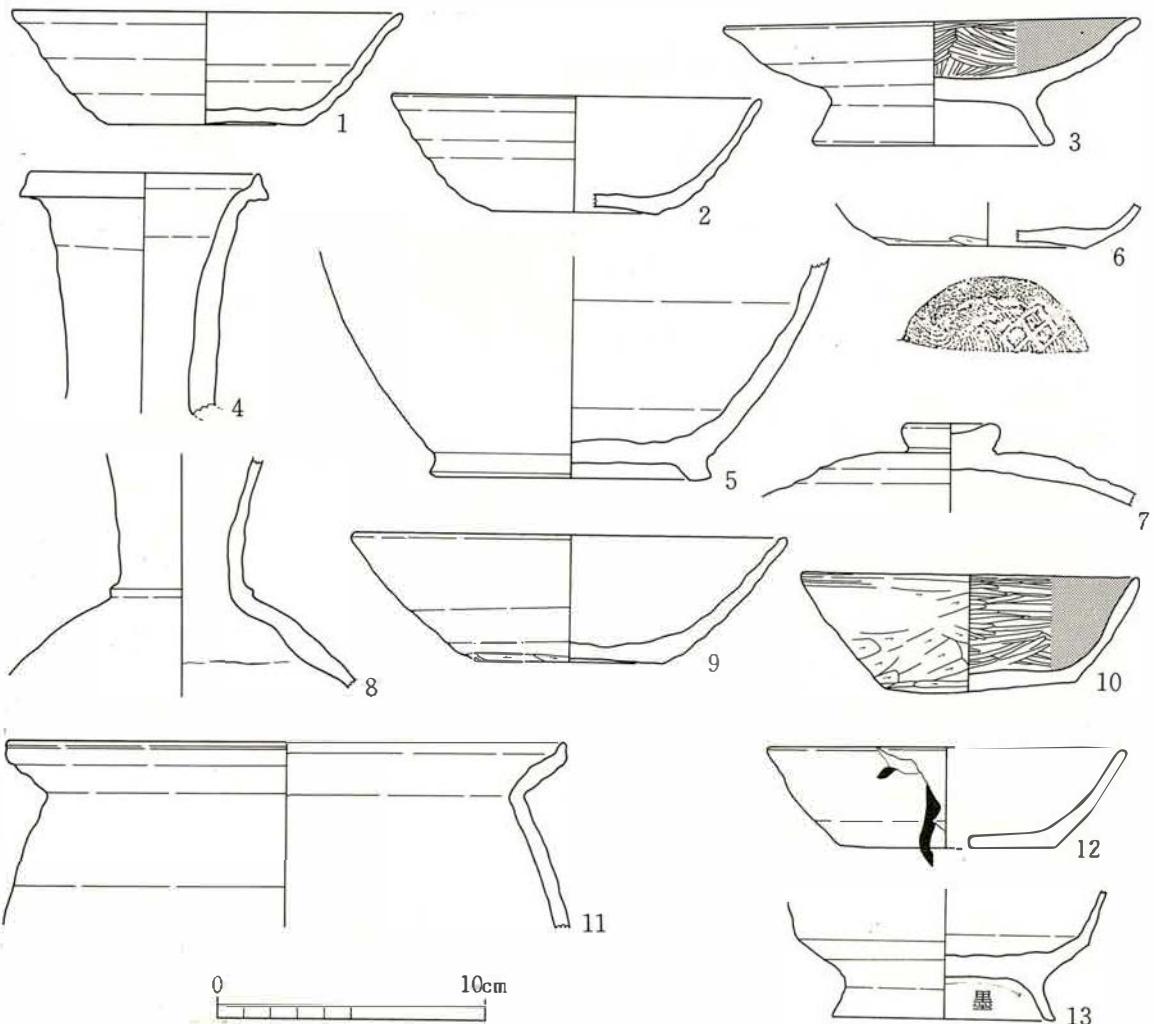


No.	遺構	層位	種類	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	高さ	備考
1	SD 309	2層	土師器	杯	ロクロナデ・体部下端～底盤手舟へラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(14.6)	4.6	7.6	対称位置にヘラ描き文様
2	タ	タ	ク	ク	ヨコナデ・ヘラミガキ・手舟へラケズリ	。	12.6	4.2		
3	タ	タ	須恵器	ク	ヨコナデ・底部青色止み切り 体部下端	ロクロナデ	(15.6)	8.9	4.4	
4	タ	タ	ク	ク	。 底部回転へラ切リ	。	(13.9)	(7.8)	3.7	
5	SD 314	1層	土師器	ク	。 底部回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	(13.8)	(7.5)	4.3	
6	+	タ	須恵器	蓋	。 回転へラケズリ	ロクロナデ				
7	+	タ	ク	ク	。 底部回転へラ切リ	。	(13.2)	5.5	4.2	
8	+	タ	軒平瓦	ク	瓦当面二重弦文 頂面點傳文					
9	+	タ	土師器	ク	ロクロナデ	ロクロナデ				
10	+	タ	須恵器	ク	ロクロナデ・平行印記	ロクロナデ、青漆緑文当 舟底のちナデ	14.2 (24.5)			

第24図 SD 309・314溝跡出土遺物

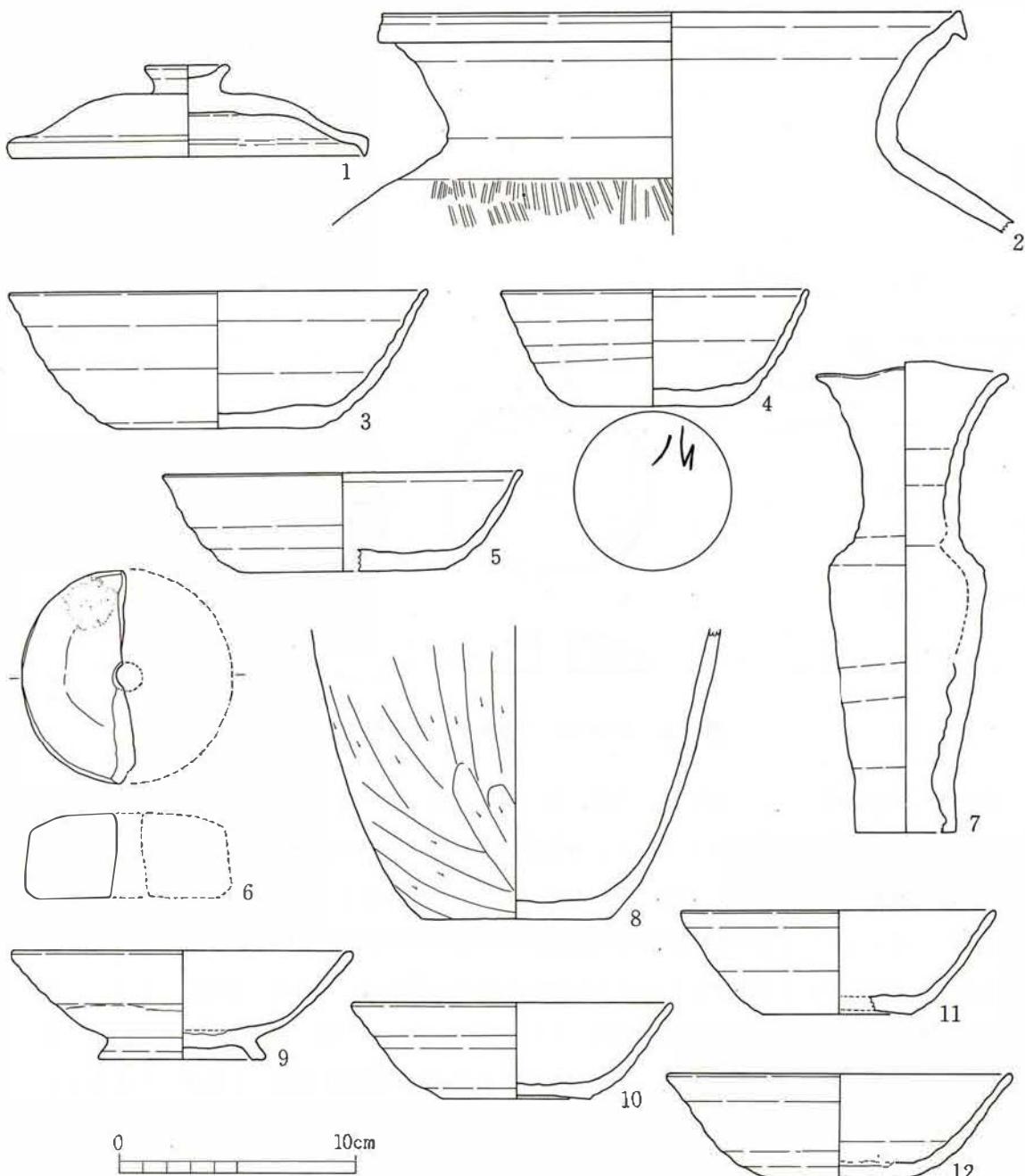
土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕・壺・長頸瓶、赤焼き土器杯・高台付杯、平瓦・丸瓦の他に木製品の盤や土製カマドが出土している。

SD 314溝跡 調査区のほぼ中央部、地山上面で検出した南北に走る溝跡である。確認できる長さは約9.5m、上幅約160cm、深さ約20cmを計る。埋土は、単層で黄灰色の粘土質が堆積する。



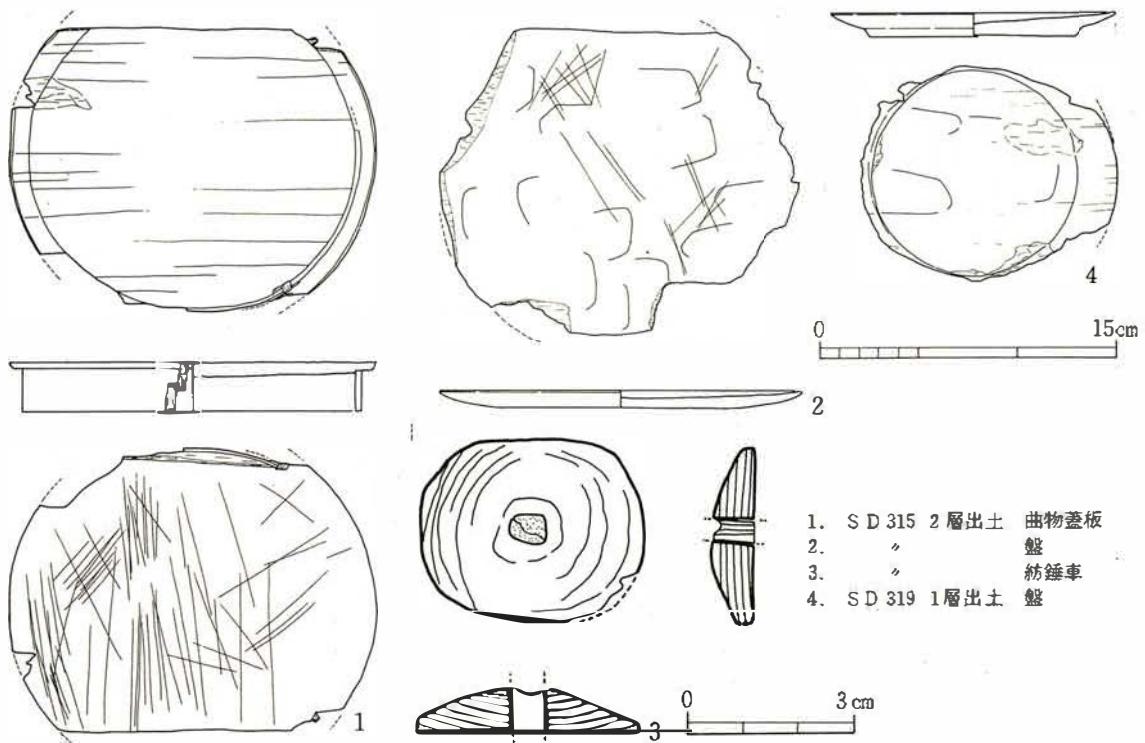
No	遺構	層位	種類	器形	外面調査	内面調整	口径	底径	高さ	備考
1	SD 315	1層	須恵器	杯	ロクロナデ 懸部回転へラ切り 底部回転糸切り	ロクロナデ	(14.6)	7.3	4.2	
2	ク	ク	ク	ク	ク	+	(13.8)	6.2	4.3	
3	ク	ク	土師器	高台付皿	+	ヘラミガキ・黒色処理	15.4	9.0	4.6	充脹
4	ク	ク	須恵器	長頸瓶	ク	ロクロナデ	(9.3)			
5	ク	ク	ク	ク	ク	+				
6	ク	2層	ク	杯	ク 底面回転壳切り 脚下端一底面周辺手持へラケズリ	+				
7	ク	ク	ク	蓋	ク	+				
8	ク	ク	ク	長頸瓶	ク	+				
9	ク	ク	ク	杯	ク (底身部手持へラケズリ) 手持回転へラケズリ	+	16.2	7.0	4.7	
10	ク	ク	土師器	壺	ヨコナデ 手持へラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	12.5	(7.0)	4.3	
11	ク	ク	ク	甕	ロクロナデ	ロクロナデ				
12	ク	3層	須恵器	杯	ロクロナデ 懸部回転へラ切り	+	(13.3)	(8.0)	3.7	外体部墨書き「口」外底部墨痕
13	SD 320	1層	ク	壺	ロクロナデ 回転へラケズリ	+			8.2	外底部墨書き

第25図 SD 315・320溝跡出土遺物



No	遺構	層位	種類	器形	外面調査	内面調査	口径	底径	器高	備考
1	SD 277	2層	須恵石	壺	ロクロナデ	ロクナナデ	14.8		3.8	
2	*	*	*	壺	平行叩き	青海波当異痕	(24.5)			
3	*	*	*	杯	底部回転ヘラ切りのちナデ	*	(17.5)	8.8	5.7	
4	SD 278	*	*	*	底部回転ヘラ切り	*	12.8	6.6	4.8	外底部墨書き「□」
5	SD 279	*	*	*	タ	*	(15.8)	(8.7)	4.1	
6	*	*	石製品	輪軸車	径 (8.8) cm 厚さ 3.5cm					
7	SD 283	1層	須恵器	壺底	ロクロナデ 底部回転糸切り	ロクロナデ	8.0	(4.2)	19.5	口縁歪む
8	SD 293	*	土師器	壺	手持ヘラケズリ 底部ナデ	ナデ		7.9		
9	SD 301	*	赤燒き土器	高台付杯	ロクロナデ 底部回転糸切り	ロクロナデ	14.3	7.1	4.5	
10	*	*	須恵器	杯	タ タ	*	13.4	6.2	4.0	
11	*	*	*	*	タ	*	(13.2)	(6.2)	4.3	
12	*	2層	*	*	タ	*	(14.4)	5.7	4.4	

第26図 溝跡出土遺物



第27図 SD 315・319溝跡出土木製品

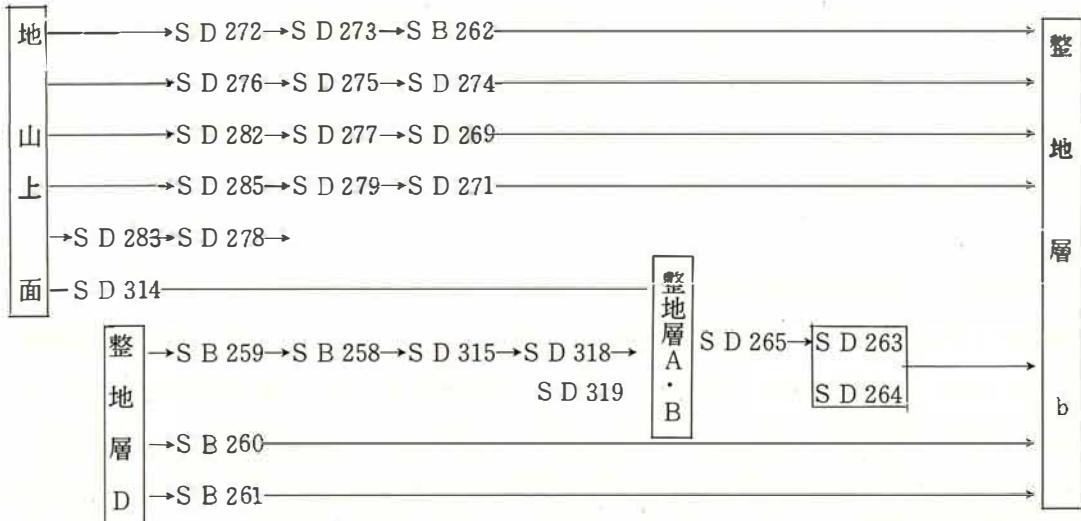
遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・高台付杯・蓋・甕・長頸瓶、軒平瓦・平瓦・丸瓦、円盤状土製品、土製カマドがあり、木製品では下駄や曲物の底板が出土している。

SD 315溝跡 SD 314溝跡の東側、整地層D上面で検出した南北に走る溝跡である。重複関係についてみると、S B 258建物跡やSD 318溝跡より新しく、SD 319溝跡よりも古い。確認できる長さは約16mで、上幅約2.20m、深さ約60cmを計る。埋土は、黒褐色・暗灰色・灰オリーブ色の3層に分かれる。遺物は、土師器杯・高台付杯・高台付皿・甕、須恵器杯・高台付杯・双耳杯・蓋・甕・長頸瓶、縁釉陶器、平瓦・丸瓦、転用硯、円盤状土製品、土製カマドがあり、木製品では盤・曲物・杭などが出土している。

IV まとめ

今回の調査では、掘立柱建物跡5棟、溝跡57条、土塙1基、整地層、水田跡の他に多数の小柱穴が検出された。ここでは主な遺構についてのみ記述することにする。

発見された遺構は、検出面の相違と重複関係からまとめると次のようになる。



以上のように、各遺構は整地層を介在して重複している。ここでは、各遺構群の年代について検討する。

はじめに、調査区全域をほぼ覆っている整地層 a・b の年代について検討し、これより下層で検出した遺構の下限年代を与えておきたい。整地層 a・b より出土した遺物は、土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器がある。土師器杯はロクロ使用のものであり、表杉ノ入式の範疇に属するもので、ロクロからの切り離し技法が回転糸切り無調整のものが大部分で、他に底部全面を手持ヘラケズリを施しているものがみられる。須恵器杯は、回転糸切り無調整のものと回転ヘラ切りの後ナデ調整を施しているものが大部分を占めている。赤焼き土器は、多賀城跡出土土器のうちF群土器の須恵系土器に対比されるもので、F群土器は10世紀中頃の年代が与えられている（註2・3）。または、10世紀前半に降灰したと考えられている灰白色火山灰が、層中にブロック状に含まれている。したがって、整地層 a・b の年代は、おおむね10世紀中頃と考えておきたい。

整地層A・B 上面で検出した遺構群は、出土した遺物から検討してみると土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器が出土しており、土師器杯は、ロクロからの切り離し技法が回転糸切り無調整のものが大部分であり、須恵器杯についても回転糸切り無調整のものが主流を占めている。また、S D 265溝跡の層中に灰白色灰山灰が自然堆積していることより、整地層 A・B 上面で検出した遺構群の年代は10世紀前半と考えられる。

整地層D 上面で検出した遺構群から出土した遺物から検討してみると、土師器、須恵器が出土しており、土師器杯はロクロ使用のもので表杉ノ入式の範疇に入るものである。須恵器杯はロクロからの切り離し技法が回転糸切り無調整のものと回転ヘラ切り無調整のものが大部分である。また、確実に奈良時代にまで遡る遺物が出土していないことより、おおむね9世紀と考えておきたい。

地山上面で検出した遺構群から出土した遺物をみると、土師器、須恵器、赤焼き土器が出土しているが、赤焼き土器は、整地層a・bと類似する埋土から出土しており、整地事業を行った際に混入したものと思われる。土師器、須恵器については、整地層D上面で検出した遺構から出土する遺物と同じ傾向を示していることより、おおむね9世紀から10世紀初頭と考えておきたい。

本調査区は、第5次調査区の北側に隣接しており、第5次調査で発見された整地層a・bは本調査区まで延びており、本調査の整地層a・bに対応する。また、SD03・04溝跡も今回検出したSD263・265溝跡と同一溝跡である。さらに基本層位をみると、第5次調査(註4)で出された第VIa層・第VIb層は、第V層の上部と下部に対応し、第VII層は第VI層に対応する。

今回の調査では、水田として利用していた地域に整地事業を行い居住空間を広げて生活の場として利用したことが明らかになった。

(註)

- 註1 多賀城市教育委員会「市川橋遺跡—昭和59年度発掘調査報告書—」多賀城市文化財調査報告書(1985)
- 註2 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』宮城県多賀城跡調査研究所(1980)
- 註3 宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡・政序跡本文編」(1982)
- 註4 註1に同じ

(引用・参考文献)

- 1 多賀城市教育委員会「高崎・市川橋遺跡調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第3集(1982)
- 2 タ 「市川橋遺跡調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第4集(1983)
- 3 タ 「市川橋遺跡調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第5集(1984)
- 4 タ 「市川橋遺跡—昭和61年度発掘調査報告書—」多賀城市文化財調査報告書第13集(1987)
- 5 宮城県多賀城跡調査研究所「第22次発掘調査」多賀城跡調査研究所年報1973(1974)
- 6 タ 「第37次発掘調査」多賀城跡調査研究所年報1980(1981)
- 7 宮城県教育委員会「水入遺跡発掘調査報告書」宮城県文化財調査報告書第84集(1982)
- 8 田中則和他「山口遺跡Ⅱ」仙台市文化財調査報告書第61集(1984)
- 9 吉岡恭平他「高速鉄道関係遺跡調査概報V」仙台市文化財調査報告書第89集(1986)
- 10 八賀 晋「古代における水田跡開発—その土壤の環境」『日本史研究96』(1968)

V プラント・オパール分析調査報告

古環境研究所

1. 試 料

水田耕作土と見られていた土層は、C-10地点のV_a層とV_b層（註）、およびF-02地点のVI層である。分析試料は、これらの層について容量50cm³の採土管を用いて採取され、当研究所に送付されたものである。

2. 分析結果

プラント・オパール分析の結果を表1および図2に示す。なお、稻作跡の検証および探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した。

3. 考 察

水田跡（稻作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稻作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて稻作の可能性について検討を行った。

平安時代の水田耕作土と見られていた、C-10地点のV_a層とV_b層、およびF-02地点のVI層について分析を行なった結果、全試料からイネのプラント・オパールが検出された。

このうち、C-10地点のV_a層では、密度が8,300個/gとかなり高い値である。したがって、同層で稻作が行われていた可能性は高いと考えられる。C-10地点のV_b層およびF-02地点のVI層では、密度がそれぞれ2,400個/gおよび3,200個/gとやや低い値である。したがって、これらの層で稻作が行われていた可能性は考えられるものの、上層や他所からの混入の危険性も否定できない。

（註）V_a層とV_b層は基本層位の第V層にあたり、V_b層は、第V層の下部にあたる。

表1 プラント・オパール分析結果

多賀城市 市川橋遺跡

F-02地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(叢総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
7	40	20	0.80	3,200	5.15	4,900	10,700	0	0

C-10地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(叢総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
6a	45	15	0.78	8,300	9.89	5,000	28,300	0	0
6b	60	12	0.87	2,400	2.47	1,600	13,000	0	0

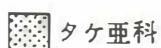
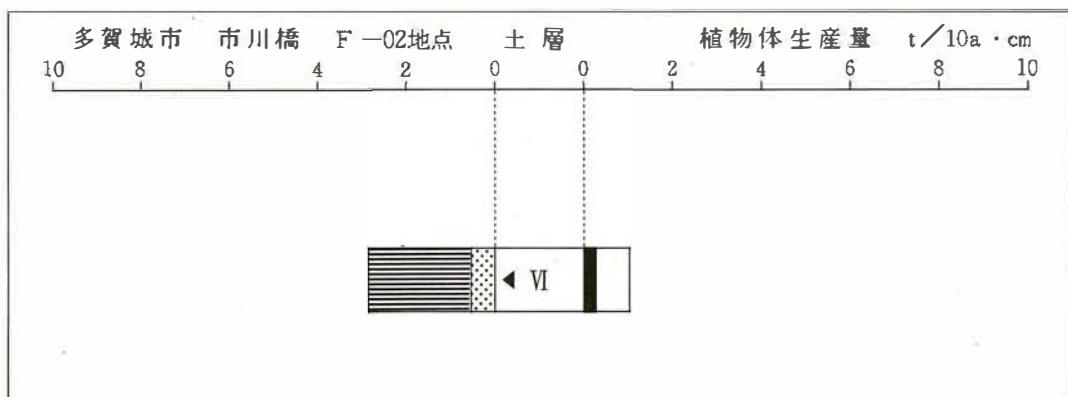
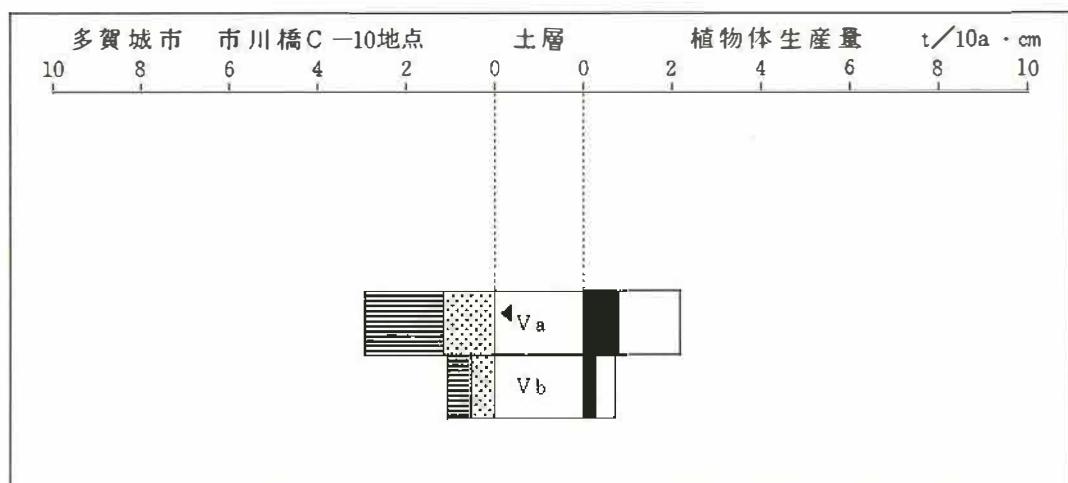
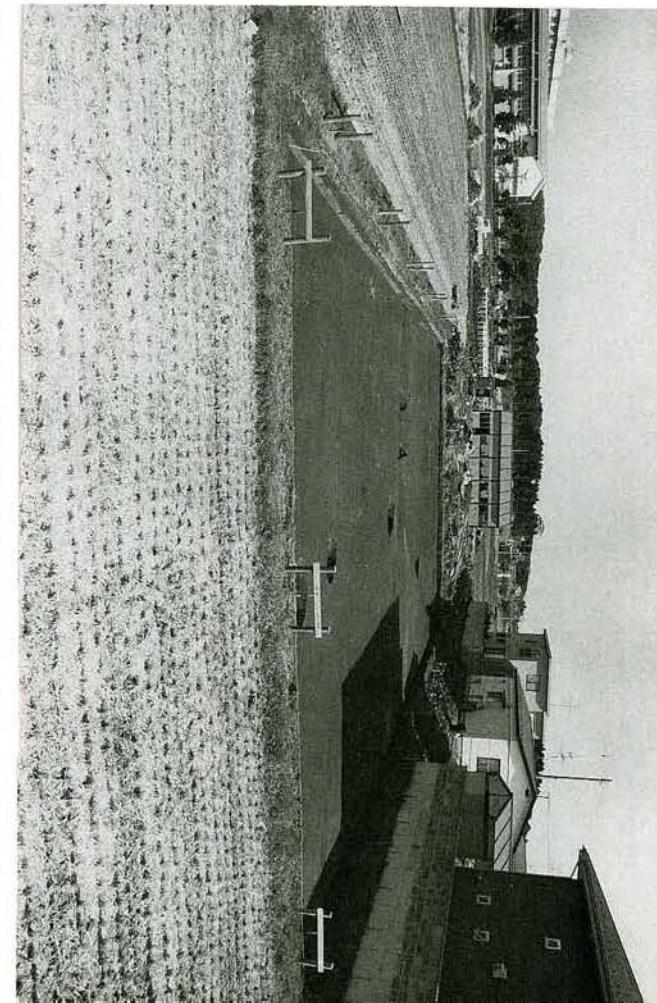


図1 おもな植物の推定生産量と変遷

(注) ◀印は50cmのスケール

図版 1

整地層上面全景
(西から)



図版 2

SD 263・264溝跡
(北から)



図版 3

遺構全景
(西から)



図版4
調査区東側遺構全景
(南西から)



図版5
調査区東側遺構全景
(北から)



図版6
SD 301溝跡
(東側から)

図版 7

SD315溝跡断面



図版 8

SD283溝跡

(西から)



図版 9

pi t55遺物出土状況

(北から)



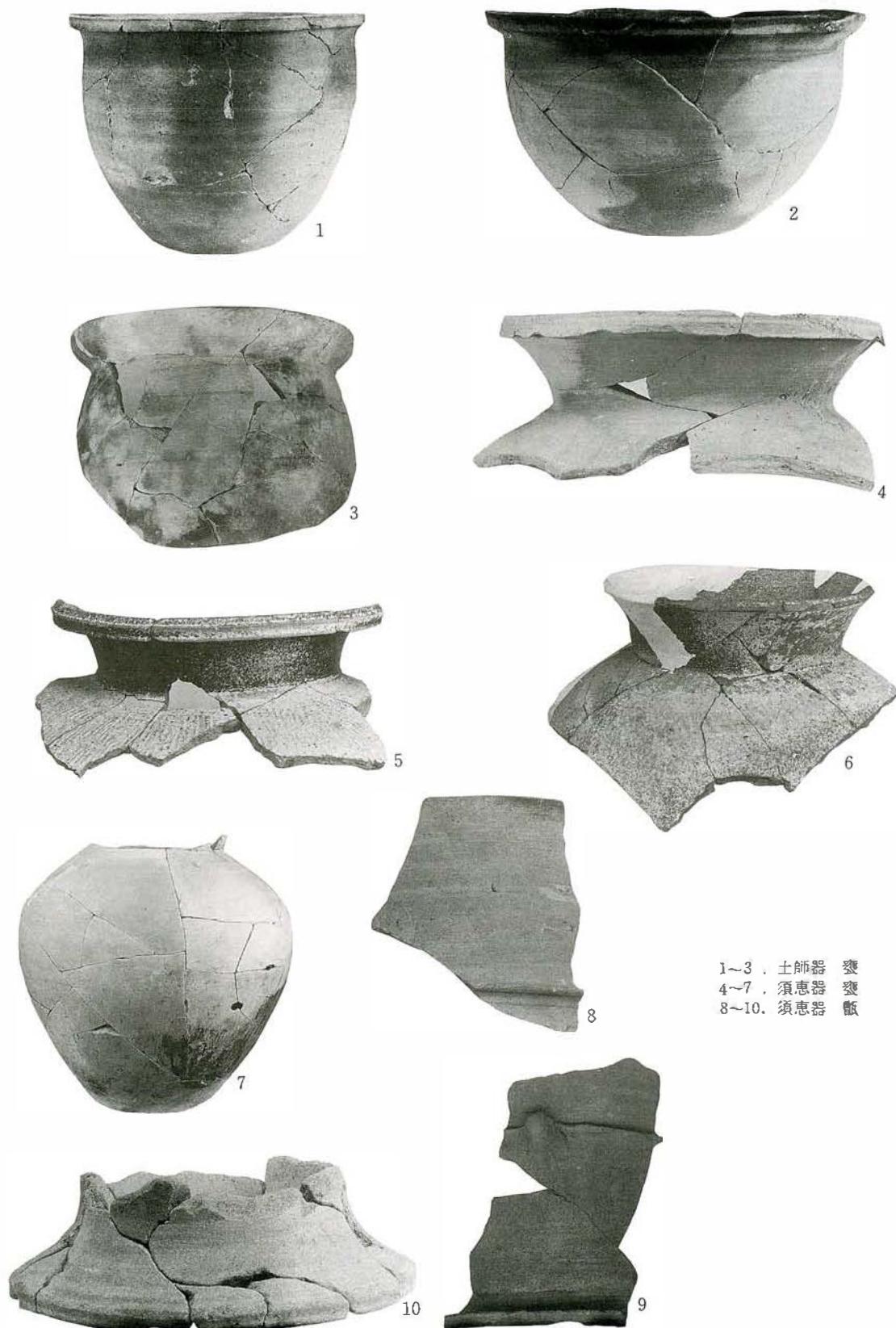


1~8. 須恵器 杯
9~13. 土師器 杯

圖版10 出土遺物

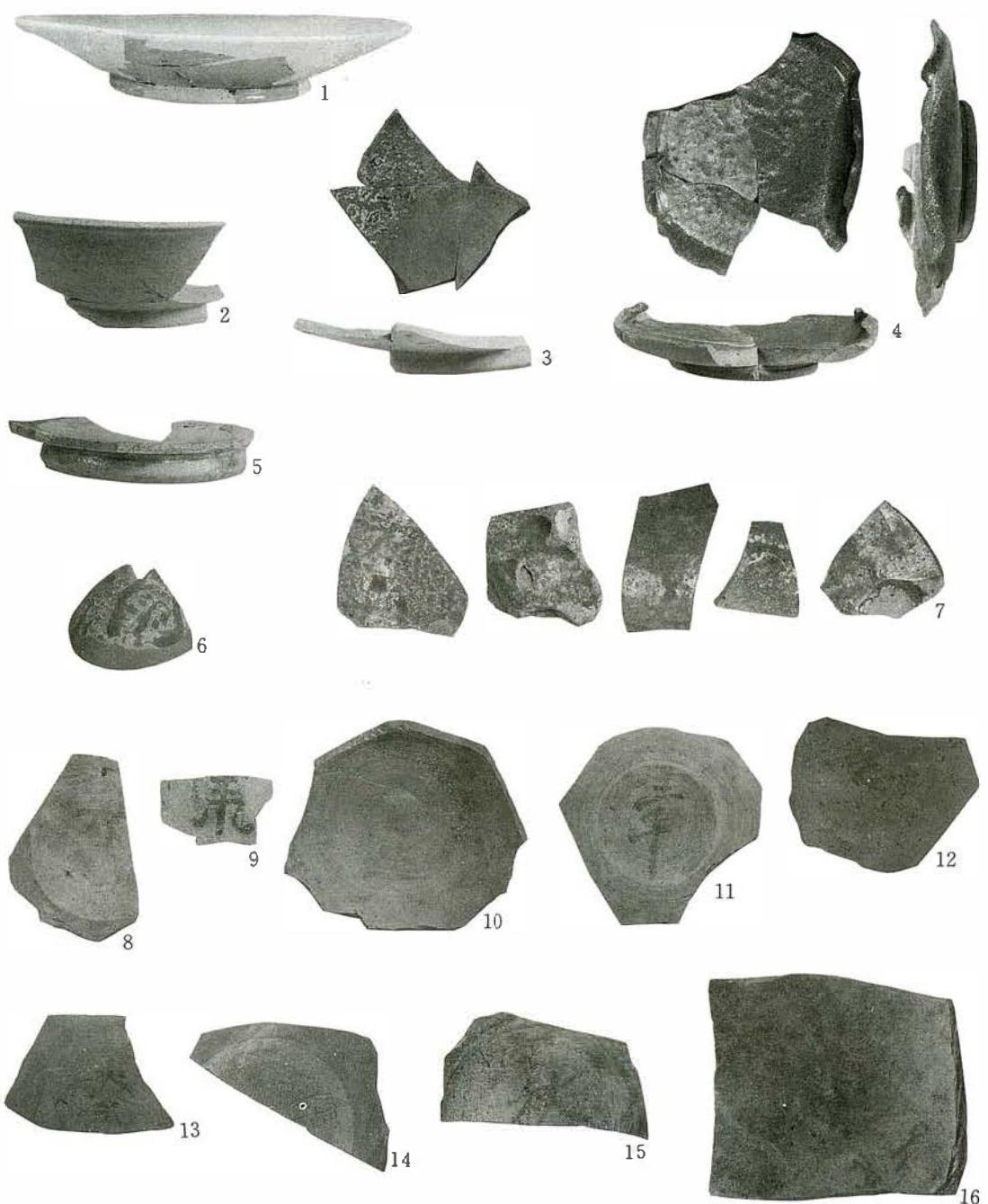


圖版11 出土遺物



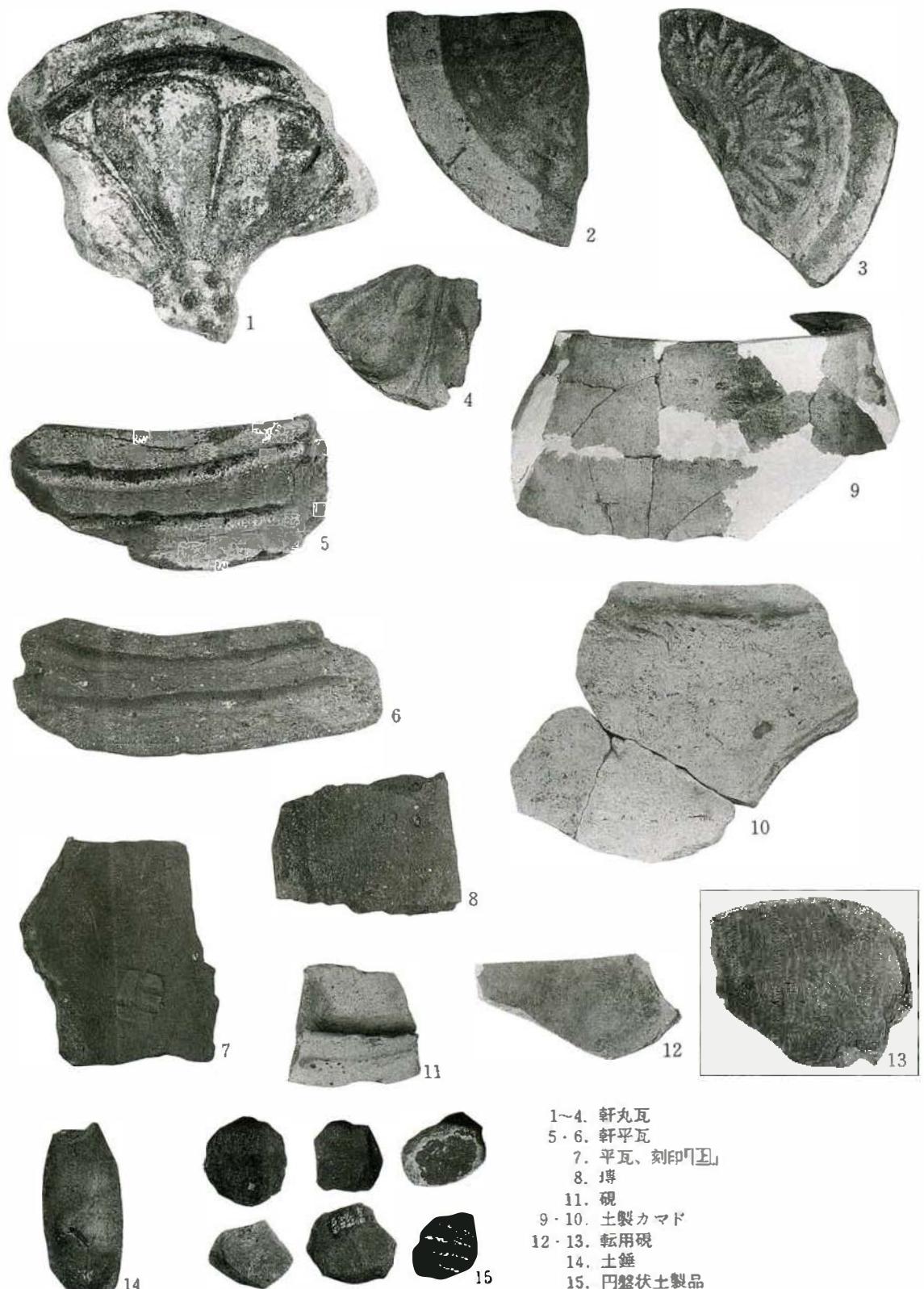
1~3. 土師器 瓢
4~7. 須恵器 瓢
8~10. 須恵器 盆

図版12 出土遺物



- | | | | |
|---------|----|------------|----|
| 1. 線釉陶器 | 盤皿 | 6. 灰釉陶器 | 皿 |
| 2. 灰釉陶器 | 碗 | 7. 灰釉陶器 | 破片 |
| 3. 灰釉陶器 | 皿 | 8. 9. 土師器 | 杯 |
| 4. 灰釉陶器 | 耳皿 | 10~15. 須恵器 | 杯 |
| 5. 灰釉陶器 | 皿 | 16. 須恵器 | 甕 |

図版13 出土遺物



1~4. 軒丸瓦
 5·6. 軒平瓦
 7. 平瓦、刻印「工」
 8. 塚
 9. 砥
 10. 土製カマド
 11. 砧
 12. 土鍤
 13. 土錐
 14. 円盤状土製品
 15.

図版14 出土遺物

多賀城市文化財調査報告書第24集
市 川 橋 遺 跡
平成元年度発掘調査報告書

平成2年3月31日 発行

編 集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
発 行 多賀城市中央二丁目27番1号
電 話 (022)368-0131~4
印 刷 (有)伊藤印刷所
多賀城市下馬五丁目1番7号
電 話 (022)362-0805
